

372.3
0.75
2



始



1899

372.3  
0.75  
2



歐

米  
教  
育  
史

文學博士 大瀨甚太郎著

東京 成美堂發行

大正  
14. 8. 14  
丙午

257.2 26

序言

著者は曩に歐洲教育史、續歐洲教育史及び最近世歐米教育史を著述し、教育を歴史的に研究する人に多少参考となるものを與へた積りである。然るに不幸にも大正十二年の震火災により其の紙型を焼失し、是等の書は悉く絶版になつた。因て今回更に之を一巻に纏めて出版することにした。本書の内容の大部分は前記の數書から採つたが其の章節の配列上に多少の變更を加へ、又大體に於て古い時代を簡約にし、近世を比較的に詳しくした。最近世及び現代の教育には特に注意し、此の點に於ては新材料を採り新論述を加へたのである。

大正十三年十二月

著者識す

# 歐米教育史

## 目次

緒論 教育史の任務、領域及び價值	一頁
第一編 上古の教育	一三
第一章 ギリシヤの教育	一三
第一節 總論	一三
第二節 實際的教育	一九
(一) ドリヤ種族の教育	一九
(二) イオニヤ種族の教育	二二
第三節 理論的教育	二八
(一) ソクラテス	二八
(二) プラトーン	三四
(三) アリストートル	四四
(四) ギリシヤの晩年に於ける哲學派と教育	五三
第二章 ローマの教育	六〇
第一節 總論	六〇

第二節 實際的教育……………六三

(一) 共和期の教育……………六三

(二) 帝國時代の教育……………六七

第三節 理論的教育……………六九

(一) キケロ……………六九

(二) セネカ……………七四

(三) タインチリヤヌス……………七九

(四) プルタルコス……………八六

第三章 中古に於ける基督教教育……………八九

第一節 基督教教育の本質……………八九

第二節 教育者としての基督……………九四

第三節 基督教教育の初期……………九七

第二編 中古の教育……………一〇二

第一章 總論……………一〇二

第二章 中古教育の第一期……………一〇八

第一節 僧庵學校……………一〇八

第二節 カール大帝とアルクイン……………一一一

第三節 ラバヌス・マウルス……………一一三

第三章 中古教育の第二期……………一一六

第一節 十二世紀以後の社會的變動……………一一六

第二節 武士の理想と其の教育……………一一八

第三節 市民と都市學校……………一二二

第四節 大學の設立……………一二五

第五節 スコラ哲學……………一二九

第六節 新宗教團……………一三一

第四章 ユダヤ人及びアラビヤ人の教育……………一三四

第三編 近世の教育……………一四〇

第一章 文藝復興と人文主義……………一四〇

第一節 總論……………一四〇

第二節 歐洲諸國に於ける人文主義……………一四九

第三節 人文主義の教育者……………一五七

第二章 宗教改革と教育……………一六五

第一節 宗教改革と人文主義……………一六五

第二節 ルーテル、メランヒトン及びブーゲンハーゲンの教育上の功績……………一七一

第三節 教育に於ける宗教改革の影響……………一八二

第三章 セシユイット團體と教育

一八六

第一節 セシユイット團體の起原と其の教育的活動

第二節 セシユイット團及び其の教育法の批判

第四章 實學主義の勃興

二〇二

第一節 總論

第二節 佛國に於ける實學主義の先驅者

(一) フランソワ・ラブレ

(二) ミセール・モンテリニ

(三) デカートの方法論

第三節 英國に於ける實學主義の代表者

(一) フランシス・ベーコン

(二) ジョン・ロック

第四節 獨國に於ける實學主義

(一) ウォルフガング・ラトケ

(二) アモス・コメニウス

第五章 宗教界の實學的傾向と其の教育上の影響

二五六

第一節 ジヤンセン主義とホール・ロザヤール

第二節 フェネロンと女子教育

第三節 信念主義

二六九

(一) 信念主義の起原

(二) アウグスト・ヘルマン・フランケ

第六章 十七世紀の實際教育の概観

二七九

第一節 ドイツに於ける實際教育の新傾向

第二節 フランスに於ける教育界の状況

第七章 ジヤン・ジャック・ルソーの自然主義

二九二

第八章 汎愛主義

三二一

第一節 總論

第二節 汎愛主義の代表者

(一) ヨハン・ペルンハルド・バゼドウ

(二) クリスチヤン・ゴットヒルフ・ザルツマン

(三) 其の他の汎愛派

第九章 主理的實利的傾向の反動

三三七

第一節 總論

第二節 カントの教育思想

第三節 新人文主義

第十章 十八世紀の教育の概観

三五六

第一節 ドイツに於ける啓蒙時代と其の時代の教育……………三五六

第二節 フランスに於ける國家教育の起原……………三六六

第十一章 ヨハン・ハインリッヒ・ベスタロッチ……………三七九

**第四編 最近世の教育……………四〇八**

第一章 ベスタロッチとドイツ國の教育……………四〇八

第一節 十九世紀初期に於けるドイツ國教育の新發展……………四〇八

第二節 ベスタロッチ派の代表者……………四一三

第二章 國家的社會的教育思想の發展……………四三九

第一節 緒言……………四三九

第二節 フイヒテと國家的教育……………四四二

第三節 シュライエルマツヘルと社會的教育學……………四四二

第四節 パウル・ナトルプ……………四四九

第五節 パウル・ベルゲマン……………四六三

第六節 ジョン・デューイの社會的教育論……………四七四

第七節 ゲオルグ・ケルセンスタイナー……………四七九

第八節 公民的教育運動……………四八八

第三章 哲學的的心理的教育……………五二二

第一節 ヨハン・フリードリッヒ・ヘルバルト……………五二二

第二節 教育學者としてのヘルバルト及びヘルバルト學派……………五七一

第三節 フリードリッヒ・エドアルド・ベネケ……………六〇三

第四節 ベネケ派の教育家……………六一九

**第四章 新心理學と教育……………六二四**

第一節 教育研究の新傾向……………六二四

第二節 成長又は調整としての教育……………六四五

第三節 モンテッソーリ方法……………六五三

第五章 自然的個人主義の教育……………六六六

第一節 ハイバート・スペンサー……………六六六

第二節 フリードリッヒ・ニツチエ……………六八五

第三節 自然主義に基づく現代の教育改造說……………六九二

第六章 道德主義及び人格教育……………七一九

第一節 道德主義……………七一九

第二節 人格教育論……………七三七

**第七章 藝術教育……………七五四**

第一節 藝術教育運動の由來……………七五四

第二節 藝術と反知識的個人的傾向……………七六六

第三節 藝術と社會……………七七四

第四節 藝術教育と徳育……………七八九

第五節 藝術教育上の二傾向及び藝術教育の方法に関する思想……………七九五

第八章 作業主義……………八〇九

第一節 緒言……………八〇九

第二節 作業主義の公民教育的見地……………八一二

第三節 實用主義と作業主義……………八二六

第四節 作業主義及び作業學校に對する批評……………八三三

第九章 理想主義の教育……………八五四

第一節 現代の理想主義……………八五四

第二節 理想主義の教育者……………八六〇

第十章 最近世の學校教育……………八九七

第一節 緒論……………八九七

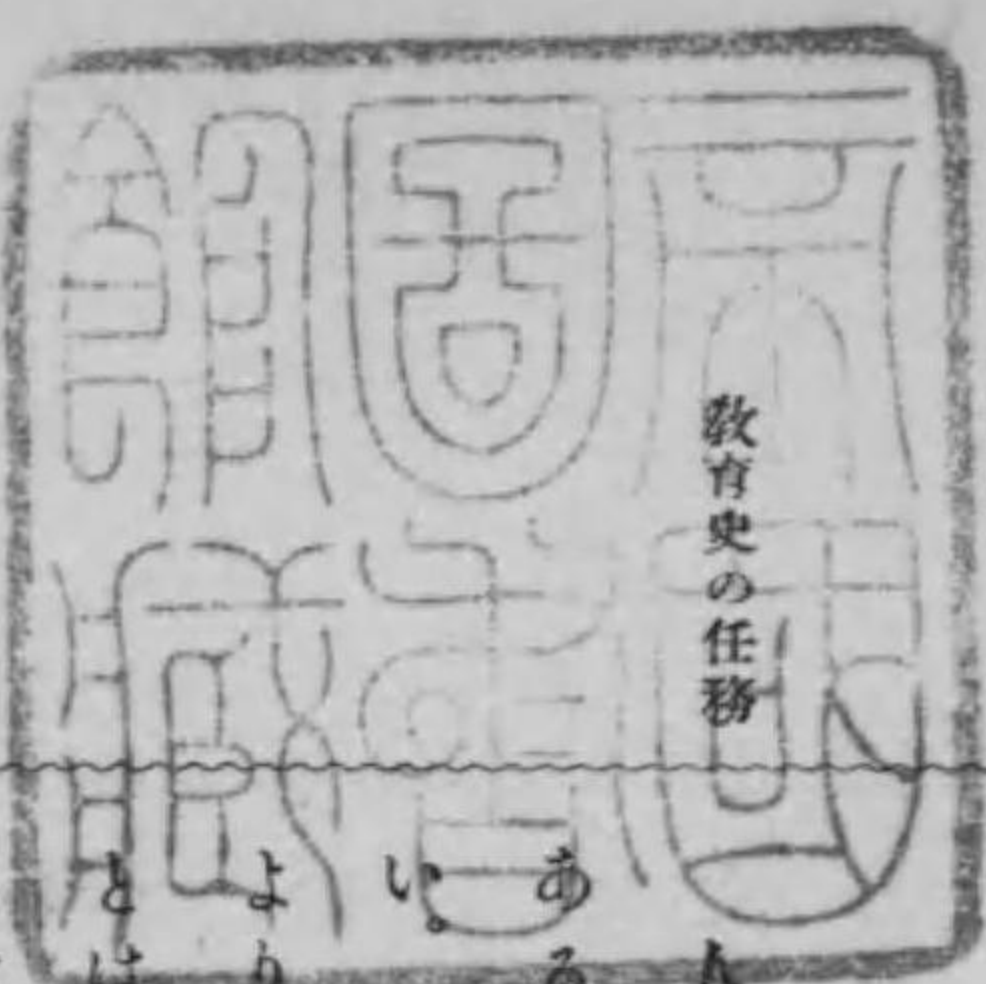
第二節 ドイツに於ける學校教育……………八九九

第三節 フランスに於ける學校教育……………九一四

第四節 イギリスに於ける學校教育……………九三一

第五節 北米合衆國に於ける學校教育……………九四六

目次終



# 歐米教育史

## 緒論 教育史の任務、領域及び價值

人類が教育により其の生活を繼續し、變遷し發達し來つたことは明かである。人類の存在する限り教育は其の生活の重大な要素であるに相違ない。而して此の要素其のものも古くから種々の形となつて現はれ、時代により性質を變化して人類社會の盛衰の源をなし、國民興亡の因をなしたことは事實である。こゝに吾人は教育史の重要な任務を認める、即ち教育史は古來教育に關して實地に行はれ、思惟せられ、論究せられたことを詮索、調査し、其の真相を明かにしようとするものである。而も人類の生活は單なる繼續でなくして目的にまでの進行であり、個人の生活と同様に社會も亦假令必ずしも明瞭な意識によらなくても、常に一定の目的に向つて進み、更

緒論 教育史の任務、領域及び價值



に進んで理想を構成し、之を實現しようとするものであるから、教育の歴史は單に眞實の事實を探究し列擧するだけでなく、其の相互の關係及び之が社會生活の他の要素と互に相依存することを見、個々特殊の發達も決して孤立的のものでなく、全社會生活に關聯し、時代の大勢と交渉し、思想の大潮流中の一現象であることを闡明しようとするものである。故に教育史は普通の歴史特に文明史を其の背景とする、或は寧ろ其の一部をなすものと云つてよい。社會が其の經濟上の地位を高め、學術を豊富にし、理想を構成することは客觀的に見れば社會の財産の増加であり、價値の蓄藏であり、文化の發達であつて、各人は之を増進することを目的とせねばならぬ。而も之は又人の陶冶の手段となり、其の知能を啓發し理想を發せしめるものであつて、社會に於ける總ての制度、組織、計畫は畢竟教育を目的とするものであると云つてよい。

斯やうに社會文化の發達と教育との關係の深いことは當然教育史を文明史の重要な部分とならしめる。然し之により教育史を直ちに文明史とし、兩者を混同するのは正當でない。社會の文化に關係し、知識、道德、藝術の

教育史と文明史

發達に直接間接に影響するものを盡く教育史の取扱ふべきものとするときは文明史と教育史との區別はなくなつてしまふ。教育は人が文化的財産を獲得し且新に之を創造し得る力を養ふ過程であるが故に、其の歴史は文化的財産其のものゝ變遷、發達を取扱ふものでなく、之が人を陶冶し其の性能を進める限りに於て之を考慮するものである。例へば詩歌、小説、演劇、講談の如きは一にはそれ自身に種々の變遷をなし、二には時代の精神界に影響し其の發達に資する所が多かつた、而して其の教育史に屬するのは第二の部分である。學術、技藝、職業についても同様のことが云はれる。幼稚な思想が次第に科學的研究となり、建築の様式が時代により變化し、繪畫に種々の流派を生じ、商工農業が時勢により盛衰を異にした如きは、それ自身では教育史の領域に屬しない、唯是等のものが教科として用ひられ、人の養成の計畫、施設に關係する限りに於て教育史の取扱ふ所となるのである。斯かる注意に基いて吾人は教育史の研究事項を次のやうに決定する。

教育史は一には教育の理論の歴史である、古來優秀な學者及び教育家の教育思想を明瞭にし、其の相互の關係を見、又其の哲學、倫理、心理、宗教等に關

教育史の領域  
理論的教育史  
と實際的教育史

緒論 教育史の任務、領域及び價值

する思想と連關し變遷する次第を攻究しようとするものである。二には實際的教育の歴史である。教育の實行は遠く其の理論に先立つた幼者の保護子孫の養育は其の目的及び方法についての意見の漠然として居た時でも行はれた。故に教育の理論の變遷のみを見て其の實際の状況を知ることとは出來ぬ。且理論は屢實際の狀態の反應であるから、後者の不明瞭なきには前者を十分に了解し難い。然し理論は又時としては實際の上に大なる影響を及ぼすものである。故に實地教育の歴史は教育の理論の歴史と相待ち相補はねばならぬ。而して實地教育の歴史には教育の材料及び狹義の方法に關するものと教育の組織、制度に關するものがある。上古と中古と近世とに於て又人文主義と實學主義とに於て重んぜられた材料が違ひ、教授訓練の方法も違つて居た、其の異なる所以を究め其の結果を明かにして比較に便ならしめる如きは實地教育史の務である。又異なる時代に於ける家庭の状況及び一般國民の文化の程度と實地教育との關係を見、教育を目的とした特殊の機關の起原、盛衰を示し、國家の他の制度と其の相影響した點を考察することも亦實地教育史に屬する所である。斯かる研

究が現代教育の上に有益な參考材料を供することは見易い所であらう、此のことについてデルタイ教授は次のやうに云つて居る。「教育學は社會に於ける教育、教授、學校及び是等に關しての複雑な組織の起原について究めることを要する、而して之が爲め旅行家が野蠻未開の人民間に於て觀察した所を參考し、又現今の文明國の古代の狀態を顧みて一定の形式が相互に少しも關係のない國民間に於ても一樣に現出するを見、之が社會の他の事業の進歩に従ひ、一樣の順序に於て發達することを明かにし、更に進んで教育及び學校が家庭、團體、國家及び教會と相關する點を討究し、是等のものが各時代各國民に於て常に教育の要素であつたことを認め、教育の方針を決定するについては是等の要素を偏頗なく顧慮せねばならぬことを見、又個人の權利と是等の外部的組織の要求との正しい關係に於て學校法令の基礎の存することをも明瞭にせねばならぬ。

教育史は又教育者の活動の歴史である、此の點は普通、史家の論述を最も困難と感ずる所であり、又屢看過する所であるが、精密な且鋭敏な科學的考察を要し、理論的研究として價值があり、又實地教育者を益することも甚だ

多い。抽象的理論は實地上何等の効果を生じないことがあり、又其の大なる價值を生じ得るものも、教育者の人格及び其の伎倆に依るものである。組織制度が完備しても實際教育の任に當る人を得ないときは其の効果を收めることは出来ない。故に古來大教育家と稱へられ教育的天才を有して居た人の心的状態を究め、困難に臨んで其の意志の益鞏固となり、其の技能の益圓熟した有様を見、其の修養の順序、苦心努力の形跡を明かにすることは教育者の品性を養ひ、其の修養に資することが少くない。此のことについて、メルタイ教授は次のやうに云つて居る。「教育者の仕事は其の取扱ふ幼者の精神の自發力に依存する。若し能く其の精神上の法則を知り、之を利用する方法を覺るやうになれば、大に幼者の發達を助けることが出来るに相違ない。然し之は一種の技術に屬するものであつて、容易に學ぶことは出来ぬ。故に教育學に於ては教育的天才の何たるかを分解的に説明して教育者とならうとする者に其の地位の貴いことを感せしめ、其の職務についての熱心の情を起さしめねばならぬ。例へばソクラテス、プラトリー、コメニウス、ベスタロッチ、ヘルバルト、プラーベルの如きは教育的天才と認めら

れる人物であるから、是等の人々について如何なる點に於て其の天才の根據の存するかを究めるのは興味があり、且有益な研究である。教育史は實に斯かる研究を其の任務の一部とするものである。而して之によつて自己の修養に勉めるのは教育者の務である。然るに今日の教育界に於ては一般に理論を過重する傾向がある。高尚な學理を口にしなければ教育者たる資格のないものゝやうに感じ、古來の大教育家の眞に貴むべき點が其の理論上の知識よりも寧ろ其の人と爲りに於て、又其の實地的動作に於て存することを覺らないやうである。嘗てルソーが「多言な汝の教育は多言者を養成するに過ぎない」と云つたことは、教育者養成の上にも警句と認むべき所である。

以上述べた所で教育史の價值は明かであると思ふ。總て變遷し進歩するものは其の経過の道に於て攻究することを要する。現に在ること及び將來あるべきことを明かに定めようとするには、嘗て如何に在つたかを知らねばならぬ。而して教育の事業の如きは最も多く斯くの如き研究法を要するものであらう。人が其の幼者を養育し、之に其の心的財産を傳へようと

して種々の設計をなし、方法を考出することは數千年の昔に於て既に見る所であつて、今日に至るまで一般精神界の變動と關連し、他の諸般の事業と相應じて種々の形を取り、盛衰の狀況を異にした、其の關係を明かにし、原因を究め結果を見、其の變遷が唯偶然の一次的發生でなくして人類の大發展の一段階たることを知ることは實に有益であり興味があると同時に又眞の科學的研究である。之についてレトマン教授は次のやうに論じて居る。「教育史は一の歴史の科學であつて文明史の缺くべからざる大切な部分である。又科學的根柢と價值とを有することに於て他の歴史の知識と同様の要求を爲し得るものである。教育史は人の心的生活の科學の上から見て頗る價值がある。一時代が次の時代に及ぼす影響及び此の關係が文化の條件の變化、歴史上及び地理上の異なる關係の下でとるやうになつた異なる形式は、心の歴史の最も興味深い方面である。此の點に基いて構成せられた教育史は實に一の科學である。假令直接實地的價值がなくても最高の理論的科學たる資格のあるものである。」

教育史は科學的研究であるのみでなく實地教育に大なる參考材料を與

へることは既に見た。元來人は其の現に生存する社會と關係すると同様に過去の人類の生活とも分つことの出来ないやうに結合されて居る。彼は即ち過去の人類の收得して彼に遺した心的財産を受け、之によつて知らず識らず其の内外の生活を決定するものである。従つて若し現時に於て深く將來を推察し、生活の必要を満たし、其の任務を盡さうとするならば今日に至るまでに既に生じた所を知つて之に結合することを求め、現に存する種々の要素を計量して進まねばならぬ。知識の如何なる範圍に於ても眞理は決して孤立した人が單に其の頭腦から編出したものでない、必ず其の前代者が決定し成就した所を見、歴史上不當として示されたもの及び正當として久しく保持せられたものを明かにし、尙進んで如何なる點に於て如何なる方法によつて新に矯正補充の働を加ふべきかを究めることにより漸く達せられるものである。一般に人の心的生活の歴史の興味あり價值あるのは此のことに由のであるが、特に教育の歴史に於てこれが認められる。シュミッドは其の教育史の緒論に於て次のやうに論じて居る。「教育史は教育者の觀界を擴張し教育上の種々の關係及び活動についての活

激な思想を與へるものである。主觀的考察だけでは斯かる効果を生ずることは出来なく、又これに代る利益をも得難い。教育史は事實的客觀的批評で個人の主觀的批評を補ひ、斯くして適當なものと不適當なものとの間に正しい區別を立てしめ、徒に新奇を好む傾を矯正し、外面の光彩は屢人を眩惑せしめることを覺らしめ、又人生には絶對的休止の状態がないから一切の改進を拒絶するやうな保守主義の不當なことを教へ、傳來のものを保存するに止まらず、時勢の要求に應じて之を進化、發展せしむべきことを了解せしめるものである。自己の職務の歴史的考察を缺乏するものは偏頗に傾き、思慮乏しく皮相的であるを免れない。殊に教育史は傲慢心を去らしめるに適する。教育者は之によつて自己を少年教育の任に當るもの、團體に屬することを覺り、數百千年來個々の人及び團體が幾度の失敗と成功とを重ねて構成した事業に干與することを思ひ、如何なる廣大な遺産を前代から相續したかを考へ、且又教育者の勢力以外に立つて其の業務を補助若くは妨害するもの、少くないことを察し、自然に謙遜に傾き、自己の知能を過信するやうな弊風に陥らないであらう、而も彼は既に獲得された基

礎の上に築かれ正しい出發點を有する所の誠實な事業が後に能く成功し得ると云ふ確信を懷き之により其の勇氣を持続するであらう云々。又カール・シュニツトも其の著書「教育史」の緒論に於て次のやうに云つて居る。「教育的科學の價值を知らず、理論に合はない實際で満足するやうな人は教育史を著實に學ぶことの價值を覺り得ないであらう、之に反して唯科學のみが生活及び其の現象について明瞭な意識を付與することを覺り、現時は唯過去の結果であることを知り、能く現在を知るには其の發達の條件及び根源を究めねばならぬことを了解するものは、現時の教育の眞の務を明かにするには教育の歴史的經過を見、之により參考とし依るべきものを求めねばならぬことを理解するであらう。數百年來の經驗に對して個人の僅少な經驗は何の價值があるか、現時の教育に於て成就し得る所を知らうとするならば既に如何なることが遂行せられ且考へられたかを學ばねばならぬ。教育の何たるを知り、其の眞の價值を知るものは數世紀の經過に於て教育の理想の發達を追究したものに限り、現時の科學的教育を理解し、獨特の意見を定立し得るものは唯教育の歴史を究めたものに限る。教育史

は又、教育者をして自己のなしたことに關して謙讓ならしめ、時々生起する現象を正當に評價し得しめる、何んとなれば彼は屢自己及び他人が始めて發見し、又成就したとして誇ることが以前に既に一層能く行はれ、而も漸次其の不當な點が認められて遂に消滅したものであることを見るからである。教育史の基礎のない教育學は基石のない建築物の如きものである、吾人は教育史其のものを教育學の最も完全な且最も客觀的の系統と認める。要するに教育史は一の科學として興味ある研究の對象であり、又實地教育の一大指導者たるものであつて、教育の深い研究には必ず其の補助を必要とする。故に教育の科學的研究の一面は確かに其の歴史を知ることである。

## 第一編 上古の教育

### 第一章 ギリシヤの教育

#### 第一節 總論

ギリシヤ人の  
特質と其の國  
土

ギリシヤ人は歐洲最古の文化國民であつて、近世文明の基礎を立て、人道の發展に多大の貢獻をなした。従つて其の世界史上の地位は重要な意義を有し、永久不滅の價値あるものである。而して此の國民をして上古に於て他國民に卓越せしめた其の心身上の特質及び心身の發達の善い均衡は其の居住して居た土地に關係したことが少くなかつた。即ち其の國土の地位が良好であり、地味が豊饒であり、氣候が適度であり、空氣の清淨であつたこと等は總て優秀な心身の發達及び嘆賞すべき心身上の調和を生せしめるに適した。善く發育し、強健であつて活力に富む身體は、製作を好み、明瞭に思索し、決斷力に富み、自由及び獨立を愛し、總て善たり美たるものについて趣味を有し、深く人類の價値を感ずる精神と相應じてギリシヤ人民の

特質をなし、彼等をして此の點に於て不朽の名をなさしめ、彼等の發展の歴史に於て之を總ての方面に發現せしめた。即ち言語、詩文、音樂、彫刻、建築に關する藝術及び科學は、彼等により一部は單に漸く發芽するに至らしめられただけであつたけれども、一部は既に最も優れた形に於て榮へるやうにならしめられたのである。

斯やうなギリシヤ人の心身上の特質は、其の教育及び教化の目的及び方法を決定した。ギリシヤ思想に於て完全な人と云ふのは、心身共に其の總ての性能に於て能く養成され健康であり、優美であり、快活であり、其の全容貌が單に機械的の善い發育を示すだけでなく、内部の調和した發達を表示し、十分に進歩した自由の徴と見るべき勇氣、溫和及び思慮を發表するものを指すのである。ギリシヤ教育は即ち斯かる人物を育成することを目的とし、個人に於ける總ての天性及び勢力を圓滿に調和的に發展せしめ、人性を其の全方面に於て高尚優美ならしめることを其の最高理想とした。故に教化は職務の準備の爲めの作業及び實習と嚴密に區別された。自由民は實利實益の爲めに學び、教化を生活の手段とするものでない、高尚な興味を

ギリシヤ教育の理想

求めようとして修養するものである。即ち彼等は事物其のものゝ興味に由るか、又は友人の爲めにするか、又は道德の爲めか、又は閑暇の時を價值ある仕方消費するが爲めに學を修め術を磨くべきものとせられた。要するにギリシヤ人は教化を人の裝飾とし、光彩と名譽とを表彰する金冠に比すべきものとした。而して此の最美の裝飾たる教化は強迫的方法による知能の傳授と同一視せられなかつた。自由民は如何なる知能をも屈從的態度で受納するものでない、自意に基き學術を修めるものは創造的に働くことが出来る、學習者が精神内容を支配することが益自由になり且益創造的に進み得るに従ひ教授は益有效となると信せられた。

個人の性能及び其の自治的能力を調和的に且自由に發育せしめようとする思想は古代に於てギリシヤ教育の特有のものであつた。ギリシヤ人は奴隸的屈服の經驗なく、自由な人として其の總ての天性及び勢力を自由に發展せしめる權利を享受し、教育に於ても之を其の理想としたのである。然し其の自由とは決して放恣、無規律の義ではなかつた。ギリシヤ人の倫理、宗教及び政治上の觀念に従へば人の眞の且最高の動作は其の性質

ギリシヤ教育と國家

上の固有の法則に従ふと同時に一般的秩序及び規定に服従するときに見ることが出来る。而して斯かる規定は國法に於て現はれて居る。國家は人が其の自由な活動に於て善美の生活を経過しようとする運命を全からしめる爲めの必要な且自然の形式である。個人は國家の成員としてのみ價值があり國法に従ふことに由つて眞に自由な活動をなし得るものであるから、教育は人をして自己の利害を全く國家の利害と一致せしめるやうに努め、道徳的陶冶は公民としての道徳を進めることを其の任務とせねばならぬと云ふのである。要するにギリシヤの教育は個人性の圓滿な發展を理想とするけれども、其の發展は畢竟國家の繁榮進歩の爲めに役立つべきものであつた。

## 自由民の教育

ギリシヤに於ける自由民とは土民及び奴隸の上に立つ支配者階級であつた。而して彼等のみが眞に國家の成員であり、教育を受けることが出来たのである。思索し學習する閑暇を有する自由民のみが修養に適するものとせられ、之に反して直接生計を立てる上に必要な勞働作業は奴隸的業務と見られ教育に依るべきものでないとせられた。現代の意味の自由及び

## 體操と音樂

國民教育はギリシヤ思想中にはなかつたのである。

ギリシヤ教育に於て身體と精神との調和した發達を貴重したことは、體操と音樂とを主要手段とするに至らしめた。前者は身體を練り、後者は精神を陶冶し、兩者相待つて教育を完成するものと信せられた。ギリシヤ人は體操の眞の價值を知つて居た。彼等は之を、心的陶冶の基礎的要件たる身體の健康、強壯、美麗及び熟練を進め、身體をして公私生活上の活動に適せしめるものとし、忍耐、勇氣、克己の美風を生せしめるに就いての重要な手段とした。而して其の種類は走術、飛術、投擲術、相撲術の五種に分たれた。走術は主に歩行の速なこと及び忍耐力を練る目的で行はれ、飛術は主として長飛を練習し、身體を敏捷にすることを目的とし、投擲術は右腕の練磨及び指の彈力を強める爲めに行はれ、投擲術も亦右腕を練り、兼ねて距離を正しく測定する視力を練らうとするものであつた。相撲は體操中の最も價值あるものと信せられた。之は他の諸術が單に身體の一部分を練るに反し、全身の活動を要し、又常に相手を要するが故に腕力及び技能を比較し試験する機會を與へ、決斷力を養ひ、又沈着な節制ある態度をも練るに適するも



のとせられた相手の態度に注視し、其の間隙に乗じ、而も一定の法則を守り、禮讓を忘れることなく、粗暴の舉動を慎むことは此の術を練習するもの、特に注意すべき所であつた。ギリシヤ人は體操の外遊戯をも行つた、彼等は愉快な遊戯が如何に想像及び思考の發達に必要なかを知り、烈しい體操的運動の間に之を行ひ、運動の緩急の正しい更代によつて心身の調和的發展を生せしめようとした。然しながら兒童の遊戯としては活潑な運動を練習するに足るものを用ひ、體操の豫備として之を行はしめた。音樂的陶冶は心の陶冶に必要と認められた總てのものを包含し、個人をして精神上的の公共財産に對して多様の且細微の受納力を得しめることを目的とした。此の陶冶は初めは讀方、書方の教授及び唱歌、樂器の練習から成立つて居たが、後學術の進歩するに従つて其の内容を増加し、文法、修辭、辯證法、算術、音樂、幾何、天文の諸科を含むことになつた。

ギリシヤ人の理想と其の教育の解釋について有して居た立脚地とは共通不變の特徴として其の歴史に於て一般に認められるけれども、教育の方法は其の異なる種族間の異なる事情に應じ、又其の發達の異なる時期に於

て異なつた、此ことは特にドリヤ種族とイオニヤ種族との間に於て認められて居る所であるから、次に兩種族の教育法について一言しようと思ふ。

## 第二節 實際的教育

### (一) ドリヤ種族の教育

ドリヤ種族を代表するものはスバルタ人であつた。スバルタに於ては大立法家で且大教育家であつたリコルゴスにより教育及び教授は密接に國家的制度に結合せしめられ、國家の統一と勢力とを保存する根柢とせられた。即ち其の教育の任務は善良な公民を養成し、之をして國家の爲めに進んで自己の一身を捧げ、祖國の爲めに戰つて死することを無上の名譽とし、之によつて國法に對する從順を最良最美の方法で實現し得ることを意識せしめるに在つた。個々の人は全く國家に從屬し、國家的團體の所有であり、團體以外に於て生存の權利のないものと見做された。要するにスバルタ人の理想は國家に盡す勇敢な兵士であり、教育の目的も亦之に外ならなかつた。斯かる教育は畢竟スバルタ人の政治上の地位から來つたもの

スバルタ教育の目的

であつて、眞のドリヤ種族たるスバルタ人よりも遙に多數の土人及び奴隸を支配するについて勇敢強壯な人民を養成せねばならなかつたのである。故にスバルタ教育は支配者階級の子弟をして其の階級の優越した地位を保持せしめる爲めの特別訓練であつた。

スバルタに於ける個人は國家の財産であつた。初生の男兒は總て官吏によつて其の體格及び健康状態について検査せられ、唯其の強健で將來兵士となる望あるものゝみが生存することを許された。而して其の七歳に達するまでの教育は家庭に任されたが、其の時に於ても政府の任命した兒童監督官があつて柔弱な教育法を警め、兒童の不法な行爲をも罰した。其の他一般に長者は、自己が教育者であると云ふ考を以て兒童に對し、其の不當の行爲を見るときは之を罰した。而して之を怒るやうな父母は一般の擯斥を受けたと云はれて居る。七歳後の男兒は總て家庭を離れ、官立の共同教育所に入り、政府の任命した監督者の下に生活せねばならなかつた。此處で彼等は鍛鍊的教育を受け、軍隊的從順の精神と共同心とを發するやうに導かれた。即ち夜は乾草又は藁の上に臥し、夏冬共に帽を用ひず、輕衣、跣足に慣

スバルタ教育の方法

らされた。又食物は粗惡で且分量も少かつた爲め、彼等は食品を盜まざるを得なかつた。而して此のことは軍事上必要事項とせられたのみならず、其の方法が巧妙であつて、發見せられることなくして能く其の目的を達したものは寧ろ褒賞せられた。然し發見せられ捕へられたものは嚴罰を受けねばならなかつた。尙兒童は苦痛に耐へる練習として鞭うたれると云ふ規定があり、之が爲め絶息して死に至るものもあつたと云はれて居る。三十歳に達した者が始めて成人と見做され、解放され、獨立して家庭を組織することを許されたのである。

教育の主要方法は體操的練習であつた。兒童は熱心に走術、飛術、投術及び相撲を練磨し、十八歳以上の青年組に屬するものは更に擊劍、乘馬、水泳、狩獵の諸術を練り、又軍事的舞踏を學んだ。之に反して知的陶冶は甚だしく輕視せられた。讀方、書方の如き初步的知能でも幼者教育の規定的教科でなかつた。唯人々は生活上其の必要を感ずるに至つて私に之を學んだに過ぎない。従つて其の學習は高尚な心的陶冶の爲めにせられたものではなかつた。唯音樂のみは大に貴重せられた。之は其の能く人を奮起せしめ、意志を刺激

體育偏重

し勇氣を保持せしめるに足ることが認められたからである。實際音楽は體操及び軍事的舞踏と結合して屢用ひられ兒童期のものにも既に樂器の練習が課せられた。

女子の教育

女子に對しても法令は總て軟弱な教育法を禁止し、男子に對すると同様簡單で嚴格な體操的及び音樂的教育法を規定し、女子をして國家の爲めに健全強壯な子供を生むべき務を盡さしめようとした。其の結果スパルタ婦人は常に體質の強健、容貌の美に於て一般のギリシヤ婦人に秀でて居たのみならず、又能く貞節を守り、離婚の如きを殆ど信すべからざる罪惡とし、家婦としては善く家事を整理し、母としては其の子を勵まし、國家の爲めに一身を犠牲に供せしめたと傳へられて居る。

(二) イオニヤ種族の教育

ギリシヤに於て純粹にヘレナの精神を有し、自由獨立の個性を最も善く保持し且最も明かに表示した種族はイオニヤ族であつた、而してアテネ人は又其の代表者あつた。アテネ人は政治上にも教育及び教化上にも自由な個人性の權利を貴重し、人の自由な發育を公民となる最良準備としたが

アテネ教育

爲め、其の學術發達上の功績著しく、アテネ市は遂に全ギリシヤ文化の中心となつた。故に吾人はギリシヤ教育及びギリシヤ學術について云ふ場合にはアテネを其の代表者とするのである。

アテネ教育の性質及び方法

アテネ教育の最も堅實な發展をなした時期は大凡紀元前一千頃から同四百五十年頃までである。此の時期に於ける教化的事業の目的及び任務に關する思想に於ては、ヘレナの見解が最も善い形に於て現はれて居る。即ち其の教育は心身の活力及び性質を自由に且均齊的に發育せしめ内外の十分な調和を生せしめることに重を置き、彼の嚴格な法則によつて人の生活を其の最幼時から規定するスパルタ流の教育に反對した。幼者の訓練は傳來の習慣と公論とによつて決すべきものであつて、國家は唯各人に其の子女を教育する義務あることを忠告し、男兒には音樂と體操との教授を受けしむべきことを命ずるに止まり、教育についての個々の點は全く父母の注意に任すべきものとせられた。男兒の教育は七歳までは家庭の事業であり、母及び媒母が其の養育、指導に従つたが、其の時以後は學校に於て行はれた。而して學校教育が始まると同時に兒童はペダゴグの監督の

下に置かれた。ペダゴグとは兒童を導くものと云ふ意味の語であつて、各家庭に於て特に兒童を養ふ爲めに選拔せられた奴隷を指すのである。彼等は一般に正直であり、知識に富み、兒童の登校する際には學用品等を持つて之に伴ひ又種々の禮儀作法について之を指導した。兒童の初期の教育は十六歳で終結し其の後二箇年間彼等は全くペダゴグの指導の下に立ち、十八歳になつて更に高等の學校に入學し、此處で一方では初歩の教育を補充擴張し、他方では彼等が後に人として有する理想を實地に發現して働かうとする公共生活に適切な教育を受け、軍事、宗教、文學の諸方面について自由に學習するのであつた。斯くして二十歳を終るに至り各人は成人と見做され、社會に出で公民として活動したのである。尙其の全教育期を通じて道徳的要素が常に主要の地位に置かれ、禮儀ある舉動及び謹嚴なる訓練に慣れしめることによつて行爲を善方に向はしめることが努められた。女子の教育は全く家庭の事柄であつた、即ち女兒は母の薫陶指導の下に家事、裁縫、紡績等の教を受け、又適度、貞淑の氣風を養はれた。其の教育の目的は知識を進めるよりも寧ろ良家婦を養成するに在つたのである。

アテネ人の生活は初めは簡單質朴であつて、高尚な氣風と嚴正な品行及び秩序とを保持したが、五世紀の半以後に於ては一方に於て大なる學術上の進歩があつたと同時に、他方に於ては道徳的及び政治的生活上の勢力の衰退を來した。ペリクレス時代の榮華は既に古い訓練と風習との弛緩を示した。従來人は個人的自由を一般國民の利害に従屬せしめ、傳來の道徳的及び宗教的風習を確持することによつて個人及び國家を健全ならしめようとしたが、今は之に反して個人の實地的行動に於て利己的傾向と制限のない自由の風とを見るやうになつた。而して全國民の實際に行ひ且考へた所のものは彼の理論上褊狹で且淺薄な詭辯論ソフィスムに於て其の反響を見たのである。詭辯論者は、人は總てのものソフィスムの根基である、有るものについて其のあることを決し、無いものについて其の無いことを決するものは人である」と云ふ考から、總ての眞理を個々の人の意識に存するものとし、斯くして一切の客觀的の眞理、道徳的規範及び宗教を其の根柢に於て破壊した。其の結果は事物についての研究を沮止し、又事物的知識の優れたことで他人に秀で且其の上に勢力を及ばさうとする考を消滅せしめ、唯巧妙な辯論に

より假面的の知識及び眞理を生せしめることで自己の伎倆を示し修養の高いことを誇り他を壓倒しようとする傾を生せしめた。故に詭辯論者は熱心な辯論術の練習者であり、修辭から漸次に辯證法及び文法を發展せしめ、且自らは等の術に於ける熟練な教授者となり、正式の學術的教授を開始して授業料を徵集した。斯くの如く主觀主義と懷疑主義とが詭辯的思索の特徴であつたが故に青年は知識の實質についての研究を斷念し、之について何等の教を受けないで、唯人が何事をなすにも必ず要する形式として辯論を學び、他人と論争して之を混亂せしめ、斯くして他を説伏し、之を支配する術を練習した。斯かる教育は輕浮の學風を生じ、着實、眞摯の良風を破壊し、徳育上管に效がなかつたのみならず寧ろ有害な影響を及ぼした。故に識者は大に之を憂ひ時弊を打破して堅實な精神を扶植することに努力した。ソクラテス、プラトーン、アリストートルの如きは其の主なるものであつた。此のことについては尙次節に於て述べる積りである。

ケーロネアの戰敗れ、ギリシヤの自由と獨立との消滅すると共に其の不羈獨立の思想と自由な創造力とは消失し、國民の心力は政治的生活の死滅

アレキサンダー  
Iとギリシヤ  
文化

後尙殘留して居た心的財産の保護、使用にのみ向けられたのであるが、此のことも次第に社會の小範圍に限られ、多數の國民に於ては此の力すら認められなくなつた。アレキサンダーの領土擴張に伴ひ科學的研究の材料は著しく豊富となり、ギリシヤ文化は其の自然の境界を越え、廣く東方を風靡した。觀があつたけれども、總ての新らしい製作、發明に於ては最早古代に著しかつた快活、自由な創作心の痕跡を認めることが出来なかつた。又其の文化は外部の影響によつて變更、改造せられた。例へばギリシヤ語は一般の用語となつたけれども、異地方、異人種間に於て之が大に轉訛せられた如きである。科學の中心は最早アテネ市でなく、諸地方は科學を愛する精神と政略上の見地からして文化の盛大を競ひ、科學の獎勵を最要の公共事項とし、學者を其の隱退の場所から拉致し、之に名譽ある地位を與へた。殊にアレクサンドリア市は學術の最も盛大を極めた所であつて、一時文化の中心となり、其の名を其の時代に付與するに至つた。時勢の變遷に伴ひ、教育及び教授の上にも著しい變動が生じた。兒童教育は益多く家庭を離れて學校の事業となり、體操は次第に其の國家的事項たる性質を減少し、音樂は唯

交際及び娯樂の手段として僅に存して居た。之に反して學科の範圍は次第に擴張し、文法、修辭、辯證法、算術、音樂、幾何、天文が修養上必要な術として用ひられるやうになつた。最高の學校としては修辭學校及び哲學學校と稱へられるものがあつた、而して哲學にはストア哲學、エピクロス哲學、懷疑哲學等があり、各特種の意見を有し當時の精神界及び教育、教授の上に少からざる影響を及ぼした、此のことについては次節に於て述べることにする。

### 第三節 理論的教育

#### (一) ソクラテス

ソクラテスは紀元前四六九年アテネ市に生れた、父をソフロニスコスと云ひ彫刻を業とし、ソクラテスをして之を續がしめようとしたが、彼は遂に之を其の業とするに至らなかつた。彼は健全な思考力を有し哲學的考察に長じ、同時に又決して公民として又人としての務を忘れなかつた、即ち兵士として數回の戦役に臨み、勇氣と忍耐とを以て國家に對する務を盡し、公人として共和黨及び寡人黨の不當な要求に對抗して屈撓しなかつた。然

ソクラテス

し彼は其の他に於て政治に容喙することなく、自己及び同胞の知識及び道徳の完成の爲めに盡すことを其の高尚な職務と信じて居た、而して此の念は氏に於て神意の發現と見るべき活潑な形をとり、其の全生活を支配し、其の全勢力を發動せしめた、之が爲め彼は自ら極めて質素な生活をなし、常に跣足にて歩行し、粗服を着、飲食を節し、又詭辯論者のやうに金錢を收めて公に教授を行ふことを不當とし、自己の十分な自由を保持することに心懸け、又其の必要を成るべく制限して、遂には何物をも要しない神聖な域に到達しようとなつた。且彼は形式的教授に由つて知識を傳授することをしなかつた、自己の信する所を他に強ふることなく、他人の思想を試験するやうにし、眞理を傳へるのでなく、之を愛し、且道徳を欲する精神を惹起し、之に達する道を示し、表面的知識を除去し、眞の知識を之に代つて發展せしめようとした。此の目的で彼は人と對話の機會を求め、日々市場、公園及び其の他人の集合する場所を徘徊し、接近し來る人に對して其の知人であると否とに關せず先づ普通の談話を試み、巧に之を科學及び道徳の方面に轉換した。此のことは遂に好奇心に富み、求知心の強い若干の人を常に彼の周圍に牽

引しソクラテス派と稱する熱心な心服者の一團を成立せしめた。是等の人は説を同じうするが故に結合したと云ふよりも寧ろ其の師の人格に由つて統合せられ、團結するに至つたものである。而して此のことに由り彼は却つて共和黨及び詭辯論者の嫉む所となり、青年を誘惑し神を否認すると云ふ罪名の下に告訴せられ、死刑の宣告を受け、紀元前三九九年監獄内に於て毒を仰いで死去した。

ソクラテスは眞理を人の意識に於て存するものとし、「人は總てのもの、根基である」ことを信じた點に於て詭辯論者に一致して居たけれども其の個人的主觀主義には全然反對した。彼は即ち、若し人が一切のもの、根基であるならば、人の第一の務は自己を知ることであると考へ、内省及び内的集中を總ての働の出發點とし、之により一般的價值ある概念即ち眞の知識に到達すべきものとし、單なる個人的意見に反對して一般的價值ある思想により導かれることにより始めて人は道德的生活をなし得るに至るが故に知識は道德であると思惟した。彼の考によれば人は求めて惡であるのでなく無知であるから惡である、眞に善の何たるかを覺つたものは善人た

ソクラテスの  
知徳一致説

らざるを得ないと云ふのである。斯くしてソクラテスは知識を總ての正しい行爲の基礎としたが同時に又人生に關係しないものを知識として取扱はなかつた。彼以前に在つて知識及び科學の基礎からして徳を進めることの必要を斯やうに有力に論じたものはなかつた、而して彼自身の用ひた方法に於ても亦彼に獨特のものがある。次に之を見ることにする。

ソクラテス方  
法

ソクラテスの思想に従へば、教育は單に通知により又は辯論によつて知識を與へ得るものではない、人に於て思考の力を發展せしめ、彼自身の働により之を得るやうにならしめねばならぬ、思考力を有するものは最早巧に辯論することにより皮相的の輕卒な意見を保持することで満足しないで、必ず一般に通ずる眞理を究め、知識に達しなければ止まない、而して各人は自己の内に忠義、正直、眞實、高潔、友誼、智、德等に關する眞理を闡明し鑑賞する可能性を有するのである。故に彼自身の用ひた指導の方法は前にも述べた通り、連續的講演でなく繼續して發問することにより個人の思想を分解し、其の確實と信じて居たことの誤謬を意識せしめ、斯くして先づ既存の虚偽的觀念を一掃し、後彼自身で正しい知識を發展するに必要な材料を指示

するのであつた。彼の教術は精神上の出産補助法と云はれて居る。而して彼は問を發するとき、初めは其の相手の教を乞ふ如き態度を持し、其の有すると信する卓見、知識を承認する如く装ひ、次第に問を進めることに由つて其の虚空なことを明かにするを勉めたが故に、其の方法は翻弄の性質を帯びて居た。斯やうに初め消極的方法に由つて人を自覺の地位に導き、次に積極的に其の知識を求めようとする熱望を發せしめ、之を修得する方向に導くことはソクラテス獨得の方法であつた。而して其の積極的指導に於て彼は歸納的に進み、普通の概念及び個々の經驗から出發して一般的結論に達しようとした。例へば酒に酔つた者は軍隊の統率者として不適當であり、兒童の保護者としても、家事及び農業の主宰者及び監督者としても、又家僕、家婢としても不適切であり、友人としても頼むに足りない事實を指摘して不節制の嫌ふべく、適度の希望すべきことを斷定せしめた如きである。彼は又屢比喻を用ひ類推を行つた、國家を統治するものを牧夫に比較し、金錢を受納して知能を賣る詭辯論者を美貌を資として業を營むものに比した如きは其の例である。斯かる普通平易な事實から巧に自ら重要な

概念を構成するやうに人を導く所に於て彼の特別の長所が認められた。故に彼の教を受けようとして其の周圍に集合したものは、直接彼より何事をも傳へられなく、自ら多くの善たり美たるものを發見したのである。彼は唯助産婦の如き役を務め、出生を容易ならしめ、又其の出生したものの不具でないか、又養育する價值があるかを驗したゞけである。今日に於ても問によつて既存の概念を分解矯正して正しい概念の發生を助ける方法をソクラテス方法と稱へる。

斯やうにソクラテスは問答により知識を啓發することを道德の要件としたけれども、德育上人格の影響の大なることを認め、善良な人との交際が人の訓練に非常に價值あることを覺り、自ら人を教育するに當り、其の教へようとする道德的原則を自ら實行した、自ら道德の高いことを示し、他人をして之を模倣し、彼のやうにならうと云ふ希望を發せしめようとした。彼は其の正とし善とした所を言語によつてよりも寧ろ行によつて教へたのである。即ち其の信する所を恐れ憚ることなくして繼續して行ひ、「自ら不正を行ふよりも寧ろ之を受けると云ふことを原則として居た。要する



に彼は知識的陶冶について獨特の伎倆を有して居たと同時に又眞に人を感化するに足る高尚な品性を有し後世の教育者に適切な模範を示したのである。

### (三) プラトーン

プラトーンは紀元前四二七年エイギナに生れた初めの名はアリストクレスであつた。プラトーンは氏の體操教師が彼の體格を賞して彼に與へた第二の名である。彼の家は古い貴族に屬し且富有であつたから彼は當時貴族の子弟の受くべき總ての教育を受けた。二十歳の時彼はソクラテスの門に入り其の深い感化を受け其の死に至るまで親密な交際を繼續した。師の死後彼はメガラに移り、エウクリデスに就いて聴講し、更にエジプト、キレネ、イタリーの南部及びシチリヤを巡廻し、人類及び世界についての知識を深くし、ピタゴラス派の祕密を探り、數學の知識を精密にしてアテネに歸り、三八七年頃其の近郊のアカデミーと稱する土地をトして一學校を設立し、無報酬で教授を開始した。彼の教授の形式は一は連續した講演であり、一は思想を發展する爲めの對話であつた。尙彼は斯かる科學上の親交に友誼

プラトーン

的共同生活を交へた。之は多分彼がソクラテス團體及びピタゴラス團體に於て親しく經驗した所を行つたのであらう。彼は又二回シテキユースに至り、其の王デオスシオの宮殿に滞在し王をして彼の哲學及び政治上の理想に従はしめようと勉めたことがあつたけれども、此の希望は全く失敗に歸した。以後彼は全く意を政治に斷ち、知に渴した青年の群中に立ち、死に至るまで(三四七年)科學上の活動を繼續した。

プラトーンとソクラテス

プラトーンも亦道德生活の爲めに新基礎を確立しようとし、詭辯論者の個人主義に反對し、個人生活を認めると同時に一般的生活に對しても其の十分な根柢を立てようとした。而して彼は此の新基礎を一般的眞理に於て存するとし、個人的意見に反する一般的思想に於て之を見出した點に於てソクラテスに一致したが、其の一般的思想の性質について攻究を試みたことに於て其の師よりも更に一步を進めたのである。

プラトーンの理念論

プラトーンの哲學の重點は其の理念論に在つた。彼の所謂理念とは嘗に經驗上與へられた感覺的物體の諸性質の分解抽象に基く概念でなく、實在的であり物の本體をなすものである。感覺界に於ける一切の物は生滅常

なく、變動極まりなく、従つて實在と認むべきものでなく、唯實在である所の理念から發して來た一時的存在に過ぎない。理念は個々の物體に於ける一般的たるものであり、多物間に於ける一たるもので、現象の變動に關係なく、現象界を超絶し、永久一定の形に於て存する。一定の椅子又は桌子、何某の如きは全然實在でない、然るに椅子、桌子、人は永久的のものであり、實在である。而して現象界は常に其の根源たる理念と調和を保たねばならぬ、此の調和の完全に近づくに従ひ現象界のものが理念に近づくことが多くなる、又之が理念によつて決定せられた機能を遂行することが多くなれば益多く善の理念に接近する。従つて各現象的存在に對して一善がある、眼の機能は視ることであり、此の力を有する限りに於て善い眼であることが出来る。

理念と現象との調和の認知は知識である。即ち知識は特殊存在の本體及び其の眞の機能の認知であり、更に約言すれば善の認知である。此の意味に於て知識は徳である。人も現象界に屬するものとして理念を本體とし、之により指定された機能を有する、而して此の本體に近づき、其の機能を

遂行することにより善い人となる。人についての知識は即ち善い人となることの根本要件である。

斯くしてプラトンは人についての知識を明かにしようとし、次のやうに述べて居る。

人の精神はそれ自身に於て即ち其の理性である限りに於て永久不滅であり、理念界に屬する、然るに身體と結合するやうになつて經過的のものに連關し、現象界に屬するやうになつた。故に各精神には高等な部分と下等な部分とがあつて互に相影響する、即ち精神は一方に於ては身體を支配し且之を支持し、他方に於ては之によつて苦しめられ、下等の慾情的生活にまで墮落し、其の高尙な起原を忘れ、有限的のものとなる。斯やうに精神には神靈な理性的要素と死滅的非理性的要素との存することが明かであるが、尙其の中間に立つて兩者間の連鎖となる一要素がある、之は氣力と云ふべきものである。氣力は慾情よりは高尙であるけれども、兒童に於ても動物に於ても現はれ、吾人をして屢考慮なく盲動的に進動せしめる。故に之は人の自然的方面に屬するものであり、理性其のものと混同されてはならぬ

いものである。而して精神が身體即ち感覺界のものと結合する現今の狀態は精神の本質に全く適合しないものであるから、此の束縛を脱して其の舊地位に歸らうとするのは其の自然の傾向である。精神は其の高尙な根源についての暗々の覺知、其の郷里たる理念の記憶及び之に向つての希望を有するものである。

プラトリーの倫理想も亦其の理念論に基いて居る。彼は至高の善、即ち總ての行爲の目的とすべき所を決定することを倫理上の根本問題とした。善は決して非實在的經過的で變動極まりない慾情的生活に於て存しなく、眞の理念的存在にまで進むことに於て存する。精神の務とし目的とする所は肉體の影響を脱離し、全行動を理性の支配の下に立たしめることである。此の状態は道德に外ならぬ。而して理性其のもの自由な活動は睿知と云ふ徳となり、氣力が理性の命令に従ひ其の有力な補助者となることは勇の徳となり、慾情が能く氣力の統制に従ひ間接に理性に服従して一定の制限を越えないことは適度の徳となる。斯かる關係が能く保持せられ、心的要素が各其の特有の徳を發揮する所に於て吾人は正道の徳を認めるのである。

プラトリーの倫理想

國家生活

のである。

尙プラトリーは右の如き個人生活についての思想を團體即ち國家生活に移した。兩者を相應するものと見たのである。即ち道德は個人に對して至高の善である通り、又國家の最高目的である。而して個人精神に於て其の要素間に正しい關係を必要とする如く、國家に於ても其の要素と見るべき諸階級間の調和を必要とする。又其の各階級には其の特質に應じた特別の務があり、固有の道德のあることも個人の場合に同じい。其の階級と云ふのは一は農民及び其の他労働者を包含する生産者の階級であつて、慾情に相當し適度節制を其の道德とする。次は警官及び軍人の階級であつて、氣力に相當し勇を其の特別の道德とする。第三は支配者の階級であつて、理性に相當し睿知を其の道德とする。而して各階級が其の特別の道德を守り特定の任務を盡す所に於て國家的正道が存する。

道德に達する道は哲學を措て外にない。精神は慾情の影響の外に立ち眞理を考察認知することにより道德を實現する。而して眞理の考察認知は哲學に外ならぬ。哲學は單に理論上の事柄でない、精神が其の本體に歸着

哲學の任務

し、其の高尙な起原を意識して純粹な理性の活動に達するについて依らねばならぬものである。國家の道徳生活に於ても同様である。國家生活の最高問題は之が哲學者の支配の下に立つた時にのみ解決することが出来るのである。

## プラトリーの教育思想

右の如き思想に基いてプラトリーは教育の目的及び方法を決定した。教育の目的は人を道徳に導き善の觀念を實現するに在る。國家は自ら其の國民の教育を經營し、法令で教育及び教授に關する詳細の規定を設けねばならぬ。小兒の出生後直に其の心身の陶冶を行はねばならぬ、而も其の出生前の事情にも大に注意すべきものがある。健全な父母が始めて健康な兒童を生み得るものであるから、結婚者の資格に就いて法律上の規定がなければならぬ。小兒の教育は初めは身體に對する注意を主とし、母の手に於て行ふべきものである。其の心的陶冶については姑息の愛と嚴格な抑制との中間を進み、心情を快活溫和ならしめる爲め、苦痛、脅迫的觀念、憂苦の如きを避けしめることを要する。三歳から六歳までの時期に於ては兒童の意味の遊戯を行はしめることが適當である、即ち其の遊戯は其の年齢の者

が自然に傾き、彼等の集合するときに自ら發見する如きものであることを要する。遊戯によつて兒童を其の將來の業務に有益な方向に導くことが出来る、又一定の遊戯を變更することなくして繼續せしめることによつて之を品性陶冶の手段とすることも出来る。此の時期の心的陶冶の方法としては道徳を進めるに足る善い童話を聽かしめることである。六歳以後は男女兒を分つて教へねばならぬ、男子は體操及び音樂と諸種の科學とによつて教導すべきものであつて、此の必要に應ずる爲め學校が設けられねばならぬ。父は其の子の教授を停止し又は其の期限を變更する如き自由を有しない。體操教授は相撲と舞踊との二大部に分つべきものである、相撲は諸種の初歩的身體的運動と結合して頸部、四肢及び腰部の形を正し、強壯と熟練との進歩を目的とし、舞踊は作法即ち身體の諸部分の正しい運動と其の優美なこころを進め、各運動をして調和の發現とならしめようとするものである。其の他戰術及び獵術も亦陶冶の手段となるものである。而も斯かる練習は身體の陶冶を終局の目的としないうで、心的調和を成立せしめる手段として役立つべきものである。音樂的陶冶は十歳から始める

ことを要する、先づ字母を學ばしめ、之を聽視の兩覺に於て精密に區別し得しめ、次に讀方に移り、更に書方の練習を行はしめるのが適當の順序である。詩人の著書は知識の父であるから之を讀み物として用ひ且誦誦せしめるのが適當である。然し多くの書を差別なく讀ましめるのはよくない。又幼者は勇氣、信仰、大度の諸點について良い模範を必要とするから、其の實例を觀察せしめ、模範により遂に是等を其の第二の天性とならしめねばならぬ。

眞の音樂的陶冶は十四歳乃至十六歳の時期に屬する、其の目的とする所は快樂でなくして善美の正しい模倣である、而して最も善い人を悦ばしめるやうな音樂、即ち嚴肅で勇將の泰然たる心情を寫すものか又は靜平、溫和なもの、最もよい。音樂ほど深く人心を動かすものなく、又之により禮節、純潔な嗜好、美及び徳に對する感受力を惹起し、醜邪、罪惡に對する憎惡心を養ふことが出来るから、之を教育の眞の基礎としても差支ない。音樂は理性上の教がまだ有效でないときに於て高尚な衝動を發せしめ、其の靈妙な力で美及び善に慣れしめるものである、之が舞蹈と結合せしめられるとき益多く斯かる効果が現はれる。教育上では音樂と體操とを正しく結合す

プラトーンと音樂的陶冶

プラトーンと哲學

ることが最も必要である、後者の偏重は精神を粗野にし、高尚な知識についての興味を不可能ならしめる。身體の強壯、敏捷なことはそれ自身では傲慢を生ぜしめ、他を威壓しようとする傾を發せしめる、之に反して音樂に偏するときは柔弱無力な心的作用に慣れしめる、故に兩者相待つて互に補充しなければ教育の目的に適しない。

自由公民の正式の教育には尙算術、幾何及び天文の諸學科の學習を必要とする、之は常に其の實際的價値の爲めのみでなく、哲學的陶冶の最良準備となるが爲めである。是等の學科は吾人を現象の變遷不定の境界から實在の範圍に導き、生活の永久法則を發見することを教へ、斯くして眞理の認知に與ることを得しめるものである。故に是等の學科を學び個々の事物の相互の關係を明かにしたものは哲學を學ぶ價値のあるものである。哲學は總ての科學の科學として人の全人格を陶冶し、全眞理を明かにし、現象界からして其の根源たる眞の實在に及び、遂に總ての觀念の最高のもので、即ち善の理念の直覺に到達せしめるものである。

十八歳乃至二十歳の時期には音樂的陶冶を減じ、戰闘術及び軍隊的鍛鍊

プラトーンと教育上の陶冶

を主とすべきである。而して科學の能が少く而も勇氣に富むものは此の時期の終りに於て社會に出で兵士及び警官として務むべきものであるが、有能なものは三十歳に至るまで科學を一層精確に且廣く學ぶことを要する。此の時期の終りに於て第二の淘汰を行ひ、比較的劣等なものをして社會に出て政治に従事せしめ、優等なものには尙進んで三十五歳まで哲學を修めしめるのが適當である。此の修養を了つたものが始めて支配者たる地位に立つ資格を得、且五十歳まで之を保持すべきものである。

右はプラトリーの教育意見の大要である。尙彼は女子にも大體に於て男子と同じ教育を受けしめることを必要とし、唯戰闘術の練習を輕減することを適當とした。其の他彼が理想的國家の規定として述べて居る所はスバルタの制度を一層嚴にしたやうなもので、空想と認むべきものが少くない。

### 三 アリストートル

アリストートルは紀元前三八三年スタゲラに生れた幼少な時から自然研究を好み十八歳のときアテネに來たり、プラトリーの門に入り師の死に至

アリストートル

るまで二十年間こゝに止まつた。三四二年彼はマケドニア王フィリポスの招きに應じ、當時十二歳の王子アレキサンダーの教導を託せられ三三年まで之に従事したが、其の後再びアテネに移住し、著述家として又教師として驚くべき精力を示した。彼はリセウムの地に教授所を開き、其の縁際を逍遙して學生と談り之を啓發した。然し多數の聽衆に對するか、又は材料及び思想上新奇なものを表明しようとするか、又は精密な科學的研究を發表しようとした場合には繼續した講演を行つたのである。アレキサンダーの死後彼は反マケドニア黨によつて現存の宗教を非謗すると云ふ罪名の下で告訴せられ、エウポイアのカルキスに遁れ、三二二年其處で死亡した。アリストートルはプラトリーに師事したけれども、其の哲學的思想に於ては其の師に一致しないものがあつた。プラトリーは現象界を離れた理念に注目したが、アリストートルは現象界を離れることなく、思考の豊富な材料を供給する自然に着目した。故に前者を理想主義の代表者とするならば、後者は實有主義の代表者である。尤もアリストートルも物の概念のみを其の本體とし、これのみを實在的のものとした、而も之を自己存立のもの

アリストートル  
とプラトリー

見なかつたから現象界の外に特別の觀念界を置くことなく、觀念を物自身から分離することの出来ないものとし之を個々の物に存し、多くの物に於ける共通的のものとした。一般的のものは獨立して存在するものでない唯個々の物に就いて之を認めることが出来る、實際に存在するものは唯個物のみである、之は自己により自己の爲めに存立して居て眞に實體たるものである。而も科學は個物其のものに向ふものでなく、一般的のもの及び原理に向ふものであるから、個物は其の個々の性質に於て認知の對象とはならぬ、唯其の内に存する一般的部分のみが其の對象となるのである。知識は即ち個々物體の概念に向ふものである、而も之が爲め科學は其の立脚地を個々の物體に置き、是等のものに共通普遍の概念的木體に向ふことを要する。斯く考へることによりアリストートルは經驗及び歸納的進路を、研究の方法として最も正當なものと見たのである。

人類の倫理上の目的は其の本體を發達せしめることである、而して其の本體とは吾人が動植物と共有する作用でなくして人に特有な働即ち理性を指すのである。理性は人に於ける神靈なものであり、人の眞髓である、純

アリストートルの倫理思想

粹の理性的活動のみが人性に十分適當し、之のみが人に於て無條件の満足を生せしめ、人の存在をして人類界を超越して神靈の域に到らしめるものである、而して此の状態は幸福と稱すべきものであるから、人の活動の終局の目的は幸福に在ると云ふことが出来る。又此の理性的活動の正しく遂行せられる状態を吾人は道徳とも名づける、故に道徳と幸福とは同一状態を示すものである。純粹に理性のみの活動に由る道徳は神に類似する状態に於て始めて望むべきことであるが、普通の道徳は理性が心の理性的でない部分を支配することに由るものである。心には理性でなければ、能く理性の決定に従ひ其の命令に服する要素がある、之は意志と稱せられるものであつて、道徳は即ち此の要素の働に由るのである。

アリストートルは道徳を知識に於て存するものとし、ないで意志に由るものとした、人の觀念即ち人の人たる點の知識は道徳を成立せしめない、其の目的を達しようとし、機能を遂行することに由つて始めて之を成立せしめることが出来ると考へた。故に彼に由り哲學は最早道徳の手段として、なく純粹に科學として取扱ふべきものとなつたのである。

道徳と意志

斯くの如くアリストートルは道德を個人の自己活動に由るものとしたけれども、一般のギリシャ思想に従ひ、國家を道德の必要條件とし、個人に限られた活動は其の完全な發動に對して不十分であるとした。國家に於ける生活は人の當然の任務である、人は其の性質上共同團體を構成するやうに決定せられて居る、言語が人のみに與へられて居る事實に由つて之を知ることが出来る。人は道德的陶冶を受けて萬物中の最高のものになることが出来るけれども、若し法律に由る秩序を缺くときは其の最も不良のものとなる、而して斯かる秩序は團體に於て始めて見る所であるから教育に於ても國家の勢力に待つ所が甚だ多い。

國家の目的は國民の幸福である、而して若し個人の幸福が其の妨げられない道德的活動の義であるならば、全國民の幸福も亦之に外ならぬ。故に國家の最高任務は道德を奨励し、罪惡を防止するに在り、政治家の任務中道德に關するものが最も重い。幼者を道德に導くことは又實に國家の基礎である、而して斯かる陶冶的職業は個人の意志に委すべきものでない、總て社會に生すべきものは社會に由つて行はねばならぬから、幼者の教育も

亦國家的制度に依り社會的計畫に待たねばならぬ。

幼者には生活上必要で且有益なもの、中で野鄙でないものを學ばしめねばならぬ、野鄙なものとは身體又は精神又は兩者を道德上不能ならしめるものを指すのである。單なる利益が學習の動機となつてはならぬ、自由公民は事物其のものゝ興味からか、又は友人の爲めか、又は道德の爲めか、又は閑暇を價值ある仕方消費する爲めに學ぶべきものである。而して之には文法體操、音樂及び圖畫が最も適當な學科である。

教育の方法は自然の與へたものを補充し發展せしめればよい、教育は嚴密に自然に依り、個々の點に於て唯自然の示す道に従ふべきである。教育の時期についても自然は其の區劃について最良指示を與へる、即ち七歳、十四歳、二十一歳は人生に於て心身發育上の變化期を示すものであるから、吾人は之に應じて教育の方法を決せねばならぬ。法律は人の出生前の事情を顧慮し、健全な兒童を出生せしめる目的で結婚者の年齢、兒童の數等に關する規定を立てることを要する。小兒の出生と共に其の指導を始め、早くから榮養、運動及び身體鍛練に就いてのみならず、遊戯談話にも注意し、又不



良な言行の實例を示すやうな人及び事物に近寄らしめないやうにせねばならぬ。七歳以後は公共教育の時期である。其の教育は最初は體操に依り身體の健康及び強壯と勇氣とを進めることを目的とし、而も十四歳までは其の軽いものを練習せしめて身體の生長を妨げないやうに注意し、其の後三箇年間に於て重い體操的練習によつて忍耐勤勞の精神を養ふのが適當である。心身を同時に勞せしめるのはよくない、何故と云ふに身體の勞働は精神の發展を妨げ、精神の疲勞は身體の發育を妨げるからである。少年には特に音樂の學習を適當とする。音樂は心情及び品性に大なる影響を及ぼし、愉快な休養の手段となり、閑暇を消費する價值ある方法となるものである。而も之が職業の爲めにせられる時は、全然其の價值を失ふものである。之を忘れてはならぬ。文法の教授も有益であるが、之も實用の爲めではなく、他の知識の基礎として學ばしめるべきものである。圖畫も亦屢其の物質上の利益の爲めに學ばれるけれども、其の教育上に價值あるのは能く物體の美に對する感覺を鋭敏ならしめるからである。其の他數學、辯證法、修辭及び哲學の如きも少年の教科として價值あるものである。

アリストートル  
ルと德育

總ての教育及び教授の重點は道德である、而して人が道德的に陶冶せられ得るには天性、習慣及び教導を要件とする、而も習慣は其の主なるものである。幼者は特に勇氣と適度とに於て慣されねばならぬ、其の欲望を正しい道に導き、春機發動期のものには羞恥の情を生せしめることにより、此の時期に於て陥り易い惡傾向を防がねばならぬ。從順の習慣も幼者教育上無條件に要求せられる所である、無制限の自由は理性が惡傾向を屈服する力を弱める。尙友誼も一の徳若くは徳の附従者として見るべきものである。之は善良で徳の高い人々の間にのみ結ばれる、彼等は自ら善であるから相手の善であることを希望するのである、或る意味に於ては友誼は總ての善の源である。

アリストートル  
ルとギリシャ  
思想

アリストートルが其の教育論に論理的及び心理的基礎を與へ、人の心身の性質を自然に従ひ順序的に且一様に發展することに由つて其の理性的道德的本體を養成しようとしたことは眞に能く教育の務を了解したものである。個人性の權利を認め、國家の幸福を個人の道德に依るものとしたことに於て彼はプラトニーよりも一步を進めた。然し前にも述べたやうに

彼も亦ギリシヤ思想を脱離しなかつた。總てのものは國家の爲めに存し、又國家に依つて存する」と云ふことは氏の思想に於ても見る事が出来た。道德は國家に關するものとせられ、善き人とは善き國民の義とせられた。要するにアリストートルの教育思想はギリシヤ思想の範圍内に於て上古に於て最も高い發達をなしたものと見てよい。

アリストートルはプラトールと並び稱せられる所の上古ギリシヤの大哲學者であり、又大教育家であつた。其の品性の高く知力の強健なことに於ては驚くべきものがあつた。詩人的考察に長じ、想像に富み、觀察の靈妙な點に於て彼はプラトールに及ばなかつた。故に彼は其の師の如く人を其の内部の最も深い所に於て捕へ、科學的活動と道德的活動とを渾然一に融合することを得なかつた。而も研究の多方的であり、材料の豊富で方法の科學的であること及び判斷の練熟し、教系の定立に絶大の伎倆を有して居たことに於ては其の師を凌駕した。彼のオルガノン(思考の科學)は紀元後千五百年頃に至るまで科學上の寶典であつた。其の影響の深く且廣かつたことはバイブルに比すべきものである。彼の書は種々の學科の教授に於て永く教

アリストートルの科學上の功績

科書として又參考書として用ひられた。又今日吾人の用ふる科學上の語で氏に始まつたものが甚だ多いのである。而も古代ギリシヤに於ける彼の直接の影響は大きくなかつた。彼の書は小アジアに運ばれ久しく失はれて居たが、後アレキサンドリヤの圖書館に收められた。サラセン人が勢力を得るに至つて其の書はアラビヤ語に翻譯せられ、同人種の文化發達の源泉となり、又同人種により再び歐洲人に知らしめられたのである。

(四) ギリシヤの晩年に於ける哲學派と教育

紀元前三世紀以後に於ける哲學で、多少教育上に影響のあつたものはストア哲學、エピクロス哲學、懷疑哲學である。次に是等について見ることにする。

(イ) ストア哲學 此の哲學はゼノンによつて創唱せられたものである。彼は紀元前三四五年頃キペソンの一市キッチオンに生れ、二六五年頃死去した。彼の品性の謹嚴で威力に富んで居たこと、生活上の簡單で足るを知り、求める所少くして慈善心に厚かつたこととは、廣く人民の尊敬を受け、學術上のみならず、風教上にも大なる影響を及ぼした。彼の學理は後にク

ストア哲學

ワシッボス(二八〇年—二〇七年)に由つて其の諸方面に於て大に補充されて後世に傳へられるやうになつた。同哲學は其の主要の目的を人の道徳的行動に置き、哲學を單に學術として取扱はないで、人を正しい行爲に導き、道徳にまで進ましめるものとした。正しい行爲は理性に適した行動に限られ、理性に適するものは唯人及び物の性と一致するもののみに限られる。故に道徳は人の行動と一般の世界的規律との一致する所に存し、道徳的に働き得るものは唯秩序及び法則を知るものに限る。認知其のものは吾人の最高の務でない、自然の秩序、法則を知つて従順に之に服従することが最も高い道徳上の任務である。教授によつて人の理性を發展するのは道徳の基礎を定める手段として必要である。科學的認知は道徳的行動を目的とする。道徳は知識として見ることが出来るけれども、同時に且主として精神の健全強壯の状態として又精神が其の性質に應じて組成せられた状態として見るべきものである。要するに道徳的活動は認知に基く合理的生活に於て存するものであつて、人は常に此の活動を繼續し、共同の至善に向つて進まねばならぬ。而して總ての情は理性と撞着するものであるから、道

徳の消極的要件は情を脱離シアパチアの状態を保持することである。

斯やうにストア派に於ては道徳的行爲を要求し、各行爲に於て理性の表明を要求したけれども、之は畢竟世の大勢に無條件に服従すべきことの要求に過ぎなかつた。何故と云ふに個人に於けると同様の理性は世界に於ても存在し、一般的世界的法則又は自然法則として發現して居るからである。理性に従ふと云ふことは即ち無條件に大勢に服従し天命を甘受する義である。斯くして始めてアタクシ(不惑不動)の地位に達し、心の平和、幸福、寛容、慈愛、及び義務の遂行の如き道徳の根據たる生活上の調和を生ずることが出来る。

ストア派は右に述べたやうに強く道徳的行爲を勸告し且嚴格な道徳的原則を保持したから有爲な人を敬服せしめ、其の道徳的及び哲學的考察をして絶望的時代に於て公徳の唯一の支持點たらしめた。殊に其の實地的であつて生活上の精密な規定を立てたことは、人をして依従し易からしめ、一般の教育及び風教の上に多大の効果があつた。又其の一般的即ち神的方法から出發し、永久の理性を説き、人の行爲を之によつて導くべきものとし

之に對しては無條件に服従すべきものとしたことは、道德上の義務に宗教的根據を與へ、道德的行爲は神的法則を満たすものであると云ふ信仰心を惹起せしめた。又ストア派が哲學を其の教育及び教化の中心の且最高の學科とし、殊に人生に關し道德上の義務及び行爲に關する哲學即ち倫理學を最も貴重し、其の他辯證法及び自然科學の教授をも豫備的價值あるものとして獎勵したことは、是等の科學の進歩に有效であつたに相違ない。

(ロ) エピクロス哲學 此の哲學の祖はエピクロス(Epicurus)である。彼はサモスに生れ、紀元前三〇六年アテネに出で一學校を開き、三十六年間此處に教化の爲めに力を盡した。彼はストア派と正反對の人生觀を有して居た、後者は人の生活上の務を理性的生活即ち道德に置いたが、エピクロスは生活上の幸福を快樂に置いた。快樂は總ての幸福の始まりであつて又目的である、假令其の慾情的のものでも、自然に適したものであるから善とせねばならぬ、然し快を求めようとする吾人の行動は、計量に基くことを要する、一時の快のみを見ないで、能く其の結果を考へ、全體に於て快の多いことが明瞭になつたとき之を求め、苦の多いことを認めるとき之を避けるこ

エピクロス哲  
學

エピクロス哲  
學と教育

とが必要であると云ふのである。故にエピクロス派も畢竟足るを知るこゝと質素な生活法に慣れ、贅澤な娛樂を避けるか或は稀に之を享受して健康を保持し、小娛樂についても快樂を感じる力を保存すべきことを要求し、一時的快樂及び個々の娛樂を求めないで、總ての快樂の根柢たり本質たるものを求むべきことを主張し、之を身體上の苦痛のないこと及び精神上のアタラクシーに置いたのである。道德も亦幸福に缺くべからざるものとせられた。道德は其れ自身では人を幸福としなければいけれども、之から發する愉快及び之が不安心、恐怖を去り、危險を脱せしめることは直接に幸福の原因となる。故に賢人は自己を束縛する一切のものを遠ざけ、一般に人の安全を妨げるものを忌避する、即ち彼は結婚を避け、妻子の系累を免れ、國家の事業にも干渉しない、何故と云ふに是等のことは心の平和を破るからである。斯かる快樂主義からエピクロス派は教育に於ても唯人を實際に役立つ働に導くか又は其の妨害となるものを遠ざけるに足る知識のみを價值ありとし、一般的陶冶を輕視した。文法及び歴史の科學的研究は思想を偏頗にし、數學は誤謬の豫定から出發し且幸福に何等の關係を有しない、音樂及

び作詩術の理は甚だしい倦怠の念を發せしめるに過ぎなく、辯證法及び修辭も人生に價値がない、之に反して自然科學は大に貴重すべきものである。自然の原因を知ることが精神を驚愕及び迷信から脱せしめる唯一の手段である、而も之は消極的價値を有するに過ぎない。最高の且唯一の積極的價値あるものは倫理學である。斯學は眞に幸福の本質及び之を實現する方法を教へるものである。然し初歩的教化上の教科としては讀方及び書方だけで十分である。斯かる思想は精神上の退嬰を表示し、教育上有害と見るべきものである。實際エピシロスの教理の最も多く歡迎せられたのは利己主義、專制及び悪い意味の享樂主義が古代の精神を破壊した時であつた。

(ハ) 懷疑哲學 ストア派及びエピクロス派の共通點は其の主義の主觀的であることである。即ち人の自己にまでの退却に於てのみ其の幸福が認められたが、此の主觀主義は懷疑派によつて其の極端にまで進められた。前二派が確實な知識の可能を豫定し、精神上の不惑及び幸福を世界及び其の法則の認知の上に存ずるとしたのに對し、懷疑派は總ての知識に斷念することによつて同様の目的を達すべきことを主張した。斯かる主義はピ

ルロン (360—270) の始めて唱へた所である。彼は、物の性質について吾人は何ものをも知ることが出来ないから、決定的斷定を下すことを避けねばならぬと云ひ、此の斷念に基いて常に且必然的にアタラクシーの状態が現はれ、幸福の唯一の根據が成立すると云つた。斯やうに確實な知識を斷念して不決定の意見に止まらうとすることは明かにギリシヤ精神の衰弱哲學的作造的氣力の消滅を示すものと云つてよい。

懷疑的傾向の傳播し、高尚な科學的認知の可能を否定したことは、教育上實際生活の必要を注意すべき唯一の點とし、一層高い考察を排斥する傾向を生じた。實利的原則はギリシヤ人の生活及び學問上に十分な勝利を得、一般的學科は唯實地生活に必要であり有利である限り、に於て重んぜられるやうになつた。

右に述べた如くギリシヤ精神は其の最初の生氣を失ひ、往々不健全な傾向を示したけれども、尙其の腕力の破壊後に残留した。即ちムンミウスのコリント征服はローマの主權を定立し、政治上ギリシヤは既に消滅したけれども、其の文化はローマに傳へられた。特にストア哲學の如きは此の地に

多くの歸服者を發見し、腕力上の征服者をして精神上の服従者たらしめたのである。

## 第二章 ローマの教育

### 第一節 總論

ローマの教育はギリシャの教育と大に異なる所がある、之は畢竟兩國民の性格の差異に基くのである。ローマ人の長所は創作的想像を有することとでなくして其の意志の鞏固なことに在り、美に對する感受力でなくして實際的精神に在り、多方的生産力及び心身活動の自由且平易なこととでなくして、物を現實的に見、有用且有效と云ふ見地を確持することに在り、知的活動及び科學的思考でなくして、公共の爲め具體的の價值ある結果を得ようとする努力であつた。全體の下に個々意志の服従を規定する確乎とした政治的組織と嚴格な軍隊的訓練とはローマに於て實際の必要上から早く發達した、確乎たる法則を定めて鞏固な團體を作り、又傳來の財産を安全にし且増進する爲めに戦ふことを用意する軍隊を保持することはローマの

ローマ人の特質と理想

生存上の要件であつた。後來ローマの盛大を來たしたのは實に此の生活上の二要素たる法制と戦争とに由つたのである。而して斯くの如く法制と軍隊との上に組織せられた團體に於て、個人が全體の一分子として又全體の爲めに存するものとして見られるのは自然の傾向である、即ち理想及び最高目的を國家に置き、個人をして其の務と嗜好とを國家から受取らしめようとするに至るのは當然の結果である。祖國即ちローマの永久たるべきこと、思想はローマ人の總ての行爲及び希望の指揮者であり、其の公共生活、家庭生活及び文學上に一様の原則を付與し、行動及び思考の上に一様の痕跡を印した。要するにローマ人の生活及び行動は全く政治的生活に基き、其の宗教、倫理は共に之に歸着せしめられたのである。其の神は政治的觀念の權化であり、道德は公共の道德であり、國家に關し、社交及び家庭生活上の行動に關するものであつた。公共團體に直接利益のない業務は價值のないものとせられた。例へば藝術、科學の如きものは謹嚴着實な人士の従事する價值のないものと見做された。アテネ人は政治以外に精神上の閑暇を有して居たけれどもローマ人は其の政治的業務の餘暇を公共

事業及び家庭の事務の爲めに費した。故に全人格の調和的發育と云ふやうな思想はローマ人の有しなかつた所であつて其の嗜好は歴史又は嚴格な政治上の辯論に止まつた。尤も修辭の研究はローマに於て大に發達し、其の練習についての理論も亦見るべきものがあつたけれども、其の研究及び練習の目的は實用に外ならなかつた。單に多くを學び之を貯藏するに過ぎないことはローマ人の寧ろ賤しんだ所である。彼等は知つたことを口又は筆に於て明瞭に發表し得るものを眞に教養のある人とした而して斯かる術が如何に政治上の活動に關係があるかを考へれば、ローマ人が修辭を貴重し、之を研究し練習した理由を知ることが出来るであらう。要するにローマ人の理想は實用であつた、而して其の驚くべき實地的天才は今日學校教育によつて得られる知能を代理した、例へば地理の知識がなくて廣い世界を征服、統御し、數學的知能がなくて廣大な國家の政治を調理した如きである。

特に教育に關してもローマ人は、アテネの理想的教育に反對して實地的見解から出發した、即ちローマ教育の理想は善良なる愛國者、尊敬すべき人

ローマ教育の  
特點

及び實際的に活動し勇氣に富む公民の養成であつた。然しローマ氣質及び之に基く教育及び教化上の理想はローマの發達、其の領土の擴張に従つて著しい變化を來たした。紀元前三世紀末の頃からローマ人の觀界は次第に擴張し、教育上にも新要素が加へられ、教授材料が豊富になつた、而も之と同時に嚴格なローマ風は漸次消失し、教育の訓練的勢力を退減せしめ、遂に共和政府の滅亡と共に古いローマの氣風は全然失はれ、ギリシヤ文化に其の地位を譲り、同文化が後來の諸國民に影響する道を開通した。

## 第二節 實際的教育

### (一) 共和期の教育

共和期に於ては古いローマの思想及び感情の純粹な發現を見ることが出来る。此の時期の教育は祖先傳來の習慣に基き、國民固有の道德に依つた、従つて別に法令を發したり規定を設けたりする必要がなかつた。家庭は其の勤勉、質素の風によつて幼者教育の最も適當の場所であり、母の慈愛及び貞淑の徳、父の嚴正、謹肅な態度は自ら幼兒を薰陶し、直接にローマ氣風

共和期の教育

及びローマ精神を傳へた。教育の時期には初等級文法級及び修辭級の三階級があつた、初等級に於ては遊戯、投鎗、重い武器を用ふる、戰闘術、柔馬術、拳闘術、水泳術、寒熱に耐へること等の身體的鍛鍊が行はれ、又讀方、書方の教授も行はれた。其の教導者は普通父であつたが、父に其の技能なきときは家庭教師が聘せられた。又普通人民の子弟の爲めには初等學校が設けられ七歳に達したものを入學せしめた。文法の階段に於ては既に授けられた讀み書き教授の基礎に於て文法を教授し、又生徒の前で模範的文章を朗讀して之を書取らしめ且誦讀せしめる如き練習が行はれた、而して其の材料は、初めは十二銅標及び實地的規定から採られ、此の教授をして一部は法制を知らしめる手段としたが、後ギリシヤ文化の漸次普及するに至り、ギリシヤの詩人及び文學者の書から採られた。修辭の階段は十六歳頃から始まり、其の教育の場所としては修辭學校と云ふものがあつた。此の時期に於ては一定の論題について演說討論を行はしめ論法を練習せしめた。元來ローマ人は辯論の能を有して居たが、實地の必要からして益之を練磨した、而も其の特に學校に於て練習せられるやうになつたのは、文學的觀界が擴

張せられ、ギリシヤ教化の方法の學ばれた後であつた。十七歳を終つたものは普通の陶冶を受了したものと見做され、大人のトローガを着ることが出來、家庭を離れ公共生活に入込み、父又は實地經驗に富む親戚の指揮の下に實地の業務に就いたのである。

共和期に於ける教育及び教化の事業は國家の關係しなかつた所である。ローマ人は法令により教育を規定し、總ての人に對して一様の教育的組織を立てることをしなかつた。彼等は家長の權利及び其の威嚴を侵害する虞のある一切の處置を忌避した。兒童を躰け教へることについての注意は家庭の父に一任せられ、如何なる教師に就かしめ、如何なる方法によつて教導すべきかは一に父の考に存して居た。後センソルと云ふ官職の設けられてから、其の職に在るものが少年教育の道德的方面を監督した、即ち彼は惡しい生活法、獨身生活、及び子女教育上の怠慢に對して譴責を加へた。又ギリシヤ文化の侵入に由つて現はれかゝつた變動は政府の禁止的干渉を喚起した、例へば紀元前一六一年元老院はギリシヤ哲學を排斥し、同九二年センソルは當時徒に新奇の學術を教授し少年を誘惑するものあることを



非難し、從來の慣例、風俗と衝突する新計畫を否認し、新教授を行ふ學校の設立を禁じた如きである。然しギリシヤの思想内容の豊富なことと其の文化の卓越したことは到底人工的に抑止することが出来なく、幾多の禁止令も其の西漸を防ぐことが出来なかつた。

ギリシヤ文化の勢力は紀元前二世紀に於て頓に増大し、ギリシヤ哲學についてのローマ人の興味も其の半頃から深厚となり、國家の爲めに働き、教養ある社會に於て優秀な地位に立たうとするには哲學的修養を缺いてはならぬと見られるに至つた。斯くしてローム人はギリシヤ人に學ぶ所が多かつた、而も彼等はギリシヤ人の精神に化することがなく、其の學んだ所を實際化した。即ちローマ人は科學としての哲學については何等の價値を置かなかつた、之を貴重したのは主として之が道德的原則の定立の爲めに又辯論家及び政治家の職務の準備として役立つからであつた。哲學の系統的組織、其の秩序ある敷衍の如きは殆ど顧みられなく、學派の爭論は多くは唯小事の周圍を廻轉するに過ぎないものと見られた。ローマ人は畢竟種々の系統中から有用と見えるものを選出するに止まり、個々の事項の

ローマ人の學風

間に存する深い連關を看過することが多かつた。故にギリシヤ哲學はローマに傳はつて大に折衷的性質を帶び、道德上に利用せられ、道德の哲學即ち倫理學の形をとるやうになつた。而してギリシヤ哲學中最もローマ人の嗜好に適したものはストア哲學であつた。其の教理に存して居た道德的勢力は剛健なローマ氣風と一致したのである。

ギリシヤ文化の影響に由る知識内容の増進は德育の進歩を伴はなかつた。ローマの領地がイタリヤを越えた時に其の最良時は既に経過したのである。堅實謹嚴な國民的特質は次第に消失し、奢侈なアジア地方との接觸は種々の不健全な娛樂に親ましめ、際限なき欲望を發せしめた。官職は最早國家の爲めに盡すことを名譽と感ずる情から求められないうで、財産増殖の機會を得る爲めに求められ、收賄と收斂とは一般の風となり、金錢上の貴族は功勞に由る貴族に代り、堅實な人士は變じて無賴の徒となり、男女の關係も亂雜に流れ到る所に懦弱、淫靡の風を見るやうになつたのである。

(三) 帝國時代の教育

共和期の終に現はれた教育及び教授の形式は帝政期に傳へられた、然し

帝國時代の教育

ながら之を動かす古い精神は益衰退した。風俗の廢頹は家庭生活を破壊し、母の膝下に於ける深い慈愛と注意とに依る教育は最早見ることが出来なく、兒童は早くから奢侈の生活に慣れ、無知輕薄な奴隸に取巻かれ、其の無邪氣な心情は早く腐敗した社會の快樂に導かれて輕佻墮落の傾向を取るに至つた。而して此の實地生活上の絶望狀態は識者をして全力を科學の方面に傾倒せしめたのである。ローマ皇帝中には自ら古代の學に通じ又大に之を奨励したものが少くなかつた。例へばアウグスツスは學者を保護し圖書館を設立し、ヴェスバチアヌスは高等教員の俸給を國庫支辨とし、有名な教育家クインチリアヌスを聘して高等學術を教授せしめた。又ハドリアヌスにより設立せられたアテネウムは哲學者、修辭家及び詩人の團體として久しく學術界に重をなした、殊にコンスタンチン大帝により教師に與へられた三特典即ち免役、自己裁制、俸給の國俸支辨は大に其の地位を高め、之を諸人の羨望する所とならしめた。斯くして學術は大に進歩し、學校の數は次第に増加し、常にローマ市に於てのみならず諸地方に於ても其の設立を見るに至つた、特にミラノ市の如きは新アテネと稱せられ、古代の

文化がアルプス山を越えて歐洲の北部及び西部に傳播するについての有力な根據地となつた。紀元後一世紀に於てはアテネ及び其の他の東方の都市が尙其の傳來の地位を維持し、一般の尊敬を受けて居たが、四世紀以後は西方都市が文化の場所として十分に之と競争し得るやうになつたのである。

### 第三節 理論的 教育

ローマに於て教育が理論的に考究せられるやうになつたのは古來の慣習、風俗の動搖を生じ、教育の自然的根據を不確實ならしめる虞のあつた時である、固有のローマ氣質が外國の文化の影響を受けるやうになつて識者は必要上古風の價值について考察し、新入分子の採るに足るかを吟味したのである。且又新教化により人生に關する知識の豊富になつた爲め教育の目的方法についての考も次第に組織的となり、之に關する著述をも見るやうになつた。次に二三の主な論者を舉げて置く。

#### (一) キケロ

理論的教育

キケロ

キケロは紀元前一〇六年アルピヌムに生れた。幼時はローマ固有の教育を受けたが、稍長するに及んでギリシヤの哲學及び辯論術を修め、且深く法律を研究し、紀元前七九年より七七年までギリシヤ及び小アジアに遊んで其の學を深くした。斯かる修養は辯論上の天才と相待ち、彼をして辯論家としてローマに於て一時最もよく成功せしめ、大政治家として知られるに至らしめた。然るに後にアントニウスと不和を生じ、紀元前四三年暗殺者の手に倒れた。

キケロの學風

キケロはギリシヤの文化がローマの上に影響を及ぼし、兩者の接近し、其の一部的混合の既に始まつた時に生活し、彼自身に於て此の同化的過程を表示した。即ち彼は一身に於てギリシヤ教化とローマ教化、概博な知識と公共生活上の熱心な活動とを結合した。彼自身の言によるに、彼が人類的陶冶について有した思想及び特に其の高等な科學的及び藝術的見解は總てギリシヤ人から得たものである。而して彼の最も優れて居たのは辯論であつたが、哲學については唯ギリシヤ哲學を通俗的にしただけで、獨特の系統を組成したことなく、又其の哲學思想に於て嚴密な連關統一を保持する

ことなく、種々の系統から實地の必要に應ずるものを選択採用したに過ぎなかつた。彼の教育説も亦科學的根據を有するものでない、又吾人は其の連關した發表をも見ない、唯彼の哲學及び修辭に關する書中に散在するものを總合して之を知ることが出来るのである。次に其の大要を掲げることにする。

キケロの教育思想  
教育の必要

教育は自然から與へられた性を完成しようとするものである。人は教育を必要とする、何故と云ふに人は自然界に於て最高の地位を保つべき運命を有し、且其の精神上の優秀な點(特に道德の基礎たる理性)が細心の指導を要求するからである。人は知及び情に關する稟賦の性を具へて生れるが、此の性は初め潜伏の状態に在り、後に次第に發展し、正しく導かれることにより人をして善良且幸福ならしめる。吾人は幼者を教導することを、國家に對して爲す所の最大且最良の贈物とする、此の贈物は幼者の氣力の衰へ全力を盡して之を振興する必要あるときに於て特に價值がある。善の萌芽を成るべく早く惹起し、總ての罪惡の源たる逸樂心を抑壓し、高尚な思想を生せしめるについて吾人は教育を指て他に良法を有しない。而して

教育の第一の任務は宗教心の養成である。眞實、正義及び圓滿な共同生活の基礎は宗教に在るが故に、人は早くから、萬物を主宰し人の内心をも洞察する神を信するやうにならねばならぬ。

## 被陶冶性

初生兒は殆ど精神のない状態に在るけれども、早く感覺を發し知識を有するやうになり、手を使用し、又自己を養育するものを認知するやうになる。且一般に幼者は同年齡の者と親しみ遊ぶことを好み、遊戯に於て倦み疲れることがない。童話の如きも兒童の喜んで聽く所である。其の他兒童は他人を喜ばしめようとして勉め、家庭内の事柄について鋭敏に觀察し、學習し考察する傾向を示し、其の見る人の名を知らうとし、同年齡のもの同士、勝利を得るときは喜び、敗れるときは落膽する。斯くして知的生活と共に道德の萌芽も漸次に發生し、活動力も年と共に進む、休止に反する傾向は既に兒童期の初めに於て見ることが出来る。

## 外圍の影響

幼者の發達には其の外圍の影響が甚だ大い、正しい發音、高尚な思想の發表も之に由る。時には幼者を罰することが適當であるけれども、之には決して侮辱的分子を含ましめてはならぬ、失行に應じ、其の同様な場合には同

様の罰を加へることを要する。怒に乗じて罰を加へてはならぬ、何故と云ふに激した心情は常軌を逸するからである。叱責する場合にすら怒又は嫌惡の情を交へないで、被叱責者をしてそれが自己の利益の爲めにせられることを覺らしめねばならぬ。斯くして各人をして其の教師及び學校に對して感謝の情を表するやうにならしめ、更に一步を進め、此の情を個人の從屬する社會に對し、義俠的愛情として表示せしめることが必要である。人は國家の爲めに陶冶せらるべきものである、國家が吾人を生れしめ且教育するのは、吾人をして何等の務を盡すことなく唯安樂に休止せしめる爲めでない、國家自身の存立の爲めに多大の精神力を必要とするからである。故に吾人は國家を益するに足る科學及び技術を學ばねばならぬ。幼者を善に導く大切な線路は其の名譽衝動である、而して此の衝動は幼時に於て既に著しく發現するものであるから、早くから種々の手段で之を養成せねばならぬ。國家は其の國民が恐怖心又は懲罰を避けようとする意志に依るよりも寧ろ恥辱を感ずることによつて惡を避けるやうに其の法規、制度を立てるべきである。又一般に教育は幼者の特質に注意し、之を貴重すべ

きものであつて、教育者は決して人性に反する如きことをしてはならぬ。少年に最も危険なものは肉體的慾情特に色情である。之に對しては彼を懦弱ならしめる總ての傾向を抑止し、心身を勞働し鍛鍊せしめ、禮節を重んぜしめ、又其の名譽心を高めることを要する。少年が其の休養の際年齢相應の樂をなすことは差支ないが、常に禮義を失はしめないやうにし、又他人の判斷を常に眼前に保たしめることを要する。

セネカ

(三) セネカ

セネカは紀元前四年コルドバに生れた、幼少の時兩親に伴はれてローマに移り、學術を修め、特に哲學を研究し、後ネローの教育主任となり、其の帝位に即いた後はローマ帝國の政治に參與し、權勢大に揚つたが、遂にネローの厭ふ所となり、叛逆の謀計に關係したとして紀元後六五年死刑に處せられた。

セネカの哲學

セネカはローマに於けるストア哲學の代表者である。彼は自然界に於て神を認め、物體を神の現象に過ぎないものとし、人の精神を神的精神の一部とし、従つて人を世の最も完全な本體とし、神の特別の愛と保護とを受け

るものとした。人の具有する理性は神から發したもので此の性の存することは吾人の内部に神の存在することを證示する。人が萬物の靈であるのは此の性に由り、又人が自己の高尚な本體及び起原を自覺し、内心自由の状態に達し得るのも之に由るのである。然るに人性中には此の理性に反抗するものがある。之は衝動(慾情)と名づくべきものであつて、之と戰ふことが吾人の最も重要な道德上の任務である。之を節するに止まらず、全く破壊することによつて始めて道德及び眞の幸福に達することが出来る。然し之は容易のことでない、多大の努力を要する闘争の後漸く達せられるのである。斯かる奮闘に於て吾人を指導するものは哲學である。哲學は神を敬畏し人を愛することを教へ、總ての人を神によつて支配せられた國家の成員として示し、又其の國家に於ては正道、敬虔、好意の如き形となつて發する道德が主要動機となるべきことを明かにし、人をして彼に於て存在する神の法則を認めるに至らしめ、避け難い逆運に耐へ、喜悅によつても苦痛によつても動かされない靜平な心を得しめるものである。自己の意志を神意と一致せしめることを知る人は眞に賢者であることが出来る。自己の缺點

と戦はうとするものは先づ其の缺點を知らねばならぬ、自己の缺點を知ることには改善の第一歩である。故に人は深く反省せねばならぬ、夜になれば経過した一日中の事柄について精密に回想することを要する。

セネカの倫理

セネカは一神説を唱へることによつて基督教に接近したが、其の倫理も亦同教の倫理に近かつた。即ち彼は人類に對する普遍の愛を主張し、如何なる下賤の者に對しても純粹の同情及び慈愛を表し、憤怒し疾惡することなく、人の弱點を認めて之を惡むよりも寧ろ憫み、溫和な心情を以て、献身的に働き、敵を寛容し、怨に酬ゆるに徳を以てすべきこと等を説いたので、此の點に於ては確に上古の思想に卓越して居たのである。

セネカの教育思想

右の如き哲學及び倫理上の思想は之に應じた教育説を生せしめた。彼の考によれば教育は慾情を制し、理性の支配力を顯著にして、道徳的生活を實現しようとするものである。人性に於ける惡衝動は善衝動に先立つて現はれるものであつて、人は精神上の疾病を具へて生れるものである。此の事實は教育の非常に必要なこと、其の至難の業であること、を認めしめる。教育者及び教師の務は重大である、彼等は政治家と同様に國家に對

して最大の貢獻をなすものである。故に吾人は其の選擇に最も深く注意せねばならぬ。教育者の第一の徳は適度である、教育者は醫師に類似した役目を有するのであるから、急進、過激であつてはならぬ。病的状態の心情は和らかな藥と細心の手當とを要する、故に成るべく溫和な言語で、心情に治療的影響を及ぼさねばならぬ。然しながら寛に失し、高慢、剛愎な傾を進めることも固よりよくない、教育は能く中庸を保ち、寬嚴宜しきを得ることとを要する。初めは忠告により、其の效なきとき訓戒、叱責、懲罰を用ふることにし、且其の罰は初めは成るべく軽いものを用ひ、怒に乗じて行はないやうに注意することを要する。懲罰は恰も外科の器械のやうなものである、一時の苦痛を生せしめても治療を速かならしめる效がある。

個性に應ずる教育の必要

教育者は兒童の個性を明かにし、之に應じて其の取扱法を考へねばならぬ。異なる性質は異なる取扱を必要とする、臆病な心情は親切溫和の取扱によつて快活ならしめ、容易に興奮する性質に對しては之に反する方法を用ふることが必要である。個性を抑壓することは如何なる事情の下に於ても許すべきことでない。名譽衝動を利用することは教育上非常に有効

である。習慣と練習との効果も亦甚だ大なるが故に、最も幼少の時から善い交際に慣れしめ、善い模範に従はしめねばならぬ。教訓に依る指導は、長い路を要するけれども、實例によるものは簡單で且有効である。總て練られたものは最も強い、之は恰も屢風雨の試練に耐へた木の力の強大であるが如きである。

教授も亦道德的陶冶を目的とする、徒に多く知らしめようとするのは誤謬である。總ての不用の學習は避けねばならぬ、外面を修飾し智能を衒はしめることなく、眞に内心の發達を勉め、實際の生活に適する實地的陶冶を受けしめねばならぬ。世の學問を獎勵するものは多く之を生活の爲めにしないうで學校の爲めに修めしめようとする、之は甚だ誤まつて居る、吾人は寧ろ其の反對に學校の爲めでなく生活の爲めに學ばしめねばならぬ。多讀は心を散亂するから最良書類の選擇が必要である、文法、言語學、哲學に關するものが有益である、實科特に幾何、天文も亦學ぶべき價值がある。自然を學ぶことによつて吾人は神の存在を認めることが出來、又心的生活を自然の法則に従つて構成することも出来る。然しながら各人が斯かる嚴格

學校の爲め  
なく生活の爲  
めに學ぶこと  
の必要

な科學的修養に適するものでない、特に感情的であり興奮し易い性の人は斯かる困難な學習を避け、心を和らげ且爽快ならしめる學術技藝例へば歴史的談話、詩文、音樂の如きを學ぶのがよい、適度の身體的練習も亦有益である。

(三) クインチリヤヌス

クインチリヤヌスは紀元後三五年(四二年とも云はれる)カラグルリスに生れた、幼少の時ローマに來たり辯論術を學び、一時辯護士を業としたが、後之を止めて辯論術の教師となり、ヴェスパスヤヌス帝に聘せられ、上流子弟の教導の任に當つた。然るに彼の妻子の死去は彼をして公共生活上の活動を止め、退隱して専ら著述に従事せしめたのである。彼の死去の年は明かでない、紀元後九五年と云はれ又一一八年とも云はれて居る。

クインチリヤヌスの教育意見は其の演説家の養成を説いた著書に於て見ることが出来る。それは嘗てキケロの説いた所と大差はないけれども、其の著しい點は、兒童の學校入學前からの教育法を説いたことである。即ち彼は從來人が根柢を作らないで直ちに特殊の技能に長せしめようとし

クインチリヤ  
ヌス

演説家の養成

たことを不當とし、他日演説家として卓越せしめるには先づ一般的陶冶について注意せねばならぬと考へ、斯くして人の最幼時から演説家として公共生活に入込むまでの教育を一貫して論じた。次に其の要點を掲げて置く。

## 最初時の教育の必要

總ての人は自然から一定の性能を受けて生れる。活動と發明的能力とは人類に固有のものである。然し此の性能も細心の指導に依らなければ發展しない。故に早くから此の性能の發達に注意するのが教育の主な任務である。兒童は七歳に達して始めて理會力を生じ、作業に耐へるやうになるから、此の年齢に達しないものに教へてはならぬと云ふ人があるけれども、吾人は如何なる年齢のものにも陶冶上の注意を缺いてはならぬと思ふ。保育は勿論知的陶冶も早く行はねばならぬ。知識の元素と見るべき記憶が幼時に最も眞實であると云ふ事實は益深く此の時期を逸してはならぬことを感せしめる。記憶を進めるには多く誦讀的に學び、成るべく毎日之を行ふことが最も有效である。記憶は勉めることにより進歩し、怠ることにより退歩することの著しいものはない。又話方の最初の指導について

## 共同教育の必要

も大に注意すべきものがある。嫁母は善良な性を有する外發音の正しいものであることを要する。嫁母の言は兒童の最初に聞き且模倣するものであるから、其の良否は兒童の言語に多大の關係を有する。尙一般に兒童の周圍に注意し、言語上及び徳育上に有害な影響を及ぼすものを除かねばならぬ。教育者は假令學識は高くなくても、少くとも其の高くないことを自ら覺つて居なければならぬ。僅少の知識を有するに過ぎないで自己を優秀なものと思ふ人は、厭ふべきものはない。

共同教育は遂に個人的教育に優る。個人的教育に於ては教師が其の全注意を一人の被教育者に集注する利益があると云ふ人があるけれども、教師は終日一人の生徒を働かす必要はない。斯くすれば却つて彼を過度に勞せしめ、獨立力の發展を防げる虞がある。然るに共同教育に於ては比較的良好教師を得易いのみならず、後に辯論家として公共生活に於て大に働かうとするものに最も必要な素養を得しめる。即ち人を恐れることなく、多數の人に對しても靜平な態度を持ち、自己を他人と比較し、種々の場合に應ずる習慣を構成せしめる。孤立的精神は衰弱し、空想を以て満たされる、人は他



人と交際することによつて始めて人を理會し、競争心を發し、精神をして常に活動し進歩せしめることが出来る。名譽心の如きは、それ自身では寧ろ缺點と云ふべきものであるけれども、道德の手段となり得るものであつて、是も亦學校に於て養成せられる所である。然し學校は餘りに多くの生徒を收容してはならぬ、教師は一目で全體を總觀し得るだけの生徒を一時に教へることを要する、斯くして教師は生徒中の勤勉で才能に富むものを知り、其の養成について特別に注意することが出来る。

教師は深い學識と高い道德的品性とを有し、自己を德育上の模範とし、生徒をして毎日其の口から多くの善い教を聽いて歸家せしめるやうにせねばならぬ。教師が若し眞に生徒により敬愛せられて居るならば、其の活潑な音聲の効力は甚だ大なるものである。又教師は其の生徒に對して父の心情を保持し、其の親の代理たる地位に在ることを忘れてはならぬ。尙嚴格なことに於ても友愛なることに於ても度を保ち、罵詈に類する語を用ふることなく、又濫りに褒賞を行ふことのないやうに注意せねばならぬ。生徒の個性に注意し、特質を失はしめないで却つて之を發展せしめるやうに

教師の資格

導くことも必要である。

體罰を行ふことは不適當な教師の便利とする所である。教師が若し能く其の務を盡すならば斯かる手段は不要に歸するに相違ない。斯かる手段は、第一野鄙であつて、奴隸の取扱法に類し、生徒を侮辱するものであり、第二戒められて尙改めない程の心情を有する兒童は更に鞭うたれることかからして無神經となる虞があり、第三指導者の注意深い監督は實際斯かる懲罰を必要とするから教育上價値のないものである。人は兒童を直接正しく行ふ方向に導かないで、正しく行はない時に之を罰することを勉めて教育上の缺點を補はうとして居るやうである。之は甚だ誤まつて居る、兒童は之により單に恐怖の情及び惡意を高めるに過ぎない。

規則正しい教授を始むべき年齢を一般的に決定することは適當でない、個人的差異は此の事を不可能ならしめる。教授の材料としては最初にギリシヤ語を用ふることを要する、國語は自然の交際により學び得られるから之を最初に教ふる必要はない、且國文學はギリシヤ語から發達したものであるから、前者の知識は後者を豫定する。一般に言語教授の務は正しく

體罰の不當なこと

教授の材料及び教授法

話し書き且讀むことを教へ詩人を理會せしめるに在る。而して其の際徒に急いではならぬ、急ぐときは力に適するよりも多くを學ばしめることになり、學習を不確實にし中止又は反復の必要を生じ、又錯誤を生じ易い。多くの人は後に教ふべきものから始め、最も立派に見えるものを學ばしめて、外面的成功を誇らうとし、従つて又簡便法に依らうとするけれども、之は眞の進歩を妨げる誤謬の方法である。又初級の教授には最も熟練な教師を用ふることを要する、初級に於ける教師の劣等であるときは後になつて二重の困難を見るやうになる、一は生徒の既得のものを除去する必要があり、一は之に代るべき正しいものを新たに教へねばならぬ。豊富な知識を有する教師の教授は最も理會し易い。讀方教授に於ては内容を主とせねばならぬ、特に倫理的内容を重んじ、之によつて節操、勇氣、趣味、獨立の如き徳の養成を助けることを要する。教授上の表明法は乾燥で無氣力であつてはならぬ、又華美に過ぎ、想像的であるのもよくない、然し前者に失するよりも寧ろ後者に失する方がよい、生徒は不熱心不活潑であるよりも寧ろ其の力を信じ過ぎ多く試み且發見しようとして熱心の度の稍過ぎる方がよい。

音樂幾何及び  
遊戯の價値

氣力衰へ想像力の缺乏するときは如何なる勤勞も之を補ふことは出來ぬ、故に特に兒童に對して乾燥、冷淡な教師を與へてはならぬ。之は若い植物には乾いた土地が不適當であると同様である。

言語の外音樂も、未來の辯論家には當に言葉の位置についての感情、音聲の正しい抑揚を得る上に必要であるのみならず、身體の運動及び一般の動作に於て優美な律動を生せしめる價値がある。幾何は知力を進め、殊に悟性を鋭敏にし、速かな知得力を發達せしめるから心力を練る上の重要な學科である、特に辯論家は之によつて明瞭な斷定推理の方法に馴らされる。斯かる異なる學科を同時に學ばしめることは幼弱な精神を混亂せしめ、疲勞せしめるに過ぎないと見る人があるかも知れぬけれども、人心特に幼者の心は常に唯一材料にのみ從事することに耐へるものでない、其の活動性は變化を要求し、變化によつて有力となり、新鮮で熱誠な状態を生ずるものである。尙幼時には精神がまだ自發活動の力がなく、受動的に材料を受納することが多いから、比較的多くの働に耐へるものである。一般に受動的な作用は自發的作用に先立つものであつて、總ての進歩は聽くことに基く、

然し間斷なく材料を變更して斷えず精神を勞することはよくない。時々之を休止せしめねばならぬ。而して休養の最良手段は遊戯である。遊戯は疲勞した活力を回復するに足るものであるが、又それ自身に於て健康の表示となるものである。常に不活潑で遊戯衝動を缺く兒童から科學上の活動を望むことは出来ぬ。其の外遊戯は兒童をして強迫せられることなく自由他人と交際せしめるから、兒童は其の際其の氣質及び品性の飾のない自然の状態を發現する。故に遊戯は教師に兒童觀察の最良機會を與へるものである。

クインチリヤヌスの教育書は後世の教育に大に參考となるものを與へた。中古時代に於ては十一世紀頃までの學校教授は之に依り、人文學派も或る點に於ては確に之を教權とした。

(四) プルタルコス

プルタルコス(紀元後五〇年—一二〇年)はケイロネヤに生れた。幼少の時アテネに移つて高等教育を受け、後ローマに來たり熱心にギリシヤ及びローマの文學を學び、知名の士と交り、朝廷からも優遇せられた。彼の著書と

プルタルコス

して名高いものは上古の有名な人物の傳記である。其の他哲學、倫理に關したものがあり、又兒童の教育に關したものもある。後者は適切な教育上の忠告を與へ、當時の道徳上の腐敗と實際教育とを明記したものである。此の書が眞にプルタルコス自身の著述であるかは疑問とせられて居るけれども、其の内容は彼の考を示すものと見てよからう。其の要點は左の如くである。

教育は天性と教授と習慣とに依る。沃土と善い種子と勤勉な勞働者とが農事に必要である通り、教育に於ては善い天性に適當な教師に由る善い教導訓練が加はらば善い習慣を養成せねばならぬ。幼兒は母の眞の慈愛の下に保育されることを要するが、母に其の能がなければ善良な乳母を選む必要がある。一般に幼者は容易に陶冶せられ、撓め易い性を有し、教誨が其の上に押印せられることは恰も印形が柔かな蠟の上に其の形を止める如きである。故に幼者を教ふるものは經驗に富み品行の優れたものであることを要する。兒童を満足に教導し得る人は自ら清淨潔白な生活をなし、不品行特に飲酒の惡習のないものに限る。

プルタルコス  
の教育思想  
天性と教授と  
習慣

教育の目的及び方法

教育の最高目的は道德である、而して其の目的は善い指導によつてのみ達し得べきものである。教育の方法は身體を練習するものと精神を練習するものとに分たれる。身體の練習は健康の基礎であるけれども、過度になると精力を消費し、修學の勇氣を失はしめることになる。此の練習は優美であり、而も氣力ある態度を生せしめることを目的とする。精神上的の練習としては、諸種の學科を修めしめて普通の學識を得しめることが必要である。然し此のことに於ても度を保たねばならぬ、世の父母は往々其の子を愛することから成るべく多く知らしめようとし、従つて勞働を過度にし、學習の興味を消失せしめる、又善く教へ能く覺らしめることによつて有益な科學を學ばしめないで、徒に鞭撻し又は恥辱を感せしめることに依る弊も認められる。吾人の全生活は勞働と休止との更代から成立つものであるから、兒童の休養を輕視してはならぬ、休養が勞働の根源であることは、管に動物界のみならず無機物界に於ても見る所である。

總ての心的陶冶の頂點は哲學である。哲學が精神に於けるは醫藥が身體に於けると同様である。哲學は人の弱點及び慾情に對する唯一の醫藥

哲學の價値

である、人は之によつて美醜正邪を區別し、選むべきものと除去すべきものとを分つことが出来る。故に兒童期に於ても既に哲學的考察に慣れしめるがよい。之は初めは困難であるけれども次第に平易になり又興味をも生せしめる。人に於て理性が劣等な性を支配すると同様に世界の上には整理的保護的勢力として働く神がある、而して最上の神は總ての善の發生者である、彼に於ては憤怒、疾惡の如きものはない。之に反して人は生れながらにして罪惡を有し、機會ある毎に之を發現する、理性は慾情に反抗しなければ之によつて壓倒せられる、故に吾人は哲理を心の非理性的部分に受容し、自己を漸次に邪惡より遠ざけ、斯くして自己認識に基く改善に達することにより自己を神靈の域に進めることに心懸けねばならぬ。

第三章 上古に於ける基督教教育

第一節 基督教教育の本質

基督教は上古の人生觀を一新した、同教は萬物の根源及び本體を神に置き、一切の物は神に於て存し、神は又總ての物に於て存するとし、世界を神に

基督教の人生觀

よつて維持せられ、動かされ且支配せられるものとし、人を永久無限の木に於て發する蕾に比すべきものとし、神の實在と生活とを表現する爲めに常に益大なる花を開かうとして居るものとした。即ち同教は神人を本來同一のものとし、神は人に於て理性、徳性、美性として現はれ、人は是等の高尚な勢力の下に自己を服従せしめることに由り、益其の神の模寫たることを顯著にするものであるとした。斯かる思想は人事を上古に於けると全く異なる標準に基いて評價せしめた。上古に於ける人は唯國家の爲めに存し、それ自身に價値を有しなく、國家に盡すことの多少により其の價値が決せられた。然るに基督教は人のそれ自身の權利及び價値を認め、人の眞の目的を彼岸に於ける永久生活即ち眞の郷里たる天國に歸著して神と合同する状態に置いた。且人は總て此の目的を有し例外なく、如何なる下層のものでも、在天の父の子であり神の模寫たることに基いて同一の權利を有し、同一の性を具へて居ると見做された。神の前には貴賤、貧富及び男女の區別はない、唯神を畏れ行を正しくするものが神に悦ばれる。故に國家は、最早個人が全く自己を捧げ、其の人格の權利を犠牲に供せざるを得ない所の最終

の目的でなく、却つて神の領土を擴張し、又人を其の眞の目的に導く任務を有するものである。道徳上の理想も亦國家的共同生活に對しての價値に依るものでなく、神及び彼岸の生活にまでの關係によつて決すべきものであると見られた。結婚はローマ思想に従へば正統の子を生ましめる制であつたが、基督教に於ては之を神によつて決定せられた神聖な規定であるとし、之に違反したものは神に對して罪があるとせられ、女子を男子の同伴者とし、又友として見、兩者に同等の地位を與へ、古代の家長權を否認し、兒童は神から授與せられたものであるから、之を教育するのは兩親の神聖な務であるとした。一般の思想上の斯かる變化が教育上に影響したことは見易い所である。カール・シュミットは基督教教育の性質を論じて次のやうに云つて居る。

基督教は人の眞の本體即ち人性に於ける神靈なものを發現し、發達せしめて、彼を道義的自由の状態に至らしめ、彼を造つたものに類似せしめようとするものである。又人を全體的な生活に於ける一員と見、一方に於ては彼をして一種の性格を有し、其の個性に應じた獨立を保持せしめよう

カール・シュミットと基督教教育の性質

とすると同時に、他方に於ては全體に對する愛情を養ひ、献身的行動を發せしめようとし、且總ての人に於て總ての力を調和的に發展せしめる爲め、一方では技術、科學、世界及び生活が與へる一切の陶冶的手段を用ひ、他方に於ては人をして其の獲得した知識に従ひ表明し、作造せしめ、自ら作造者たると云ふ點に於ても亦造物者に類似するに至らしめようとする。斯くして基督教教育は人をして神の領土即ち理と徳と美とが親密な結合に於て主權を保持する領土の發現を務める戰士の列に加はらしめようとするものである。

要するに基督教教育は第一、一般的人道的である、之は上古教育の階級的であつて、下層人民を除外したことに對して著しい差異を示すものである。第二、基督教教育に於ては強い出世間的傾向が認められる、此の宗教は天國を目的とするから、現世を一時的であつて、單に天國に達する準備として存するものとし、従つて人を現世に執着せしめるものを排斥し、且人を其の自らの儘にては罪障深きものとした。其の結果身體と精神とは嚴格に區別せられ、後者は天國に其の起原を有し、従つて神靈なものであるが、前者は現

基督教教育の  
特徴

世的であり、卑下すべきものであり、其の慾を禁止し、必要を制限し、寧ろ之を苦しめることによつて精神を清淨にし、之を未來の生活に適せしめることが出來るとせられた。斯かる傾向は後に大に緩和せられたけれども、中古時代を通じて基督教教育に於て著しく現はれた。従つて以前の教育に於て見るやうな客觀的美的要素は基督教教育に於ては其の勢力を失つた。基督教以前は人の青年期に相當し、現世に望の多かつた時であつたから、優美な粧飾を好んだのは自然であつたけれども、基督教は心身の優美な發育を説くには老ひ過ぎて居た、老成者に比すべき基督教の思想は外に向はな

ウキルマン  
教授の基督教  
教育

いで内に退き、其の希望は現世でなくして未來に在つたから、總て現世のもの

を貴重しなかつたのである。ウキルマン教授は此のことについて左の如く云つて居る。

基督教は人の内外を優美に作らうとするものでない、教化の美的傾向に對しては拒絶的態度を保持する。同教の理想は人格の多方的修飾よりも其の改造に在る、従つて其の理想から發した教示は皆此のことを目的として居る。然し寺院が神事について大に美術を利用したことは間

接に基督教教化中に美的要素を加入せしめ、且基督教の精神に適つた一種の内容で美的形式を満たした。之が爲め形式上の純粹なことは損害せられたけれども、新内容は之を償つて餘あつた。即ち基督教は作造の總ての方向に對して深遠徹底の傾向を與へた、實際基督教界の製作に比して、それ以前のもの如何に雄大で且形式上完備して居ても、冷淡で心情を缺き、殆ど魂魄の存して居ないやうに見える。これは音樂の上にも、造形美術の上にも、詩文言語の上にも見ることが出來、又教育及び教授の上にも現はれて居る。然しながら美術がギリシヤ教育に於て有して居た指導的地位は基督教教化に於ては最早持續せられなかつた。同教化の嚴肅な人生觀は、人の高尚な遊戯的衝動に內的構成上の主要動力を與へることを避けたのである。

## 第二節 教育者としての基督

基督は其の言行に於て即ち其の全生活に於て人類の教師であり教育者であつた。彼は強大な宗教の創唱者として多數の人類の進歩上及び幼者

基督の教育的  
能力

の發達上の理想となり、又教師及び教育者の理想ともなつた。彼は前に掲げた如き宗教的的人生觀に基いて人を導き、常に模範を主とし其の教へる所を自己の實例によつて有力ならしめ、人をして實地の模倣によつて神の模倣たり神に類似するについて何を爲すべきかを覺らしめようとした。要するに彼は其の一身に於て教育の理想を具體的としたのである。彼は又教ふる方法に於ても永く一般の模範となつた、其の聽衆の個人的地位を考慮する點に於て、又其の説明、發問を必ず一定の目的に従つて行ひ、其の教育上の要求を内容に於ても形式に於ても適度ならしめる點に於て、明かに教師としての知能及び手練を認めることが出來る。彼は活潑な信仰に導くことを其の働の目的とし、之について相手の生活の程度に應じて漸進的歩調をとり、教材の性質と相手の能力程度とに従つて或は講演し、或は發問し、或は對話的に教へた。語調は嚴格であつたけれども、冷酷でなかつた、親愛の情は彼の常に有して居た所で、教授の時期の終末に近づくか又其の效果の疑はしい時に於て益多く努力した。尙其の教授方法上の著しい點を擧げれば、直觀的であり明瞭であり徹底的であつたのである。其の材料とし

て用ひたものは主として模範的行爲、直觀的事物、分解せられた個々物體、俚諺、格言、寓言、反對の例、記事、歴史上の比較等であつた。是等の材料は常に悟性發展の爲めに用ひられたのみならず、又意志陶冶の手段とせられた、即ち之により消極的には基督及び其の教に對するユデア人の惡意を防ぎ、積極的には人をして其の聽いたことを練習し、自ら之を應用することを勉めしめたのである。

基督の教法

基督が其の教を人の心肝に銘せしめることが出來たのは其の品位の高尙であり、其の慈愛の無量であつて、自ら人を敬服せしめたに由ることが大かつたのである。けれども、其の教ふる方法に由ることも亦少くなかつた。而して其の方法は要するに一部は外部的であり、一部は内部的であつたのである。外部的と云ふのは有力な表式及び言辭を用ひて注意を惹起し、重要な真理に對して特に教授を有效ならしめた伎倆を指し、内部的と云ふのは一部は聽者の心情的生活及び其の感情の考察に意を用ひ、自己及び他人に於ける感動を如何に取扱ふかを知つて居たことを指し、一部は其の談話法の簡單で且確實活潑であつたことを指すのである。其の他基督の教授

上の熱心についても最も敬服すべきものがあつた。聽者の多寡に關しなく、一人に對しても多數に對すると同様の熱心を以て教へ、私家に於ても寺院に於ても、如何なる人に對し如何なる困難不快の時に於ても同様の熱心を示し、罪人との交際をも嫌ふことなく、且常に愉快なものよりも必要なもの及び有益なものを選んだ。彼は其の功勞が承認せられなく、却つて恩を知らない行動で酬いられても意に介しないで専心其の職に従事すべきことの實例を示して教師の慰撫者となり、又其の獎勵者となつたのである。

第三節 基督教教育の初期

基督教徒の子女の教育は初めは主として家庭の事柄であつた。家庭に於て子女は其の宗教に關する知識を得且父母の模範により又殉教者の行動を聽くことによつて自ら敬神の念を強くし、誠實、貞節の心を深くした。殊に母が献身的に其の子の養育に従つたことは異教の人をも敬服せしめた。と云はれて居る。母は兒童を神から基督に與へられたものとして見、基督を保育したマリアを模範とし、死んだ形式的信仰でなくして、簡單な而も眞

初期の基督教教育  
家庭教育



熱な歸依の情を有することにより最も適當な幼者教育者たることを得た吾人はヒエロニムス(ゼローム, Hieronymus)が一婦人に答へて女兒教育上の注意を述べた書簡により當時の教育が如何なる精神に依つて居たかを知る事が出来る。それには大體次のやうなことが記されて居る。「子女をして俗歌を覚えしめてはならぬ、又卑穢な事物を経験せしめてはならぬ、之に反して小兒の舌は早くから讚美歌を唱へることに慣らされることを要する。木又は象牙で文字を作る遊びをなさしめ、遊戯を學習上に利用すべきである、友と共に學ばしめ、競争せしめることに由つて獎勵するのは善い、其の進歩が著しくなくても罰してはならぬ、褒辭を用ひて其の心を勵まし、他人に優るときは喜び、劣るときは悲むやうにならしめねばならぬ。絹布及び寶石よりも聖書を有するを喜び、又其の書中の彩色ある圖畫よりも内容を好むに至らしめることを要する。讀書、祈禱及び勉強は浮世の激しい海を安全に通航せしめ、生活上の奢侈邪惡に染らない清廉の風を養ふものである。」

トカテクメナトの制があつた。基督教の初期に於ては家庭教育以外にカテクメナトの制があつた。

之は本來兒童教育の爲めのものでなく、異教者の基督教徒とならうとするものに同教の眞理を覺らしめ、新生活に入り、基督教的通世的生活規定に従ふ爲めの準備をなさしめようとするものであつた。斯かる教育を受けるものはカテクメナトと稱へられ、三階級に分たれた、其の最初のものには豫備生であり、次はカテクメナト(狹義)であり、最後のものは選拔生又は候補生であつた。其の教授は基督教の本義についての口授に止まり、普通の學術を取扱はなかつたのである。早い基督教界に於ては其の他に學校はなかつたから、父母が若し家庭に於て十分に讀書算を教へ、又高尚な學術を學ばしめることが出来なければ、其の子女を異端の學校に送らざるを得なかつた。實際同教徒の少年で異端の學校に入り、古代の學者の書を學び、ギリシヤ人及びローマ人の言語上の技能を根本的に獲得しようとしたものがあつた。畢竟基督教はギリシヤ人及びローマ人と全然其の人生觀を異にして居たに拘はらず、傳來の教化を拒絶しないで却つて自己の爲めに其の教化材料を集め之を自己の教理に利用し、其の支持者たらしめようとしたのである。基督教界に於て學校制度の眞に能く整備せられたのは同教に對する迫

害が止み、宗教の自由の認定せられた時(三一三年)以後であつた。即ち第四世紀後に於ては子弟を異端の學校に入學せしめることに反對し、純然たる宗教主義の學校を要求する聲が高まり、所々に學校の設立を見るに至つた。特にアレクサンドリヤの學校は高等學術教授の場所として第三世紀から第四世紀の初期に亘り盛大を極めた。此の學校は舊と入宗準備者の教育を目的としたものであるが、後にギリシヤ及びローマの科學即ち哲學、幾何、文法、修辭及び特に數學と天文とを教科として用ひ、基督教の理を科學的に取扱ひ、一般に高等の教化を行ひ、同時に又宗教の眞理を傳へ且之を保護すべき未來の宗教教師を養成することを目的とした。

## 僧徒と教育

僧徒生活も亦教育事業の發達を促した。僧徒と云ふのは、普通の基督教徒の義務を盡すだけで満足しないで、現世界及び其の快樂、美術、學問から全く隔離し、俗世界との一切の交際を絶ち、嚴密に基督教義に従ふ生活をなさうとする有志團體であつた。彼等は僧庵の墻壁内に遁世的禁慾的生活をなし、祈禱、冥想、手技を事とし、科學の研究をも、神に接近する心を再び現世に向はしめ従つて僧徒の目的を誤まらしめるものとして排斥した宗教上の

學問すらも最初は僧庵内の事業ではなかつた。然し少年の教育については僧徒の早くから留意した所であつて、僧庵には學校が附屬せしめられた。而して其の教育は最初は僧徒の理想を續ぐ者を養成することを目的として居たけれども、後には一般に教化を進める爲めのものとなつた。此の僧庵學校は中古時代に於て文化を維持する上に多大の功績のあつたものであるから同時代の教育を説くとき更に之について述べる積りである。

## 第二編 中古の教育

### 第一章 總論

中古と宗教の  
影響

中古教育に於ては國家は最早昔日の勢力を有せず、寺院にまで其の地位を譲つた。即ち教育は國家の爲めに國家によつて行はれることなく、全く寺院の指導の下に立ち、教化の形式、内容及び範圍は其の主要の點に於て寺院の決定する所となり、其の目的に利用せられた。基督教は前に述べた如く現世を天國の準備に過ぎないものとし、罪惡の爲め腐敗した人は肉身の慾を制し、現世を卑下し、之と關係を絶ち、其の郷里たる天國に歸るべきものとし、而して寺院を此の世に於ける天國の代表者とし、未來の光彩を表示し、有限界に於て無限を表現する唯一の形式とし、従つて之を罪障深い人類に對する唯一の救済者とし、一切の誤謬を離れた完全な真理の保持者とし、又其の救済的行動に於て神意を表明し、其の教訓に於て理を超絶し、人の思考の到達し得ない神祕を示すものとし、總ての教徒は一意寺院の教に服し、其

の命令を遵奉し、其の爲めに働き、之に一身を捧ぐべきものとした。而して斯やうに國家に代り人の上に無限の支配力を有するやうになつた寺院は、其の地位を保持するにつき傳來の學術を利用し、幼者を教導するを必要と感じたので、間接に教化の維持保護について貢献する所が少くなかつた。然し教化は單に宗教の手段として用ひられたに過ぎなかつたから、學術それ自身の價値は認められなく、宗教に利用し得られない學術は却つて有害なものとして排斥せられ、教育も亦嚴に出世間的禁慾主義に従ひ、寺院に忠實なものを養成することを目的とし、上古の優美な文學の眞價は了解せられなく、自然界は輕視せられ、其の觀察、攻究は沮止せられ、總ての事は教權により命令的に決定せられ、個人の特種な思想、其の個性の自由な發達は許されなかつた。之は勿論偏狹な傾向であつて健全な教化の理想に反し、眞の科學的精神と相容れないものであるけれども、吾人は之が爲め中古に於ける基督教教育の價値を無視することは出来ぬ。殊に其の出世間的唯心的傾向が輕浮な考察を排し、外部の雜多の事物に向はないで深く内的に考察し、徒に廣いことを望まなく、一事の完成を期し、單に現象に止まらないで之を

ゲルマリーネンの人生觀

其の一大根源に歸着せしめようとしたことは實際生活の上にも、又學術の眞の高い進歩の上にも大切な要素となつたのである。

基督教は中古教育の重大な要素であつて、近世の文化の上にも少からぬ影響を及ぼした、而も近世の文化は尙他に新元素を要した。上古の人民は數世紀の開化の道を通過し、老朽に傾き、現世に望を絶ち、宗教に依り、之に於て慰安を求めたのである。斯かる人民から新文化を發現する大勢力の發揮を期待し得ないことは明かである。近世の文化の大潮流の源としては、奢侈、惰弱の弊風に染まなく、悲觀懷疑の精神を有することもなく、内に充溢する英氣を蓄へ、敢爲進取の氣風に富む人民を必要とした。而して此の必要はゲルマリーネンのローマ帝國侵入により満たされたのである。同人種の侵入により中古の生活は疲勞、惰眠の状態から覺醒せしめられ、新鮮な血液を注入せられることにより新活力を發し、後の大なる發達の基を開いた。尤も未開の状態に在つたゲルマリーネンの侵入は一時文化に對して破壊的影響を及ぼしたやうに見え、暗黒時代の名稱をすら生せしめたけれども、此の所謂暗黒時代に於て同人種は其の新領土に於て發見した文化を探り、其

パウルセンの意に於ての意

の征服した人民に師事し、新鮮な活力を以て研究に従事して知能を磨いたのである。故に吾人は此の時に於て既に後に非常な勢力で發現する新文化の強大な潜勢力を認めることが出来る。即ち中古時代は近世文化の準備期であり、現今の文明國民の幼年期であつた。此のことについてパウルセン教授は其の著「ドイツに於ける高等教育の歴史」に於て次のやうに論じて居る。

一見すると近世の初めの文藝復興は中古及び其の文化と正反對の現象のやうであるけれども、能く考へて見ると之は中古の精神其のものから發生したのである。斯かる純粹の内部的變動が突然外部的原因から生ずることは到底考へられぬ。今中古時代の眞相を究めるとゲルマリーネンは此の時期の前半期に於て基督教に服した、而も彼等は決して之に化しなかつた。彼等は表面上の信者になつたに過ぎなく、其の人生觀を根本的に變更することはなかつた。上古の人も嘗て一度同様の場合に遭遇した、而して彼等は眞の信者となつた。上古の人は文化の長い道を通過し、勞働によつて疲れ、限りなき欲望を遂げようとして達しない、遂

に欲望を棄却し、快樂と幸福とを棄て未來に於て休息と平和とを得ようとして宗教に歸依したのである。然るにゲルマーネンは之と大に其の趣を異にした、彼等はまた文化の何たるを知らなかつた、其の基督教を採るやうになつたのは其の開化し始める時であつた。元來寺院は其の本義に於ては此の世に於て天國を代表するものであつたのであるが、中古時代では教化の維持者及び人生の改善者たる役を務めた。尤も基督教の根本の主義たる遁世的傾向は全く消滅したのではない、寺院の教導に直接依從して居た方面に於ては明かに其の形跡を認めることが出來たけれども、中古の眞の人生觀は決して寺院の本義と一致して居なかつた。世を厭ふとか生活に飽くとか云ふ傾向は少しもなく、却つて愉快に生活し多くを獲得しようとする傾向があつた。中古の人は戰鬪征服移住を日々の務とし、常に力と富とを希望し、遊獵及び競技的遊戯を好み、又戀愛の歌を歌つた。それのみでなく、彼等は科學にも關係し、之をギリシヤ人、ユヂヤ人及びアラビヤ人の手から奪取しようとした。中古の有力な哲學であつたスコラ哲學は理によつて信仰を説明しようとするものに外な

らぬ。故に中古時代は、上古の前半期即ち人々が尙世界を珍らしく思ひ、學習を喜んだ時代に類似することが多く、上古後期の基督教的宗教的時代と異なつて居る、其の表面を蔽ふ所の出世間的遁世的宗教の直ぐ下には強大な文化生活の潮流を認めることが出來た。要するに上古と中古との關係は師弟の關係であつた。中古はゲルマーネンの學校期であり、上古は其の教師であつた、而も其の師は最早活氣を有しなく老衰して現世及び其の愉快を棄て、基督教に歸依したものであつた爲め、ゲルマーネンは到底其の教に心服し得なかつた。之は恰も嬉々として遊び活氣に満ちた兒童が悲觀的厭世的教訓を了解し得ないと同じである。彼等は唯傳へられたものを受取つただけで、深く之に留意しなかつた、従つて之によつて自己固有の人生觀を全く放棄しなかつた。故に中古は老人の衣服を着けた少年に比すべきものである。

右に述べた所からして中古教育は二期に區別して見ることが出来る。第一期は基督教主義教育の普及及び其の機關の整理を見る時であつて、ゲルマーネンが學習に忙しい時であり、第二期は政治上及び社會上に種々の

新現象を生じ、時勢の變化に應じて教育の思想及び實際に於ても新計畫を生じた時である。

## 第二章 中古教育の第一期

### 第一節 僧庵學校

ローマ帝國の頽廢とゲルマーネンの侵入とは一時文化を退歩せしめたことは事實であつて、紀元後第六世紀の精神界は闇黒に閉された觀があつた。此の時に當り教化及び教育の中心となり、光明と救済的勢力とを發したものは僧庵學校であつた。僧徒制のことは前に述べたが、歐洲西部に於ける此の種の制度の基礎はヌルシャのベネヂクト(Benedictus)によつて立てられた。五二九年ベネヂクトはベネヂクト僧徒制を設け、從順、童貞、赤貧、土着を其の四大標語とし、又閑散は精神の大敵であると云ふ原則に従ひ、僧徒をして常に宗教上の練習を行はしめたのみならず、手技及び田野に於ける勞働に従事せしめ、社會生活の改善に盡さしめ、又學校教育を同徒の發達の根據として重んじしめた。後カツシオドールスカッシオドールスは同僧徒の最初の非學術

徒  
ベネヂクト僧

的傾向を矯正し、學術の研究をも其の務となさしめた。之によりベネヂクト僧徒の事業は土地の開墾から高等學術の研究に至るまで非常に廣い範圍に亘り、其の功績は甚だ大なるものであつた而して、其の勢力範圍にはフランス、イギリス、ベルギー、スウキス、南ドイツ等の廣大な邦土が包含されて居た。

僧庵學校

僧庵學校は神に捧げられた兒童即ち後に僧徒とならうとするものを養成する目的で設けられたものである。故に其の生徒は嚴格な基督教主義の教授と訓練とによつて僧徒の職務について準備せしめられた。然るに當時適當な教育所のなかつた爲め、普通人民の子弟の入學を希望するものが次第に増加したから、遂には目的が何であつても、又貴賤貧富に關係なく一般に兒童の入學を許すことになつた。そこで一校内に内校と外校との區別を生じ、前者は本來の目的を保持し、後者は普通の兒童を教育することになつたのである。教授は僧徒により行はれたが、上級生をして下級生を教へしめることもあつた。其の教科は讀方、書方及び唱歌であつて、其の修了期限は三箇年と定められた。尙優秀な教師のあつた所では其の後更に

七藝術即ち文法、修辭、辯證法、算術、幾何、天文、音樂の教授が行はれ、其の修了には八箇年を要した。然し是等の教科は總てそれ自身の爲めに學ばれたものでなくして神學の補助として用ひられたに過ぎない例へば言語的教科はラテン語を教へ寺院の祖師の論文を讀む力を與へることを目的とし、算術及び天文は寺院歴を理會せしめる爲めに教へられた如きである。訓練法は一般に嚴格であり、鞭は教育上の必需品と見られ、監禁、絶食の如き懲罰も亦屢用ひられた。生徒は總て僧庵内に寄宿し、外界との交通を斷たれ、且常に精密な監視の下に置かれた。唯特別な時例へば寺院の祭日などには物品の授與があり、又遊戯を行ひ演劇を催すことが許可せられた。

僧庵學校の最も盛大を極めたのは第八世紀から第十世紀の間であつた。當時其の外に、ドーム學校、カタドラル學校と稱へられたものがあつて、一時は僧庵學校と盛大を競つた。是等の學校は第八世紀の半頃メツツの僧正クロデガンダが僧徒制を參酌して立てた寺院團體制に附屬したもので、其の主旨、編制、教科等も僧庵學校と大差なかつた。

ドーム學校  
カタドラル學校

## 第二節 カール大帝とアルクイン

カール大帝の  
文化的事業

僧庵及び寺院を保護し其の活動を助け、之に附屬した學校を隆盛ならしめたのはカール大帝であつた。帝は嘗てボンファチウスがドイツに於てなした布教傳道の事業を完成することを目的とし、自ら知能を磨き、且教化及び學術を其の領土内に普及進歩せしめることを努めた。而して一方に於ては國民性中の貴重すべきものゝ保持に注意し、ドイツ語及びドイツ詩歌に特に意を用ひ、僧侶をしてドイツ人に對してはドイツ語で説教せしめ、他方に於ては又上古文化の價値を認め、自らローマの名家の書を涉獵し、上古の遺跡を尋ね、模範とすべきものに注意し、且上古の科學及び藝術を自己の領土に移植しようとし、僧侶をして之を其の一任務となさしめた。斯くして帝は基督教の保護者であると同時に又學術の保護者であつた。然るに帝は當時の僧侶の品性及び知能の程度がまだ能く其の職務を盡すに足らないことを見、先づ僧侶其のものゝ教化を進めることに注意し、其の弊風を矯正し、適度、謙讓、嚴肅の行動に留意せしめ、職務の遂行に必要な教育を受

けないものが僧籍に入ることとを禁じ、又僧侶をして學校を開き、普通人民を教育せしめた。殊に帝がアングロサクソンの僧アルクインを用ひたことは高等教育の進歩の上に著しい効果があつた。

アルクインの功績

アルクインは七三五年ヨークに生れ、ラテン、ギリシヤ及びヘブライ語を學び、又神學、説話術、作詩術及び數學をも修め、七六六年ヨークの學校主事に擧げられた。然るに彼はローマに遊んだ際、カール大帝の知る所となり、其の懇望により七八二年以來帝の全領土内諸々に學校を設立する計畫に於て帝を助けることになつた。帝は彼の提議を容れ、他の多くの學識あるものを招聘し、アルクインの主宰の下に學術的團體を組織せしめた。又前王朝時代から存し而も衰頹を極めた宮殿學校を再興し、其の監督をアルクインに委任し、自ら其の皇子と共に聽講し、自己の模範により朝臣及び貴族の子弟を奨勵した。ツールに於ける學校も亦アルクインによつて改造せられ、宮殿學校と並び稱せられ、多數の名僧を出すやうになつた。

アルクインの教育思想

アルクインは教育振興の事業に努めたと同時に著述にも従事した。而して其の直接教育に關係したるものとしては三藝文法、修辭、辯證法に關する教授用書であつた。彼は教育の最高目的を容知に置き、道徳を其の結果としたから、科學中の最高價値あるものを哲學とし、其の貴い所以は管に高尚な知識を興へ、精神を最も善く鍛鍊する爲めのみでなく、主として總ての道徳の教師であり、生活の道に於て能く人の指導者となり、恩惠者となり、之に依頼し、之を信するものを決して見棄てない點に在るとした。哲學は人を其の力に應じた程度に於て自然の研究、人事及び神事の認知にまで導き、人に生活の貴重すべく且愛すべき所以を教へ、其の生活を善く組成しようとする意志を誘起し且發達せしめる。而も哲學は又人をして常に死につき考へる所あらしめるから、現世を輕視し之を嫌厭する方面に導き、従つて現世の欲望を制して思想と動作とを永久の郷里に向はしむべき基督敎信者にも適する。而して容知に達する力は各精神に存するけれども屢教師と接することによつて刺激せられなければ光明を發し得ないと論じて居る。

### 第三節 ラバヌス・マウルス

ラバヌス・マウルス (716—806) はマインツに生れた、初めフルダの僧庵に送

ラバヌス・マウルスの功績



られたが、其の監督者は彼の秀才であり、勉學に熱心であることを見て、彼をツールに送りアルクインの指導の下に於て七藝術を修めしめた。彼の同所に滞在したのは僅か一箇年に過ぎなかつたけれども、大にアルクインの信用を得、親密に交際し、相別れた後でも断えず文通によつて互に友愛の情を表した。フルダに歸つて後、彼は僧庵學校指導の委託に應じ、其の改良に盡力したが、其の勞空しからず、久しからずして、其の學校の名は外國にまで知られ、其の生徒は諸地方から來集した。後に寺院に關係し、又は學術に長じ、其の進歩に與つた人で、此の校出身者が少くなかつた。八四七年彼はマインツの大僧正に擧げられ、爾來一般人民の教育を進めることにも努力した。之により彼はドイツ國の最初の教師として知られて居る。

ラバヌス・マウルスの教育  
意見

ラバヌス・マウルスは僧侶に十分な教育を施すことの必要を力説し、又聖書を至高萬能なものゝ口から發したものと、睿知の源、其の内容及び其の完成は總て之に於て望むべきものとした。而も彼は他の科學及び異端の著者の書を學ぶことをも必要とし、之を聖書の理會に缺くことの出來ないものとした。又彼は特に教師に對して次のやうな忠告を與へた。「自ら睿知を求め、且之を他に教へようとするものは、先づ道徳的に修養することがなければならぬ、即ち自己の心で有益であり、信實であると認められたことを行為に發することを勉めねばならぬ。他人に善をなすことを勸告するものは、先づ自己の行為によつて其の實行し得べきことを示すべきである。眞の講演者は正直と言語上の熟練とによつて裝飾せられることを要する。斯くして其の講演のみならず、其の全生活が能く道徳の教となるのである。教授の際には主として生徒の個性、必要及び能力に注意し、男子と女子幼者と老人、富者と貧者、喜び勇んで居るものと、失望落膽の状態に在るもの、上流の者と従屬者、教育あるものと無教育者とに於て、教訓上參酌すべきものがあることを忘れてはならぬ。尙講演の明瞭で直觀的であることゝ、簡單新鮮で活潑であることゝは、善良な教授の要件である。定理其のものを傳へないで、其の依て發する事實を提示することも必要である。又讀み且機械的に記憶することは、價值が少い。讀み又は聽いたことについて明かな見解と正しい理解とを得しめ、生徒をして自ら考察し、一般に精神を活動することに馴れしめることを要する云々。」

第三章 中古教育の第二期

第一節 十二世紀以後の社會的變動

十二世紀前後の歐洲の社會

十二世紀に至つて歐洲の社會には重大な變動が生じた。前數世紀間に貯藏した活力が總ての點に新衝動を發せしめたのである。其の直接の原因となつたものは簡單でない。一方に於てはアラビヤ書類が漸次に知られ、ユダヤ學者との交通の道が開け、ギリシヤの科學が主としてアラビヤ人によつて西方諸國に紹介せられて高等教育の内容を豊富深遠にし又其の範圍を擴張し、他方に於ては十字軍が西方に新觀念を與へ、種々の刺激を加へ之に由つて文明生活の總ての範圍を充實せしめた如きは其の主なるものである。殊に十字軍に参加した諸國民は互に相知り、其の知識技藝を交換し、相補充する機會を得たのみならず、新たに不思議な世界を發見した。而して之によつて刺激せられた想像及び心情は先づ詩歌及び藝術の範圍に現はれた。其の悟性の領域も亦大に擴張せられ、新知識にまでの道は開かれ、科學的研究の新傾向及び新方法は西方に傳はり、科學をして其の一層大なる進歩

の爲めに新たに豊饒な土地を見出さしめた。又社會的經濟的生活の上にも著しい變化があつた。即ち武士道は之に由り發達し、商工業者の地位は經濟法の進歩及び交通貿易の發達の結果として大に改良せられ、従つて又村落の繁榮を來たし、自然的生産物の需用を増し、農民の状態を改善し、其の自治力を進めた。而して諸階級の進歩と之に伴つて生じた自覺力の昂進とは、必然的に心的陶冶によつて其の進められた地位を辱かしめないやうにしよとする傾を生じた。此のことは急速の繁榮を來たした都市の住民に於て特に著しかった。故に從來の出世間的教育を行ふ僧庵學校及び其の他の宗教學校の外に新たに都市學校が設けられ、最高教育の場所として大學が所々に設立されるに至つた。尤も總ての新事業の中心は尙寺院に在り、新たに發生したもので多少宗教的臭味を帯びないものはなかつた。大學に於ける新哲學即ちスコラ哲學の如きも科學的神學と見るべきものであつた。而も傳來の基督教的信仰及び思想は最早總てのものを制禦するを得なかつた。そこで其の保持、擴張の爲めに努力する新教徒が現はれ、舊に宗教界のみならず一般に文化の上に多大の影響を及ぼした。特に科學の

進歩に關するメンヂカント教徒及び一般に教育についての共同生活同胞團體の功績は非常に大なるものであつた。次に是等の重要な社會的事項について更に一言しようと思ふ。

### 第二節 武士の理想と其の教育

#### 武士の理想

武士の全盛時代は十二三世紀頃であつた。其の理想は何ものをも恐れない勇敢な人格を養ひ神と君主と貴婦人との爲めに盡し之により自己の名譽を保持することと在つた。青年が始めて武士として承認される式場に於て宣誓する事項は如何なる場合にも落膽し挫折することなく眞實であり貧者を保護し福者をして之を壓迫せしめることなく弱を助け強者をして之を虐することなからしめ殊に鰥寡孤獨を保護し人を侮辱することなく敵でも憫を乞ふときは殺さず捕虜を優遇し悖徳の行はれる所に近寄らず婦人を尊重し君主に忠實に日々神事を怠ることなく力の及ぶ限り信仰を保護擴張し宗教的同胞を愛し之を援助すること等であつた。即ち武士の理想は特に武勇を重んずること、婦人を尊重すること、に於て宗教

#### 武士にまで の教育法

の理想と著しく異なつて居た而して此の理想上の差異は教育法の差異を伴つた。宗教的教育は七自由藝術を主なものとしたのに對して武士の修養は實地的技能を重んじた前者は知的成熟を期したけれども後者は美的表現を勉めた又前者は心的方面を偏重したけれども後者は身體上の鍛錬に重を置いた。而して武士として堪能なるべき實地的技能は乗馬、水泳射術、狩獵將棋、作詩の七種であつた。

武士の男兒は最初其の母及び侍女の手で養育せられ七歳になると家庭を離れ名ある武士の家又は大名の殿中に送られ扈從として其の男女主人に仕侍した當時の思想に於ては他人に仕へること、學ぶこと、が分つことの出来ないものと見られ而して仕へるには他人の家庭に入らねばならぬと見られたのである。即ち扈從として兒童は常に男主人の遊獵及び旅行に伴はれ又家に於て女主人の教訓の下に立つことによつて當時の武士間の作法、上流社會の禮儀、婦人に對する服從及び其の他武士の家庭又は殿中の要事について練習せしめられた。宗教的訓練も亦嚴格であつた沈黙、談話の時を誤まらず禮義を忘れず上者に對して謙讓を旨とし特に信實、温

和適度及び眞摯の態度により柄を曇りのない状態に保たねばならぬと云ふことは兒童の常に受けた教訓であつた。扈從は十四歳に達すると武士となる直接準備の時期に入るのであつて、以後從士と稱へられ、主に其の男主人に侍し、其の武器を整理し、愉快な遊獵の際にも又惡戰苦闘の際にも其の側に立ち武器を奉持したのである。斯くして二十一歳に達し彼等は莊嚴な儀式に於て武士の地位に進められた。此の式は戰爭の前又は大勝利の後又は平和の時に於ては大祭日に擧げられたが、此の式を受けようとする從士は其の前日沐浴して先づ白衣を着けて心情の潔白清淨なことを表示し、次に赤衣を着けて信仰の爲めには自己の血を注ぐことの希望を象徴し、更に又黒衣を纏ひ、常に死を忘れないと云ふことを表現したのである。式場に於て彼は先づ武士の務の實行について宣誓して後男主人の前に跪き主人から肩又は頭部に三撃を受けた。之は即ち彼を眞の武士として認めると云ふ印であつた。

扈從及び從士時期に於ける教育事項は武士の七技能であつた。殊に身體の練習に注意し、年齢の進むに従ひ次第に困難なものが課せられた。心的

武士の教育の内容

陶冶は作詩及び唱歌が主であつて、主人により又は大名の家を巡回し或る時の間滞在して教授する詩人及び音楽家によつて行はれた。其の他の學術的教育は行はれなかつた。従つて武士中に高等の教育の素養あるものは稀であつた。讀方、書方すらも少年は多く別に宗教學校に入つて學んだのである。武士間には其の練磨した力を消却せしめない爲め又武器使用の練習を繼續する爲め屢戰闘的遊戯が行はれた。此の遊戯は常に勇氣を要したのみならず、假にも驕傲、卑劣の舉動なく、高潔、友愛の情を示さねばならぬと云ふ規定に従つて行はれたから、武士をして其の身體上の技能と熟練とを試みる機會を得しめ同時に又精神上の修養をなさしめることに大に役立つたのである。

武士の女兒の教育は、其の心的方面に於ては男兒の教育に優つて居た。紡績、裁縫の業、初等の讀み書きの外、語學、舞踏、唱歌及び管絃樂は女子の修むべき大切な教科であつた。其の他遊戯及び作法上の練習も必要と見られた。而して是等の異なる教科については異なる家庭教師が聘せられた。武士の隆盛時代に於ける貴夫人は其の品性、行動及び見識に於て能く宮殿生

武士の女兒の教育

活の中心となり、之を高尙ならしめ、武士をして眞に歸服せしめるに足る力があつたと云はれて居る。

武士道の衰微

武士の地位は十四世紀に於て既に衰頹に傾いた、其の婦人崇拜、體育の偏重、有益な知的陶冶を忽にし、内部の修養よりも外部の修飾の重んじたことは不良の結果を生ずる原因となつた。そのみならず時勢の變遷と種々の新發明とは武士及び其の技能の價値を減少し、其の政治上の地位と經濟状態とを著しく退歩せしめた。墮落した武士は遂に相團結し、暴力を振ひ、奪掠を事とし、野卑な快樂に耽り、高尙な交際場であつた城内は野武士の住所と變り、荒寥を極めるに至つた。斯くして武士の世は次第に去り、之に代つて市民の地位は高まり、經濟上に於ても文化上に於ても次第に社會の大勢力となつた。

第三節 市民と都市學校

市民の地位の向上

十字軍の結果、交通が開け、商工業が發達し、市民の地位を高めたことは既に述べた。市民は一定の地に集合的生活をなすことに於て既に武士生活

と趣を異にして居た、又武士の理想的であり、僧侶の出世間的であつたのに對して市民は勞働作業を原則とし、利用厚生を其の生活上の主要動機とした。此の確實な基礎の上に發達した市民は、十四五世紀に至つては全歐洲に於て僧侶及び貴族と並んで社會の重要な階級と見做されるやうになり、議會には代議士を送り、又自治の權をも得たのである。此のことについてカール・シュミットは其の教育史に於て次のやうに云つて居る。

カール・シュミットの意見

市民の生活は勞働を原則とすることに由つて堅固な基礎の上に立ち、世界史上眞の生産的勞働が政治上及び社會上に自由を得、貴重すべき地位に立つ基を開いた。上古の邦國に於ては勞働は奴隸又は其の解放せられたもの又は外人の手に委せられ、勞働者は市民の眞の意義中には含まれなかつた。然るに都市生活に於ける勞働者は市行政に干與し、公共的業務に参加する權利を有し、市に於ける兵力の中心となり、其の地位に於て由緒ある武士と同様の價値を有した。種々の小市民的團體及び組合は此の自治的勢力の感に基いて成立せしめられ、自己の力及び悟性に信頼して自ら其の利益を保護しようとする努力が顯著となつた。科學

及び技術も亦此の自己内外の安全を確信する念に於て重大な發展の素因を得た。宗教、武士的精神及び上古から傳來した文化的要素は總て市民により練成せられた、科學の中心をなした大學の如きも、假令市民の直接作つたものでないにしても、其の勢力を市民から吸収したことも明かである。

都市生活の發達し、市民の地位の高まるに従ひ其の地位に應じた教育の場所の必要を感じるに至つたのは當然のことであつて、都市學校は斯くして設立せられたのである。然るに従來教育を自己の特權に屬するものと思惟して居た寺院は此の新らしい學校の設立を妨害し、又は少くともこれを其の支配の下に立たしめようとしたので、教育について所々に僧俗間に軋轢を見るやうになつた。都市學校は決して非宗教的精神の生産物ではなかつた、都市生活の發達に伴ひ急速に進歩した心的陶治上の必要が最早古い宗教的學校で十分に満たされないが爲め新たに設けられたものである。教科は讀方書方を主とし、ラテン語をも加へた其の組織、教授法及び訓練法は宗教學校と大差はなかつた。當時一般に書籍の乏しく高價であつ

都市學校

て、各生徒をして教科書を使用せしめることが困難であつたことは、誦讀に依ることを多からしめた。教師は先づ生徒に對し書中の文句を反復朗讀し、之を誦讀的に記憶せしめ又は筆記せしめ、後之を分解し説明したのである。訓練法は嚴格で體罰が履行はれた、唯祝祭日に於ては此の冷酷な學校生活が破られ、生徒は此の機會に僧俗の役員及び市民の補助を受けて演劇會を開き又種々の遊戯を行つた。其の生徒は初めは學校所在地の市民の子弟のみであつたけれども、後には遠い地方から入學するものが増加し、中には貧困で學校から給費を受けて居たものがあり、或は人の門戸に立ち歌ふことにより食物又は金錢を乞ふたものがあつた。當時學校生徒の優遇せられたことは屢誤用せられ、放蕩、怠惰な生徒を増加し、一般に校風を破壊した、學術修業の美名の下に無頼の徒が集合し、所々を横行して補助を強請し、良民を悩ましたと云はれて居る。

第四節 大學の設立

中古時代に創設せられ、高等學術の研究及び社會文化の指導の最も重要

大學の起原

な機關となつたものは大學である。大學は學者と科學の研究に熱心な青年との自由な會合に其の起原を有するものであつて、イタリア及びフランスには早くから斯くの如き會合があり、宗教上の抑制を受けず、王侯又は僧侶の力に依頼せず、純粹に科學の研究を目的として居た。例へばサレルノの醫學校、ボロニヤの法律學校、パリーの神學校の如きである。是等の學校は十二世紀又は十三世紀に於て數部を並置し大學として公認せられるに至つた。イギリスに於てはオクスフォードとケムブリッジとが夙に有名であつたが、其の大學として公認せられた年月は明かでない、多分前記の諸校よりも稍後であつたであらう。全歐洲に於て十三世紀中に設立せられた大學の數は十九を數へ、十四世紀には更に二十五校を増加した、而して其のアルプス山以南に立てられたものはボロニヤを模範とし、以北のものはパリーを模範としたのである。

大學は前に述べた通り、學者と學生との自由會合に始まり、獨立自治の研究團體であつたが、之が精神界の一大勢力として生活の諸方面に重大の關係を有するやうになるに従ひ、寺院帝王及び都市は之を其の勢力範圍内に

大學とローマ法王

入れようとして競争するに至つた。殊に寺院は其の偉大な勢力と豊富な財産とを利用して其の補助獎勵に力を用ひ、又種々の特權を付與したが爲め、十三世紀以後は法王の認可が大學設立の要件となり、特權は此の認可に附從して生ずるものと決定せられた、故に皇帝又は王侯の許可の下に立てられたものも更に法王の認可と之に伴ふ特權とを求めると云ふ有様であつた。

大學の特權

大學の特權の主なものはその教官が公役、税金、寄附金等を免除せられること、大學關係者の犯罪につき大學自身が之を裁判し得ること、學位を授けることであつた。學位を授與することは教員たることを免許する義であつて、以前には寺院が此の免許を與へ、従つて教授の方法と内容とを規定して居たが、此の權利が大學に移るやうになつた爲め、寺院の特權の一部は失はれたのである。

大學は多く神學部、法學部及び醫學部の綜合から成立つて居た、又其の豫備として自由藝術特に哲學を修めしめる一學部が置かれ、大學に入るものは總て先づ此の部を通過すべきことになつて居た。當時の大學に於ては

大學の組織及び教授法

未だ科學的研究を見ることは出来なかつた教授は多く唯從來の傳説を墨守するだけで、まだ自己の經驗上の事實を探究し、根本的研究に基いて獨創の意見を發表することがなかつた。故に教授の様式は初めは講演式のみが用ひられ、教科書中の文字、章句及び其の意義についての解釋に止まつたが、後に之と共に討論式即ち一の提議又は問題についての辯論及び解決が等しく重要な教式として用ひられた。此の討論的練習は屢詭辯的争論に流れたことがあつたけれども、知識の應用、鋭敏な觀察、論理的思考を發達せしめる上に有效であつたに相違ない。

大學は寺院と密接に關係するやうになつた爲め其の教官及び學生の生活上の規定は模範を僧徒生活の規定にとつた、即ち彼等は寄宿舎に於て共同生活をなし、教官は獨身たることを必要とした。學生の下宿の許されたのは十四世紀以後のことである。而も當時の大學生の思想は宗教的人生觀と一致しては居なかつた、僧徒生活の極端に禁慾的遁世的であるのに反し、極端な快樂主義に傾き、僧徒的謙讓に反して不屈傲慢の風を保持した。中には黨派を立て、争闘し、或は教官に反抗し、或は飲酒を事として學事を

顧みないものもあつた。中古の大學には斯やうな闇黒面があつたことは明かであるけれども、之によつて其の全價値を疑ふことは出来ぬ、斯かることとのあつたに拘はらず吾人は大學を中古時代に發現したもの、最良最美のものとするに躊躇しないのである。

### 第五節 スコラ哲學

スコラ哲學は基督教的信仰の爲めに利用せられた哲學であり、宗教上の獨斷説の科學的根據を作り、之を説明し之を系統的のものとしようとするものであつて、科學としての神學と認むべきものである。斯かる哲學の現はれるに至つたのは、現世と彼岸、神と自然界、心と身體との反對について最早無感覺に過ぎることが出来なく、又單なる獨斷的決定で安心することも出来なく、相反對するやうに見えるものを調停し、獨斷説の確實な理由を要求するに至つた人心の傾向を示し、以後益理を重んずるやうになることを豫告するものと見てよい。宗教と哲學的考察との結合は既に九世紀の頃に試みられたのであるが、スコラ哲學の眞の創唱者として知られて居るの



はカンタベリーの大僧正アンゼラム(1033—1109)である。而も彼は尙信仰を理に先立ち理に内容を供給するものとした。「我は知る爲めに先づ信する」と云つた彼の言は廣く知られて居る。即ち彼は信仰したこと以外のものを知の對象とすることを否定し信仰の内容を有しない知は錯誤を生ずるに過ぎないものとした。アンゼラム以後に於て、理と信仰との間に何等の衝突すべきものがないと云ふ確信は益有力となり、更に進んで信仰を理に依るものとし、人は其の理解しないものを信じてはならぬ、活潑な探究によつて人は始めて堅固な信仰に達すると云ふ考を生ずるやうになつた。

十三世紀の初めにアリストートルの書の知られるやうになつたことは、スコラ哲學の進歩の上に新時期を開いた。アリストートルの觀念と個々物體との關係についての思想及び心と身體とについての所説は基督教義に一致する所があつた。哲學者は熱心に新書を讀み其の所説を歓迎し、之を利用して更にスコラ哲學の基礎を固め、又其の教理を系統的に組織しようとした。アレキサンダー・ハイレ、ストーマス、アキイノ、ダンス、スコートスの如きは其の代表的のものである。斯くしてスコラ哲學は中古時代を通

スコラ哲學と  
アリスト  
トルの哲學

じ主として大學に於て確乎たる根據を有して居たのである。

### 第六節 新宗教團

新宗教團

都市學校及び大學の設立は自ら僧庵學校及び寺院學校の退歩の原因となつた。殊に大學は高等教育の場所として、又藝術部を並置することからして明かに宗教の學校と競争の地位に立ち而して一層能く時勢の必に應じた。従つて中古の後期の歴史に於ては最早有名な僧庵學校又は寺院學校を見ることが出来なかつた。ベネデクト教徒の全盛時代は既に経過し、再び之と同様の勢力と功績とを示す教徒を見ることが出来なかつた。然し之は科學及び文化が僧侶界を去つたことを示すものでない、ドミニクス僧徒及びフランシスクス僧徒の業績は當時最も注目すべきものであつた。彼等は科學の研究に努力し、大學に多くの有名な教官を供給し、都市に於て僧庵學校を開き、少年の入學を簡便にし、又教科書及び教授用書を編纂して教育の普及を圖つた。而も一般の教化を進めた點に於てはネーデルランドに於てゲール・グローテの組織した共同生活の同胞團體の功績の方

が一層大なるものであつた。

ゲール・グロ  
ローテと共同  
生活同胞團

ゲール・グロローテは一三四〇年デヴェンターに生れた。初め同地の學校で學び、稍長じてパリに送られ、神學、醫學及び特に寺院法を修め、十八歳で同大學の教官に擧げられた。初め彼は宗教に傾かず、寧ろ華美な生活を好んで居たが、後に大に感ずる所あり、現世に斷念し、三箇年間僧庵に潛み聖書を研究し、嚴格な禁慾的訓練の下に精神を修養して後、布教に従事した。然るに彼の嚴肅な警告と民衆に對する大なる感化とは他の僧徒の嫌疑と嫉妬とを惹起し、彼をして困難な地位に立たしめた爲め、彼は其の働を小範圍に制限することにし、郷里のデヴェンターに退いて少年の教育及び教授に力を用ふることにした。彼は先づ有望な少年を集め、共に善良な書物を讀み、又彼等をして有益な書を寫さしめた。而して彼等が成長後強い信仰心を有し、宗教上の修行に熱心であるのを見て、彼等を時々一家に會し、神事について談り且互に相戒めしめた。然るに彼等は遂に單に時々會合で満足しないで、共同生活を希望するに至つたので、一三八四年フロンテウスラデグキンスゾーンと云ふ人がグロローテの同意を得て始めて共同生活同胞團

共同生活同胞  
團の功績

を組織することになつた。グロローテは其の事業の效果を見ることなく同年死亡したが、同團體は次第に發展し、其の家屋はネーデルランドのみならずドイツの北及び北西地方に於て續々設立せられ、女子も之に倣つて女子共同生活同胞團を組織するに至つた。此の團體は基督教精神の實現を目的とし、團員は先づ自ら此の目的に従ひ、嚴格な道德的宗敎的生活をなし、又作業に従事した。其の作業の種類には手技、造園、耕耘、漁獵、書物を寫すこと等があり、之により同團の維持費及び事業費が得られたのである。殊に書を寫すことは同團の最も好んでなした所で、之により同團は高尚な學術界並に一般民衆の教化の上に少からの利益を與へた。女子團の方は主として手技、裁縫、紡績、編物に従事し、之を市民の子女に教へ、又看護の業に従つた。此の團體は外方に向つて基督教の精神を擴張することにも努力した。即ち或は布教者として、或は精神の慰撫者として、或は一般人民の教育者及び教師として、又特に少年の指導者及び貧兒の養育者として同團體は比類なき働をなした。而して同團體の性質上から見ても、其の教育及び教授の中心が宗教に在つたのは自然である。其の教授法は一般に中古時代の方法を

脱しなかつた、且教科も初めは讀方書方及びラテン語に限られたけれども、教授者の誠實であり熱心であつたことは一種の手練を生せしめ、生徒をして知識の必要を覺り、科學的精神を有するに至らしめ、獨立的心的作業についての好愛の情と快情とを發せしめたのである。同團體は實に人文主義が近世の初期に於て有力に發芽し得る土地を準備した、殊にドイツに於て上古の學術の復興し進歩したのは同團體が其の素地を作つたのである。

#### 第四章 ユデヤ人及びアラビヤ人の教育

上古のユデヤ人

歐洲の中古時代の教育を論ずるに當つて吾人はユデヤ人及びアラビヤ人の功績を看過することは出來ぬ。ユデヤ人は既に早く一神教を奉じ、自己を神の特別の庇護の下に在る人民とし、従つて其の子女をも神國の成員と見、其の教育に注意した。且父母の生活が其の子に連續すると云ふ彼等の信念も教育上に良好な影響を及ぼした。男兒は家庭に於て嚴格な宗教的訓練の下に立ち、父より聖書講讀の指導を受け、女兒は紡績、染色、割烹等將來の家婦に必要な諸事について練習せしめられた。又宗教的陶冶を行ふ

學校及び其の他専門の學校も夙に存在した。斯くしてユデヤ人は上古に於て早く世界史上に地位を有するやうになつたけれども、其の盛大の時期は永續せず、紀元後七〇年ローマ人がゼルサレムを破壊するに至つて其の政治的勢力は全く消滅し、國民は諸國に散じ、最早祖國を有しないやうになつた。然し彼等の宗教上の堅い信念と祖先の法律を尊重する強い精神及び之に従ひ之を維持しようとする熱心とは依然繼續した。同人種をして他に同化せしめないで今日に至るまで世界の一勢力とならしめたのは此の精神に由るのである。彼等は早くから此の精神の保持について大に注意し、其の手段として學校を設立し、法律の知識の保存及び擴張に力を用ひた。例へばパレスチナとバビロニヤとに於ては高等の學校があり、ラツピの養成に力めた、其の他多くの初等の學校に於ても法律の知識が授けられた。又法律の口頭的説明を記録して保存する必要がある爲め、タルムトドと云ふ書が編纂せられた、之はユデヤ人が其の全生活に關し又科學、教育等に關して依るべき寶典である。

ユデヤ人と回イ教

回々教の擴張及び其の勢力の下に發生した精神界の發揚はユデヤ人の

心的發展上に新時期を開いた。同教がアフリカを經過して歐洲に入るに從ひユデヤ人の心的生活の重點も漸次其の方向に進み、十世紀に於てはスペインに其の根據地を有するに至つた。殊に當時アラビヤの文學、科學及び技術の中心であつたコルドバはユデヤ人の心的生活の中心となり、彼等は此處に哲學を始め種々の學術を修めた。斯くして大に進歩したユデヤ人は歐洲の基督教國民のまだ開化に進まない時に當つてギリシヤ及びアラビヤの哲學書を翻譯し、哲學及び其の他の科學の教師として歐洲文化の發達に裨益する所が多かつた。

アラビヤ人はマホメット紀元後五七一年—六三二年により世界史及び教育史の上に現はれた。彼以前のアラビヤ文化の狀況は知られて居ない。畢竟無知未開の時期であつたに相違ない。マホメットがアラビヤ人に信せしめた所は甚だ簡單であつた、即ち「アラー以外には何等の神なく、而してマホメットは其の代表者である」と云ふことであつた。彼は此の信仰をあらゆる方便で普及することを勧め、此の目的の爲め己むを得なければ劍を用ひることを信者としての神聖な務となさしめ、信仰の爲めに戦ふものは

マホメットと  
アラビヤ人

彼岸に於て快樂を享受し得るけれども、然らざるものは未來に於て恐るべき苛責を受けねばならぬことの信念を廣く植ゑつけた。元來慥悍な人民として知られたアラビヤ人は斯やうな信念を得てから益其の力を強大にし、教旨に從つて舊國シアジャ、アフリカ、ヨーロッパの三大陸に跨り廣大な土地を領有するに至つた。

マホメットは常にアラビヤ人の政治的宗教的勢力を強めただけでなく、又其の科學的生活の基礎を置いた、即ちコーランは科學的教養及び規則立つた教授の必要を感せしめた源であつたのである。之はマホメットが完結した一部の書として著したものでない、種々の機會に於て彼の説いた教訓の筆記せられたもの及び口碑に傳はるもの、蒐集編纂せられたものである。而してそれには宗教に關するものもあれば一般生活上の規定に關するものもある、此の書の註釋研究は自ら神學及び法律の學を生せしめた、又其の文字、文章の解釋は言語學及び特に文法を發達せしめた。

七五〇年頃に於てアラビヤ人は外部からも亦有益な刺激を受けた。即ちギリシヤの藥學、數學、天文、自然科學及び哲學の書類が其の頃から漸次ア

コーランと  
アラビヤ文化

アラビヤ人と  
ギリシヤ文化

ラビヤ語に翻譯せられ、アラビヤ人間に於ける科學的研究の新生面を開いた。従つて歐洲に於て學事のまだ尙不振であつた頃バグダット、バストラ、クローア等の諸市は學術の盛大を競つて居た。而も十世紀に至り此の哲學的科學的傾向は、東方に於ては嚴格な宗教的傾向と相容れないやうになり、熱狂的宗教信者により壓迫せられ、遂に當時既に東方と分離し獨立して居た所の西部アフリカ及びスペインに轉移するに至つた。特にスペインに於てはコルドバを中心として學術の研究應用が廣く行はれ、圖書館は所々に設立せられ、高等の學校及び寺院に結合した兒童教養所も開かれた。斯くしてアラビヤ人は歐洲人が世界を平面と信じて居た頃既に地球儀を使用して教授し、天文臺を建設し、數學、醫學、藥學、生理、物理について新研究を行ひ、其の他商業、地理、技藝に於ても著しい進歩を示し、米、棉花、砂糖、絹の製法使用を知り、羅針盤、火藥、銃砲をも歐洲人に先立つて知つて居た。

アラビヤ文化がユデヤ人によつて歐洲に紹介せられたことは既に述べた。歐洲人はアラビヤ人を通じてギリシャの科學特にアリストートルの哲學を再び知るやうになつたのである。而して十三世紀に至つて褊狹な宗

アラビヤ文化  
と歐洲文化

教上の嚴格主義がスペインをも風靡した結果、アリストートルの哲學は其の繁榮を極めた土地を退去し、ユデヤ人間に又歐洲の基督教大學に於て新郷里を發見するやうになつた。

## 第三編 近世の教育

## 第一章 文藝復興と人文主義

## 第一節 總論

文藝復興の意義

(一) 文藝復興の意義 上古の學術は中古に傳はり寺院に用ひられ學校に於て學ばれたので決して中絶したことはない故に近世の初期に於ける文藝復興は中絶して居た個々の學術文藝の再び盛んになつたと云ふ意味のものではない寧ろ古代文化の精神の復興であつた。人々は最早出世間的人生觀に満足し得ないやうになり、上古の基督教以前の精神に於て貴重すべきものがあることを覺り、上古の文藝を、宗教の爲めに利用せられた形に於てとなく、其の純粹な源に於て味ふことにより此の精神に觸れようとするに至つたのである。此のことはパウルゼン教授により次のやうに説かれて居る。

パウルゼン教授の意見

十五世紀は大なる進歩の時期であつた國民的交通の發達は都市生活

自己意識の昂進

の急速な進歩を伴ひ、新富源の發見及び文明の總ての物質的財産の著しい増加は、人々の必要を精美にし、教化的活動を高め、東方諸國との交通、新世界の發見により擴張せられた觀界は、思想の變化を速かならしめた。又心的生活に與らうとする社會一般の人民の要求が益高まつたから、教化の材料を供給して之を満足せしめる必要を生じ、印刷事業を促進した。而して此の時期に於ける自己意識の昂進は實に能く斯かる活動の増進に相應して居たのである。十五世紀の終の人は、中古の初期の人のやうに大なる過去の末世に在つて僅に大聖大賢の世の殘留を支持して居るやうには感じなかつた、却つて自己を新時期の作者とした。王侯、武士、市民、農夫は總て一樣に此の強大な潮流に動かされ、勢力を欲する意志は一般に發動し、下層社會に於ては自由を欲する意志となり、上流社會に於ては支配力の欲望となつて現はれた。基督教の道德たる謙遜、退隱、從順、歸依の如きは新時期の人に對し其の光彩を失ひ、價值を滅却した。自己の好む所に於て妨害せられることなく、自由に思考し、自尊心に富み、服従を拒絶し、大膽勇猛に自己勢力の増大を圖るものが新時期に於ける最も進

理想の變化と  
新教育の要求

歩した人の見た理想的人物であつた。

斯かる理想が人の心情を動かした結果として激しい争闘の時が來た。此の世に於ける富と支配力とに就いての争は王侯と人民との間に起り、又人民間に於ても多數公衆の自由を望む行動と上流社會の權威を希望する傾向との衝突があり、激烈な軋轢を生じた。十六世紀の歴史は實に斯かる争闘から成立つて居ると見てよい。農民は地主に反對し、武士は王侯に抗し、王侯は皇帝に反し、俗人は僧侶に對し、僧侶は寺院の制度に對して争つた。而して其の結果は遂に自由の勝利となり、皇帝は其の領土の支配權を失ひ、法王の勢力範圍は其の半に縮少せられた。斯かる時勢の變遷は當然聖書を最早生活の目的及び條件を指示するに足りないものと思はしめた。能く忍耐し忠實に仕へ、下位に甘んじ、自己を小とし、現世界と其の快樂とを輕視し、天國を目的とする如きことは人心の到底一致し得ない所となつた。人は寧ろ上古のギリシヤ及びローマの哲學者、辯論家、歴史家及び詩人の貴重したるものに向ひ之を歡迎した。自己を大なりとする自尊心、自由の爲めに争はうとする市民的剛愎心、抵抗を屈服せ

人文主義の性質

しめようとする支配力、事物の真相を明かにしようとする思考力、知能を啓發しようとする教育、總てのものを利用し得る自由な生活、是等のものは眞に人たるものに適し、人類的生活の内容たるべきものであるとせられた。斯やうに現世と其の財産とに向ふことに於て新時期は基督教の出世間的思想に反し、却つて上古の思想に於て一致點を發見したのである。

(二) 人文主義の性質

文藝復興は人文主義の運動を以て始まつた。此の運動はイタリアから發し古代の教化及び理想を獲得しようとするものであつた。然るに中古の心的生活も上古と連關し之に依つて居たことは既に述べた所であつて、スコラ哲學はアリストートルに依り、教授は自由藝術を材料とし古學者の書を用ひ、ラテン語は高等の學校の用語であり高等教化の基礎であつた。人文主義は唯其の考察の方法を一新し、觀界を改造し、中古時代の看過した方面から上古に接近しようとしただけである。即ち人文主義は上古の著述特に其の詩歌、演説及び歴史に關するものに於て高尚優美な形に於て發見する人道を發見し、之を考察し模倣することを現代

人文主義とラ  
テン文化

の務とし、上古の書は古學者の活潑な言語を反響し、現代の同感者に前代の精神と理想的に交際することを可能ならしめると考へたのである。

人文主義は一般に上古を貴重したけれども、其の教化の方針はローマ思想に従ひ、其の材料も亦ローマ文化から採つた。即ち音楽及び體操を基礎とし、數學的科學を用ひ、又哲學を最高教科とするギリシャ思想を用ひないで、言語的技能を總ての教化の基礎とするローマ思想に従ひ、且これを極端に進めた。ラテン文學を學び、自らラテン語で流暢に談り、優美に文を綴り得ることは人文主義の最も貴重した所であつて、ラテン化的傾向は同主義の著しい性質である。斯くの如く精巧優美な言語についての趣味を養ひ之によつて精神を高尙にしようとするのは固より至當の考であるけれども、人文派は形を重んずることに偏し、實を輕んじ、古人の書を學ぶに當つても其の内容よりも寧ろ言語の用法に注意し、發表の美を主とし、論理に留意せず、或は空想に流れ、或は故意の虚偽に陥つた。此のことに關してもパウゼン教授の言は大に参考となると思ふ、次に其の要點を擧げて置く。

國民生活の大變動は美的思想の變化によつて示されるのが常である。

パウゼン教  
授の意見

自己感情の昂  
進と様式偏重

近世の初めの大變動も美術及び文學上の動搖に由つて表示された。ルネッサンス型式はゴシック式を排し、人文的詩歌はスコラ哲學に代つた。而して新文學の特質として見るべきものは主として其の自己表明の傾向である。昂進した自己感情は人をして自己について論述するに至らしめ、自己の經驗及び感情の發表が十分他人の注意を惹く價値があると思はしめた。形及び様式が從來嘗て有したことのない程に重要視せられたことも之に關係する。若し人が自己について考へることなく、一心を事物に傾けるときは其の事物の何たるかを明かにするに急であつて、論述の方法の如何を考慮する暇はないであらう。之に反して自己を表現しようとするものは形式を重んじ、悟性よりも想像の上に影響を及ぼさうとし、事物の知識について承認されるよりも自己一身の賞讃を得る方に重を置くのである。中古の文學は様式について全く無頓着であつて、唯論理の正確なることに意を用ひたが、新文學は之と正反對に獨り様式を貴び、内容及び論理に留意しなかつた。事物はそれ自身では價値がない、唯恰も美麗な衣服を示す爲め之を支持する衣桁の如きものとし



虚偽的傾向

てのみ價值あるものとせられた。  
 新文學の次の特質は國民的及び民衆的たることを拒避することである。是も亦自己感情の昂進と關係する新文學者は自己を群衆と區別し一般の形式及び思想を超絶した高尚な地位に立つものとした。其の結果は異なる文化世界の思想及び其の發表法を習得し之により自己の周圍を假裝せしめようとする傾向となつた。即ち自己を古代の辯論家、哲學者、又は詩人と見、現代の官名稱號等を古代の之に相當するものに變更し、現社會を恰も假裝會場の如きものにしようとした。然るに其の空想が屢事實と反することを見出すときは誇張した言文により事實を晦まし、極端に稱譽又は誹謗し往々虚偽に陥つた。即ち虚偽的傾向のあつたことも亦新文學の特質であつて之は世界を戯曲視した自然の結果であるのみならず、事實を巧に曲げ又は隱蔽することを一の伎倆と認めたことにも由るのである。

諧謔の缺乏

之と連關して愉快な諧謔の缺乏も亦新文學の一特徴であつた。其の言論は諷刺、罵倒に長じ常に痛切であつて少しも假借する所がなかつた。

人文主義の反  
 敬権的傾向

而して是も亦民衆と伍し多數のものと樂を共にすることを嫌ひ、一世に超越し、輕侮的眼光を以て群衆を視下したこと、關係する事柄である。人文主義が實を輕んじて形に偏し遂に文法に拘泥し、上古の單なる模倣を貴重するに至つたことは、學術研究の精神に反し科學の進歩を沮害したと云はねばならぬ。而も自己感情の昂進して權威に反抗し獨立自由の言行を希望したことは後の自由な科學的研究に何等の効果がなかつたとは云はれない。此のことについても吾人はパウルゼン教授の説を参考として擧げて置く。

パウルゼン教  
 授の意見

人文主義は或る意味に於ては明かに哲學及び科學と衝突すべき性質のものである。同主義は傳來の大學の哲學及び一般に當時の科學を輕視し且嫌忌した。論理、物理、形而上學、倫理の如きアリストートルの書により講演せられ説明せられたものを無意味のものとし、野鄙な論述とし、法學及び神學をも殆ど同様のものとし、是等の學を究めるものに詭辯論者の名を附した、而も實際に於ては人文學派の方が却つて一層多く古代の詭辯論者に近かつたのである。且科學的思考は事物に向ひ概念によつ

て思想を統合する方に向ふものであるが、人文學派は概念に對して深い嫌忌の情を有し、自己を事物に従はしめて注意を對象に集中する如きことを拒絶し、却つて自己表明の爲めに事物を利用した。人文主義は即ち哲學的科學的傾向に反して文學的美的傾向を有するものである。然しながら他方から見ると、文藝復興の時期を事物の認知について何等の興味を有せず又努力もしなかつた時と解することは出來ぬ、科學的生活の復現は却つて此の時に始まり、近世の科學的發展は其の本を此の時期に有すると云ふことが出来る。言語的歴史的研究が人文學派により直接に進められたことは見易い所であるが、哲學の上に同派の及ぼした影響も亦決して不良のものでなかつた。人文派が權威の束縛を脱し、アリストートルの教權を破棄したことは哲學の上に及ぼされた神學の勢力を除去することになつたのである。詩的傾向を有する所の自然的汎神主義は文藝復興時代の哲學であつて、其の思想は寧ろプラトローの思辨に近かつた。斯くしてプラトロー哲學の復現を來たし、同時に實在の獨立的考察についての近世的精神を發生した。當時僞天文學、僞化學、魔法、妖術の

流行を見たのは畢竟人々がまだ聞知しない新奇なものを求めようとする勇氣を生じた徴候であると云つてよい、而して人文派中の最も學識ある者でも斯かる現象に反對しなかつた、却つて運命についての信念を破壊することにより妄想を高めた。而も妄想の實現を勉めるのは哲學的研究の始まりであり、物についての傳説から物其のものに向ふことを示すものである。此のことに於て吾人は人文主義の科學上の功績を認める、其の他同主義は上古の科學的攻究の結果を其の本原に於て知り中古の傳説を脱離したことによつても新科學的精神の發現に資する所があつたのである。

## 第二節 歐洲諸國に於ける人文主義

(一) イタリーに於ける人文主義 文藝復興はイタリーに始まつた、同國に於ては經濟的發展が比較的早く生じ、近世的大都會が世界商業の媒介者として現はれ、近世の精神は始めて自己意識にまで高まつた。且同國に於ては上古ローマの遺跡が多く、其の國民をして自己がローマ人の後裔であ

人文主義の根  
源地としての  
イタリー

ることを容易く想起せしめ、古ローマの遺風を顯彰し、其の教化の方針を回復し、未開種族の侵入によつて生ぜしめられた野鄙の風を掃蕩し、轉訛せしめられた言語を復舊することを自己の務と感ずるやうにならしめた。斯くて主權者、貴族、學會、都市は協力して文化の復興に力を用ひた。即ちサンスピリトの學會の如きは此のことに大に努力し、フロレンツのメヂチ家も多くの學者を招集し、圖書館を開き、古書類を諸地方から購入し、復寫、印刷、比較、校正、註解を行はしめた。ロレンゾ・ド・メヂチによつて設立せられたプラトール流のアカデミーは科學の研究を目的とした所の自由な學會の模範となり、優秀な人才を網羅して居たことに於て十五世紀末に於て他に類のないものであつた。個人として新文化の先驅をなした人としてはダンテ (Dante 1265—1321)、ボッカチオ (Boccaccio 1313—1375)、ペトラルカ (Petrarcha 1304—1374) の如きが其の主なるものである。殊にペトラルカは上古の世界の發見者と稱へられ、人文學者の模範として知られて居る。又教育家中に人文主義に従ひ實際教育に従事し、又意見を發表した人もあるが、之は次節に於て述べることとする。

ドイツの人文主義

要するに十五世紀はイタリヤ文化の盛大を極めた時であつて、ギリシヤ語及びラテン語を進める爲め諸方に講座が設けられ、新文化を傳へる者は良好の地位を得た。從來諸邦に於て書類の取扱には僧侶が用ひられたが、今は人文派が之に代るやうになり、遂には外交、戰爭、政治、交際、信仰、學術の諸範圍に於ける事項は總て同派の管掌する所となつた。

(二) **ネーデルランド及びドイツに於ける人文主義** イタリヤに於ける文藝的大運動は十五世紀に於けるイタリヤ、ドイツ兩國の親密な關係からして自らアルプス山以北に及ぶことゝなつた。然し其の盛大となつたのは十五世紀の末であつた、其の中頃までの學校にはスコラ哲學が尙勢力を有し、中古の學者は争ふことの出来ない教權として貴ばれた、然るにイタリヤとの交通が次第に頻繁になり、青年の同國に學ぶものが次第に増加し、イタリヤ留學は高等教育上の缺くべからざる條件となつた爲め、自然に新文化が傳へられ、ドイツ大學に於ても上古の詩歌及び雄辯術についての講座が設けられ、之を益重要視する傾を生じ、遂に人文主義をして、此處に其の根據を作り、スコラ哲學及び神學を驅逐するに至らしめた。殊にシユレツトス

タットに於ける人文學校は新文化の重要な一中心地となり知名の士を出した。

ネーデルラントに於けるデズエンターの共同生活同胞團の教育上の功績は既に述べたが新文學の發達普及も此の團體の力に依ることが多い。元來同團員は深い宗教心を有し、嚴格な禁慾的生活をなし、道義心の厚いこととに於て、全くイタリーに於ける人文派の放縱な非宗教的傾向に反對であつたけれども、スコラ哲學を排斥し、ギリシヤ及びローマの大人物に對して深い尊信の情を示し、其の文藝を貴重した點に於ては之と一致した。要するに同團は單に消極的に隱遁生活をすることに止まらないで積極的に近世的精神の進化に與らうとしたのであつて、團員中から多くの知名の人文學者を出だした。

(三) フランスに於ける人文主義 フランスは中古時代に於て既に文化的發展をなした、武士の制は此處に其の發達の基を開き、大學は此處に早く近世の形をとり他國に模範を示し、スコラ哲學に最も有名な教授所を供給し、世人をしてイタリーが法王の位置であり、ドイツが皇帝の御座所であるな

デズエンターに於ける宗教團と新文學

フランスと新文學

らば、フランスは學術の講座を有すると云はしめたのである。而して斯やうに一方に於て既に著しく進歩した人民が容易に新らしい且多少反對する潮流に動かされなかつたことは見易い所である。十六世紀の初め人文主義が諸國に於て重要な地位を占めるやうになつた頃でも、パリ大學は尚スコラ哲學の根據地であり、轉訛したラテン語を用ひて満足し、神學者は言語教授の改良を信仰心に有害なものとした。然しながら精神力の優秀であり、活動の力尙旺盛な國民が永く時勢の大變化に、無感覺であることは不可能であつた。且フランスは古ローマと密接の關係があり、道路、橋梁、水道、都市等のローマ人の手に成つたものが少くなく、上古ローマの盛大を偲ばしめる材料が多かつた。故に人文主義は同國に於ても徐々に而も確實な歩調で進み、遂には同國文化に大なる影響を及ぼすことになつた。グキルマン教授は之について次のやうに云つて居る。

佛國の言語及び藝術上に及んだ上古の影響は徐々であつたけれども、他國に於けるよりも一層確實であつた。佛文學は文藝復興の生産物であつて、フランス人特有の論理的及び美辭的筆法は人文學の影響に歸す

ウキルマン教授の意見  
フランス人の特質と人文學

べきものである。尤も新精神の眞の效果は上流社會を中心とした小範圍に止まつたけれども、一般に國民を高尙優美に傾かしめた大勢力は畢竟これから發したのである。同國民の高い嗜好、其の快活な生活法及び其の移動し易い精神は文藝復興によつて少くとも育成せられたに相違ない。フランス人特有の性質と見るべき強い名譽心の如きは上古に倣つて盛に使用せられた教育法例へば賞與、名譽點、競争等に因ることが少くないであらう。

新時代發現の最初の徴候は國王及び諸地方の貴族の熱心な上古書籍の蒐集であつた。既に十四世紀に於て國王シャルル五世は之が爲めに大金を支出した。之と同時に古書翻譯の業も大に進み、ギリシャ書類のラテン語に譯せられたものが少くなかつた。又人文學者として新氣運の催進に與かつたものも少くなかつたが、其の最も名高いのはギョーム・ビユーデ(Guillaume Budé 1467—1540)、ペトルス・ラムス(Petrus Ramus 1515—1572)である。ビユーデは古文學の研究が決して基督教に危険でないことを説き、當時有名な神學的學校であつたソルボン及びナヴァラに對してラテン語及びギリヤ語を

も採用すべきことを勸告した。一五三〇年言語學習の場所としてコルレージュ・ド・フランスの設立せられたのは彼の力に依ることが大い。同所は國王の直轄に屬し他よりの壓迫を受けることがなかつたから、後には學術の自由研究の場所となり、フランスに於ける學術の進歩に貢獻することが甚だ多かつた。ラムスも亦當時に於て既に進歩した考を有し、古語と共に國語を貴重し、スコラ哲學を排斥し、自然研究の必要を唱へ、理性により事理を闡明することの必要を説いた。一五五一年彼はコルレージュ・ド・フランスに招聘せられ、雄辯術と哲學とを擔任し、非常に歓迎せられたが、反對者の壓迫の爲め一時ドイツに遁れ、一五七一年歸國し、其の翌年サン・バルテレミーの虐殺の際殺害せられた。

(四)イギリスに於ける人文主義 イギリスに於ても人文學がイタリーに於て著しく發達した頃、國民は尙中古思想に執着し、スコラ哲學に忠實に止まつた。同國民の保守的性質は輕々しく新奇に傾くことなく、容易に他を模倣しなかつたのである。然るに十五世紀に於てイギリスとイタリーとの間に活潑な交通が開け、英國の貴族富豪で學に志す者は古書をイタリー

から購入し、又其の子弟をイタリアの高等の學校に送ることが多くなり、人文學にまでの傾向は漸次其の勢力を増加した。従つて又優美な文學の爲めに多くの學校が設立せられるやうになつた。一四九七年ドイツの有名な人文學者エラスムスはイタリアに遊學の途中イギリスに立寄り、同國に於ける美文學の嗜好がフランスに優ることを發見し、一時はイタリア行を斷念して此處に留まらうとしたと云はれて居る。人文的理想は遂に英國の精神界を支配し其の高等の學校に於て他國のそれに於けるよりも永く其の勢力を保持したのである。此のことについてもウキルマン教授の言を參考として擧げて置く。

英國人は或る點に於ては上古の人に近い、同國には眞の且活潑な辯論術の本となる公共的政治的生活があり、政治的才能の保持者であるやうに教育せられる階級がある。此の階級の子弟の教育は、上古の自由公民の教育と同様に一定の職業の準備でなく、一般に能力を練磨し、人格を養ひ、精神の武器であると同時に運轉車である言語を使用する能力を發達せしめようとするのである。故に上古ローマに於けると同じく陶冶の

ウキルマン教授の意見  
イギリス人の特質と人文學

材料は言語及び辯論術を主とし、而も之により深い學術的研究を行はしめ、高い美的技能又は鑑賞力を修養せしめるのでなく、一般に精神を練り自覺力を進めようとするのである。従つてイギリス人は公共的品性陶冶の要素として人文主義を採つた、而して此の品性は支配者たる階級に屬するものとせられたから、人文主義は畢竟ゼントルマンの陶冶に缺くべからざるものとなつた。此の點に於て英國は他の國よりも上古の本質に一層近いと云つて差支ない。斯くして英國では人文學は國家的財産と見られ、ラテン學校はゼントルメン、議會議員、政治家の發生地として一般の尊敬を受けるやうになつた。故に最初文藝復興に對して甚だ冷淡な態度を取つた英國は最も忠實に人文的學校を保有するに至つた、今日でも同國には三百年來の遺風を守つて居るラテン學校がある。

### 第三節 人文主義の教育者

人文主義が次第に勢力を増進するやうになるに従ひ、教育界に於ても同主義論者の意見が重をなし、又教育家で同主義に依つて實際教育に従事し

人文主義の教育者

且教育上の意見を發表したものが少なくない。イタリアに於ける人文派の教育家としてはヰキットリノ・ダ・フェルトル (Vittorino da Feltre 1378—1446) ヲト  
 ロ・パウロ・ヰエルゲリオ (Petro Paulo Vergerio 1349—1428) マフュース・ヰエギウス  
 (Maphus Vegius 1407—1458) の三人が特に有名である。

ヰキットリノは初めヰエネチヤ及びバドバに於て教職に従事し、一四二四年マントバのゴンザガに招かれ其の二子の教育に盡し、且彼の爲めに設けられた一學校を經營することゝなつた。後彼は其の學校に於て生徒と共に生活し、自由な人は自由に即ち強迫的方法に依らないで教育せられることを要する、精神は誘起すべきもので決して壓伏すべきものでない、と云ふプラトノの原則に従ひ教育に従ひ、特に德育に重を置いた。教授は言語科を中心としギリシヤ語ラテン語の談話、演説を練習し、古代の文學者及び辯論家の書を読むことを主とし、次に數學によつて悟性を練らしめ、更に進んで哲學を修めしめた。又體育をも貴重し、上古ギリシヤの思想に従ひ心身の調和的發育を必要とし、心的諸能力間にも偏重なからしめるやうに意を用ひた。

ヰキットリノ・ダ・フェルトル

ヰエルゲリオ

ヰエルゲリオはバドバの高等學校に於て論理學の教授として有名であつた、又教育論者として有益な意見を發表して居る。彼は特に討論を精神的争闘として貴重し、討論により人は其の知る所を意識し、學んだ所を記憶に於て整頓し、且適當な言語で總括することが出來るとし、又一時に多くの知識を注入することを警め、一事を能く學習して後に他に移らしめることを勸告した。

ヰエギウス

ヰエギウスは法王の保護の下にあつた人文派の一人であつた。其の教育に關する書は人の初生期から教育の終期に至るまでの教育を論じ、永い且鋭敏な觀察の結果を包含し、巧にクインチリヤヌス及びブルタルコスの説を參酌したものである。即ち彼は妊娠中の母の攝生及び精神上の良好な態度を必要とし、兒童が五歳に達してから始めて仕事を課し、善良な實例模範を與へることにより之を指導し、個性に應じた方法を用ひ、七歳から知的陶冶を始め、最初から良教師を選ぶことを要する。學習者は其の學んだことを文學上の練習によつて實地の働に變せしめねばならぬ。自ら發見し、自己の思想を正しく且明瞭に發表することに於て學習の價値が認められ

る」と論じ詩人及び著述家の書について最も優美な點を誦誦し之を模倣し之を利用することを必要とし、實際を模倣して實地練習をなさしめることを學問獎勵上最も有效であるとした。

デヴェンター派に於ても教育上の意見を有する人文學者が少くなかつた、次に其の一代表者と認むべきルドルフ・アグリコラ (Rudolf Agricola 1481-1535) について一言して置く。

アグリコラ

アグリコラはパフロに生れ、リヨン大學に於て古文學を修め、後パリ及びフエルララに移つて修學し、古文學について深い知識を得、上古文學がドイツに入る道を開通することに與つて力があつた。其の他彼は哲學についても造詣深く、又音樂を了解することも精密であり、晩年に及んでヘブライ語及び聖書の攻究にも力を用ひた。彼は一定の土地に留まつて永く一學校の爲めに力を盡すことなく、所々に轉住した而も到る所能く其の教理と模範とによつて衆人を獎勵し奮起せしめた、特にハイデルベルヒ大學をして古學研究の重要な場所とならしめたのは彼の力に依るのである。彼の教育に關する意見は彼が其の知人に送つて學を勧めた書簡に於て最

アグリコラの  
教育意見

もよく見ることが出来る、其の要點は左の如くである。

科學の學習については、第一如何なる事柄を選択し、第二如何にして之に上達すべきかを究めねばならぬ。修むべき事柄は天性に由つて決定すべきものであるが、總ての事を正當に考察し且之を善く演述するには哲學を學ばねばならぬ。哲學には道德哲學と自然哲學とがある、道德哲學を修めて聖書にまで進み、之によつて吾人の生活を神聖ならしめねばならぬ。自然界の研究は陶冶の手段として價值がある、地理、植物、動物、醫學、建築、圖畫の如きは學習の價値がある。而して道德を學ぶにも自然科學を修めるにもギリシヤ及びローマの書に依るのがよい、之は内容を學ぶと同時に言語の善い使用を練習することが出来るからである。一般に學習上の成功は三條件に依頼する、第一は正しい知覺、第二は知覺したことを堅く記憶に保持すること、第三は自ら何事かを作り出す力を得ることである。即ち學ぶ事柄を全體として又個々の點に於て精密に了解し、全注意を之に向けることにより其の記憶を確實にし且常に其の知識を使用し之により更に深い研究に進むことを要する。



ウキンフエリ  
ンゲ

シユレットスタット學校出身者として教育界に名のあるのはヤコブ・ウキンフエリ(Jakob Wimpheling 1450—1528)である。彼はハイデルベルヒ大學の教授及び總長として高等教育に従事し、又多くの書に於て一般に教育及び教授に關する意見を發表して居る。然し彼は尙中古時代の思想を全然脱離しなかつたので純然たる人文主義教育家の代表者と見ることは出来ぬ。純粹にドイツに於ける人文的教化の最初の大なる代表者と見るべき人はデシデリウス・エラスムス(Desiderius Erasmus 1467—1536)である。

エラスムス

エラスムスはロッテルダムに生れ、幼少の時デヴエンターに行き人文學者について學び、後僧庵に入つて勉學したが、僧徒及び僧庵の状態について慊たらず、一四九一年以來全く僧庵生活から離れ、以後佛、英、獨の諸國に於て私教師として又著述に従事して大に文學界の爲めに盡した。彼はギリシヤ語の新約全書をラテン語に翻譯し、又寺院の腐敗、僧侶の無知不徳を諷刺し痛撃することによつて宗教界にも盡す所があつた。然し彼は純粹の學者として唯文筆の上に於てのみ争ひ、且眞に宗教界の改良を欲したよりも寧ろスコラ哲學を斥け人文學を盛んにすることを目的として居た。故に

彼はルーテルが實地に寺院に反抗する態度を示し改革の運動を始めたのを見て、自己の言論が意外の結果を生じたのに驚き、以後法王及び寺院に對する言論を慎み改革家と同類と見られないやうに努めた。斯やうに宗教界に於ける彼の言行は一致せず、其の性格の薄弱なことを示したけれども、高等の學術及び教育に關する彼の意見には當時の一般の思想よりも餘程優れたものがあつた。

エラスムスの  
教育意見

エラスムスは幼児の教育に於て先づ養護及び體育上の注意を必要とし、課業としての教授は七歳から始むべく、それ以前には遊戯を利用して文字を覚えしめ、又宗教上の形式に馴れしめることに止めることを適當とし、七歳に達しないものは特に溫和な方法で取扱ふべきものとした。尙彼は私教育と公共教育とを比較し、後者に於ては良教師を得難き缺點ある外、教師の注意が多數の生徒に分たれ、又惡風の傳播し易いことがあるが故に、私教師を聘して五人又は六人の兒童を教へしめる方法が最も適當であると云つて居る。彼は又教授の任務を言語と事物との知識を傳へるに在りとし、且言語の知識が事物の知識に先立つことを自然の順序とし、又言語に於て

はギリシヤ、ラランの二言語を先とすべきことを主張し、多くの複雑な文法上の規則を覚へしめることなく、善い興味ある書を講讀せしめ、實例について模倣せしめることを至當とし、而も單なる形式上の模倣を排し、眞の模倣を精神的同化と解し、蜂の行動に於て大に學ぶべきものがあると考へた。蜂は其の蜜の材料を單に一種の草木から集めるものでなく、種々の花に於て求める、而も其の得るものは單に原料に止まり、蜜其のものは更に其の口及び内臓に於て之を製するのであるから、吾人は之を食しても一定の花の香味を感じる事が出来ぬ、古代を模倣することも亦斯かる仕方に依らねばならぬと云ふのである。事物の知識としては地理、歴史、博物に關するものを價值ありとし、而して之は科學の源と云ふべきギリシヤ學者の著書に基いて學ばしむべきものとし、更に宗教的陶冶については、主に十四歳以後に始め、基督及び其の他賢明な人の生活、教育者自身の模範によつて導き、又自然界を觀察して神力の偉大なこと、其の慈悲の宏大無邊なことを悟らしめ、神は決して之を信するものを見棄てないから、幸福な人は勿論、不幸な人も其の状態を自己の矯正發達の爲めに神が加へる所の懲戒と考へて、之に

感謝すべきことを悟らしめねばならぬと述べて居る。

## 第二章 宗教改革と教育

### 第一節 宗教改革と人文主義

(一) 兩者の性質上の差別 十五世紀は過渡期に屬し、一方に於ては尙中古と連關し、而も他方に於ては既に近世文化の道に進入して居た、故に新舊分子は此の時期に於て烈しく軋轢し、十六世紀の初めに至つて遂に一大爆破を見るに至つた。

腐敗した寺院に對する反抗は中古時代の末に於て既に始められた、即ち十四世紀に於てイタリーの人文派は寺院攻撃の聲を高め、以後十六世紀に至るまで之を繼續した。然し斯かる攻撃は同國に於ては實地の改革運動を生ずるに至らなかつた。イタリーに於ける人文派は多くスコラ哲學を棄て、古文學を用ひたと同時に基督教をも棄てたのである。然るにネーデルランド及びドイツに於ける人士は斯かる極端の傾向を取らなく、着實で而も確かな行動を選んだ。前に述べた如く共同生活同胞團は嚴格な節

宗教改革と人文主義との性質上の差別

制的生活により基督教の精神の實行を努め、一般人民をして聖書に依り眞に歸依の情を有するに至らしめようとし、又人文學派は僧侶の腐敗を痛撃したけれども、之が爲め基督教を棄てることなく、其の新たに得た所を寺院の爲めにし、其の不良の傾向を矯正し、之を昔日の純粹な形に歸らしめようとした。斯くして改革運動の準備はドイツに於て成り、其の實際の運動は一五一七年ルータールによつて開始せられたのである。

宗教改革と人文主義とはスコラ哲學に反對し、寺院の腐敗を攻撃したことに於て一致し、兩者の代表者は一時提携して共同の敵に當つた。而もルータールの目的として居た所は決して人文主義の思想と一致するものでなかつた。人文主義は美文學を根柢として生活及び寺院をも改造しようとし、ルータールは純粹な聖書の語に依る眞實の歸依心を人生の目的とした。故にルータールの名聲が高まり、其の主張の廣く宣傳されるに従つて古文學は次第に其の勢力を失ひ、エラスムスの名は之により壓倒された。而して斯やうにルータールの運動をして人文主義に比して優勢ならしめたのは、之が單に理論に止まらず、又學者間の事柄とし止まることなく、全國民の生活に

宗教改革家と  
人文學者

關係したからである。人文主義の運動は其の性質に於て貴族的であつた。高等の文藝は之に由り發達し、古典學者は之について高尚な嗜好を生じ、高等の學校は之に由り古代の價值ある思想を知ることが出來たけれども、國民の多數は直接其の恩惠を受けることなく、眞の國民教育は之に由つて殆ど影響されなかつた。然るに宗教改革は全國民の生活改造に關し、一般人民の直接の利害に關係した。之は或る意味に於ては貴族的人文的教化に對する反動であつた。改革運動者中には高尚な教化及び文藝を惡魔の仕事とし、神の言語を理會するには學識を要しないと唱へるものがあり、其の結果一時殆ど總てのドイツ大學に於て人文學は大に衰へ、エラスムスをしてルータール主義の支配する所には學術は絶滅すると叫ばしめるやうになつた。然し之は反動的傾向の一時極端に走つた爲めであつて、全體について見るときは宗教改革は文化に反對するものでない。寧ろ國民的覺醒の象徴であり、ラテン文藝に對しチュートン文藝の勃興を促した。獨斷説及び教權に對する自由精神の發揚及び理性的活動の増大である點に於て宗教改革は人文的運動と共通な性質を有して居る。モンローの云ふ通り「宗教改

革は、文藝復興に於て發芽して今や宗教上の事柄に連關せしめられるに至つた理性作用の連續的擴張に外ならぬ。

(二) マルチン・ルーテル (Martin Luther 1483-1546) 宗教改革と人文主義との性質上の區別はルーテルの性格及び彼と人文派との關係を見ることで益明かになると思ふ。之についてバウルゼン教授は次のやうに述べて居る。

ルーテルが人文派と提携したのは其の直接の目的を一にして居たからである。然し之は一時のことで、彼は到底フツテン及びエラスムスと一致するを得なかつた。彼は深い宗教心を有し、神にまでの彼の關係を其の生活の中心とし、超絶的世界に生活し、古い寺院の指示した道に於て神意に適ひ、寺院と平和を保ち、其の熱心な信者として其の教を奉じ、之に反抗するものを惡んだ。而も彼は此の道に於て其の求めた平和を發見し得なかつた。彼は先づ寺院の教に於て大なる缺點の存することを發見し、漸次之と隔離するに至つた。即ち彼は哲學及び神學の研究を進めるに従ひ、寺院の教が聖書の教と一致しなく、前者にはアリストートルから採られた多くの不純分子の附加されて居ることを發見した。アリスト

ル・テールの性

バウルゼン教授の意見とルーテルと寺院の教義

ートルの哲學は自然主義を唱道し、聖書は出世間的である。故に前者を用ふることは甚だしく純粹の基督教義を晦ますことになる。眞の平和は決して斯かる混合の教に依り求められるものではない。出世間的に神の慈愛に對する信仰に於て求めるより外に道がないと確信するに至つた。且彼の考へた所によると、教義を世俗的とし、哲學によつて信仰を支持し又は指導しようとした爲め、寺院は自ら俗情を發し、王侯に使役せられ、金錢の爲めに其の神聖な職務を誤用するに至つたのである。斯くしてルーテルは基督教國民の爲めに其の精神上的の束縛を除去することを自己の任務とし、自然主義を排し、唯人の自己の本心に基く信念のみが神意に適すると云ふ聖書の教義を確立しようとして、スコラ哲學とローマ寺院の主權とから成立つた全組織の崩壞を期したのである。

前に述べた通りルーテルは人文派と其の直接の目的を一にした。兩者共に寺院制度を嫌ひ、ローマ及び其の壓迫手段を惡んだ。然しルーテルの人生觀及び世界觀は人文主義よりも寧ろ當時の寺院の教に近かつた。其の眞の關係は次のやうに見ることが出来る。ルーテルは寺院の教義が

ルーテルと人文派との共通點と差別點

採用した異端的哲學を全く除去しようとし、人文派は之に反して寧ろ異端的要素を純粹な形に於て保持する爲め基督教的分子を除かうとしたのである。人文學派は、其の最も深い内的性質に従へば自然的世界觀に傾き、出世間的思想を離れた近世の自然科の依つて發達すべき道を指示した。然るにルーターは尙中古時代の怪談、妄想の世界に留まり、最も粗野な形に於ける農民の迷信を懐いて居た、自然科学的考察法は彼の知らない所であり、啓蒙は其の恐れた所である。又人文派の現世的精神、其の快樂的生活及びストア流の道德説はルーターの非基督教的として排斥した所であり、基督教に於ける罪障、慈悲の觀念は人文學派の顧みなかつた所である。

斯かる反對點は共同の目的の爲め一時潜伏し、急進的人文派は熱心にルーターを援助した、而も彼は彼等と事を共にすることの無効なことを見て遂に獨力事に當り、自己の主義の貫徹に努めた。而してルーターをして全國民を激勵する如き非常に勢力ある地位に立つに至らしめたのは、彼が其の事業に一身を捧げたことに由る。人文派は其の關係した事

ルーターと其の事業

業について、辯論上には熱心であつたに拘はらず、謹嚴な思考及び苦心を缺いた、彼等は詩文を以て遊んだと同様に寺院改革の思想を以て遊んだ、彼等は名譽尊敬、靜平、安樂を其の行動の目的としたのである。然るにルーターは事業其のものを見、之を神の事業とし、従つて其の神聖であることを確信して邁進した、人は往々彼の傲慢であつたことを非難する、實際人の前に屈し、人知に對し、人爲の秩序に對して敬服する如きはルーターの本質に於て全然缺乏して居た、而して彼が反抗者の地位からして新寺院の首領の位置に進むに従ひ、執拗、傲慢の分子を混入し、彼をして不正理の壓迫に對して、假令其の謙遜の情は耐忍して之を受くべきことを忠告しても、到底服従することが出来なく、如何なる價を拂つても之を除去しようとするに至らしめたのである。

## 第二節

ルーター、メランヒトシ及びブーゲンハーゲンの教育上の功績

(一) ルーターの教育意見  
ルーターの急激な言論により生ぜしめられた

ルーターの教育思想

國民の興奮は靜平な勤勉を要する學術の上に一時破壊的影響を及ぼし、大學及び其の他の學校は甚だしい不振の状態に陥つた。然もルーテルは決して教育を輕視しなかつた。彼は基督教界の弊風を一掃し、國民をして眞の信仰的修養により神意に適する生活をなさしめるには大に教育の力を要することを悟つて居た。寺院改良の基礎は家庭及び學校に於ける基督教の兒童訓練に在るから、家庭の非宗教的状況及び無能の教師は寺院を腐敗せしめる原因となるものであるとし、學校の廢頽は風俗の破壊及び全社會の衰亡を招き、宗教界刷新の事業を無効に歸せしめることを確信し、教育を獎勵することにより其の主義の定立及び普及を圖つた。彼の事業の直接の結果が彼の期待して居た程に満足なものでなかつたことは、益此の念を深からしめたやうである。故に彼は其の説教に於て、聖書の説明、演説、題文に於て教育意見を發表し、時には兩親に對し、時には上官及び教員に對して適切な忠告を試みた。殊に彼がドイツの主な都市の長官及び議員に送つて學校教育の必要を論じた文は當局者を覺醒せしめる上に有效であつた。

此の文に於てルーテルは先づ學校設立の必要を説き、次のやうに云つて

學校設立の勸告

居る、父母の中には其の子女を養育し得るに拘はらず之を行ふ誠實心を缺き全く之を放棄するものがある、而して其の子女は吾人と共に同一都市に生活する。正義及び基督教的慈愛の精神は到底彼等が無教育に成長し且他の幼者に悪影響を及ぼし、従つて又大都市を腐敗せしめることを默過するに忍びない。又大多數の父母は子女を教育する技能を有しないのである、之を有するものも他の業務及び家事の爲めに、子女教育に必要な時及び場所を有しないと云ふ事實がある。故に兒童を共同に指導する教育者を必要とする。其の他幼兒を残して死亡する父母が多く、而も自ら兒童を有しないものは其の教育に關係する念を有しない。此のことは幼者の教育について特に當局者の最大の注意と努力とを要する云々。ルーテルは學校教育の任務をギリシヤ語、ラテン語、ヘブライ語及び其の他の自由藝術の知識の傳播に置き、國語で聖書及び神の語を教へることが出来るならば他の言語を要しないと云ふ思想を頑冥固陋のものとし、言語を神からの高尚優美な贈物と見、基督教の福音は神靈な精神から來るものであるけれども、言語の媒介を要し、言語により受納し保持すべきものであると云ひ、ヘブラ

イ語及びギリシャ語は最初に聖書の爲めに選ばれた言語であるから他語よりも一層貴い言語は恰も寶刀を藏める鞘の如く、寶物を保存する匣の如きものである。實際言語の衰頹した頃から基督教の福音及び信仰は次第に衰へ、言語上の無知は基督教を甚だしい悲境に陥らしめたと述べ、更に社會の世俗的制度を保持するに適する善良有爲の男女子を養ふことをも學校の務とし、男子は土地人民を支配し、女子は家を整理し、兒童及び僕婢を教導すべきもので、之には正當な教授訓練を必要とする」と論じて居る。

ルーテルは既に強制的教育の思想を有して居た。之について彼は次のやうに云つて居る。「一國の主權者は其の臣民を強制して其の子女を學校に入學せしめねばならぬ。彼は牧師、法律家、書記、醫者、教員等の職務に適するものを養成する務を有するが故に、又教育を強制する權利をも有するのである。彼は戰爭の際其の臣民に弓矢を取つて立つことを強制し得るならば、之に其の子女を學校に送るべきことを一層強く命令することが出来る。何故と云ふに都市及び王侯の領地を荒し、有爲の人を掃蕩しようとする惡魔に對して困難な戦を開く必要があるからである。」ルーテルは教育に重を置いて

ルーテルの強制的教育思想

たから又能く教職の貴いことを解して居た。即ち彼は教職を牧師の職に次いで最も必要で且最も大なるものとし、而も其の効果の顯著なことに於ては牧師の職に優ると云ひ、自己の子女をすら教導しないものゝ多い世に他人の子女までも善く教導するのは最高道德の一として見るべき所であると云ひ、牧師に選まれるものは初め先づ教職に従事すべきことを主張した。尙ルーテルは聖書を翻譯することにより、ドイツ國民をして國語により聖書を読むを得しめ、且ドイツ語の發達の基を開き、又大小問答教を著述して、基督教の主要部分を一家の主人が其の僕婢に教ふるに適する如き形に於て總括したことは、普通人民の教育及び一般に文化の發達の上に資することゝ甚だ多かつた。

メラnhiton  
とルーテル

(二)メラnhitonと中等教育の發達

フイリツプメラnhiton (Philip Melancthon 1497—1560)はルーテルの最も信頼した補助者であつた。而も其の性質はルーテルと全然異なつて居た。メラnhitonはルーテルの如き熱情偉大な氣力、頑強な性及び斷行の力を有しなかつたけれども、高尚な人格、適度の性調停の能及び慎重な思慮を有し、又特に非凡の學才を具へ、當時の總

ての教化的要素を收得し、且之を一層高い目的に達する階梯として更に深く神靈な理を究めようとし、斯くしてルーテルと提携するやうになつた。ルーテルの性が急進的であつて大事業の創始に適したものとすればメランヒトンは溫和、漸進の性を有し、事業の完成に適したのである。而して両者は深く其の性能の互に相補充することを認め、其の事業に於て分離し得ないことを自覺して居た。

メランヒトンはドイツのブレッツタンに生れ、幼にして古典を學び進歩が著しかつた。十二歳でハイデルベルヒ大學に入り、後チュービンゲン大學に移り、一五一四年同大學の教授となり、ラテン及びギリシヤ文學家について講演し、自ら辯證法、哲學、數學、法律、醫學、歴史及び神學を修め、驚くべき多方的知識を得、而も其の孰れについても深い研究を行つた。彼がドイツの教師と呼ばれるのは此のことに由るのである。一五一八年彼はウキッテンベルヒ大學に招かれ、同所に於て親しくルーテルに接し、以後二十八年間共に宗教改革の事業に盡瘁し、此の小大學をして全歐洲を動搖せしめた所の大運動の根源たらしめたのである。

メランヒトンの  
大學及び中  
學の教育

ウキッテンベルヒ大學に於けるメランヒトンの成功は實に大なるものであつた。學生は諸方から集り、嘗にドイツ人のみならず、英、佛、伊、ポーランド、ハンガリー、デンマーク及びギリシヤからの學生も聽講し、其の數二千名に達した時があつた。而して彼の性の親切であつたことは學生の信頼を受け、學術以外の事柄についても彼等を指導し、薰陶することが多かつた。彼は大學の改良に意を用ひ、スコラ哲學を斥け、言語、哲學、物理、數學に於て學生を指導し、演説及び討論的練習の規定を設け、得業生及び教師たる條件を定めた。尙彼は大學の繁榮がラテン學校(中學校)に於ける豫備教育の整頓に由ることを見て、其の教育の改良にも意を用ひ、之に關する有益な忠告を諸地方に與へた。彼は善い意味の人文學派に屬し、非宗教的傾向を有した人文主義と非學術的傾向を取つた信仰とを調和し、科學と宗教との結合に盡力し、自ら多くの教科書を編纂した。又彼は大學に於て教育家の養成に意を用ひた。彼の指導を受けて後に有名な教育家となつた人が少くない。要するにドイツの中學教育はメランヒトン自身の直接の力によつて大に進められた外、彼によつて養成せられた教育家により、著しい進歩をなすに



トロツチエン  
ドルフ

至つた。次に其の二三の主な教育家を擧げて置く。

(イ) トロツチエン・ドルフ (Troitzendorf 1498—1556) 彼は一五一八年より五箇年間メランヒトンに師事し、一五三一年より二十五年間ゴールドベルヒの學校に初めは教師として後には校長として務め、同校をしてドイツの東方に於ける中等教育の中心とならしめた。彼の教育方針は學校を寺院の從屬者とし、神學生たるものに必要な豫備的修養をなさしめ、廣義及び狹義に於て寺院に忠實なるものを養成するに在つた。故に宗教教授は全教授の中心とせられた。又ラテン語は活語として取扱はれ、講讀はラテン書について行はれ、討論及び談話に於ても同語が用ひられた。彼は又學校に國家の形式を與へ、生徒中から學校管理者として國家の官吏に相當するものを選出せしめ、又學校裁判の制を設け、生徒の失行に對しては校長の下に生徒中から選まれた委員により之を裁判することにした。

スツルム

(ロ) ヨハン・ネス・スツルム (Johannes Sturm 1507—1589) スツルムは直接メランヒトンに師事したことはなかつたが、書簡により屢其の教を受けたのである。一五三七より彼はストラスブルヒ市からの招聘に應じて同市に到

り、一中學校(ギムナシウム)を設立した。此の校は一五七八年頃になつて非常に盛大となり、東方のゴールドベルヒの學校に對して西部に於ける中等教育の中心となつた。スツルムは信仰、知識、言語の三點に於ける發達を教育の目的とした。即ち學識のあり、辯論に長じ、信仰心の厚いものを養成しようとした。而も彼の最も貴重した學科はラテン語であつた。彼は之を當時の他の教育家のやうに寺院の爲めに教ふべきものとしないうで、それ自身に於て價值あるものとし、之を活語として取扱ひ、國語を輕視し、寧ろ故意に其の使用を抑止したのである。

ネアンダー

(ハ) ミハエル・ネアンダー (Michael Neander 1525—1594) ネアンダーはゾラウに於ける商家に生れたが、性質が商業に適しなかつたので學問に志し、一五四三年ウキツテンベルヒ大學に入り、ルーテル及びメランヒトンの教を受けた。一五五〇年から彼はイルフェルドの僧庵學校の管理者となり、以後四十五年間最も忠實に其の務を盡し、同校をして其の質に於て當時の最も優秀なものとならしめた。彼は當時の他の教育家と同様に敬虔心の惹起を學校教育の重要目的とし、又ラテン語をも貴重したけれども、歴史、地理及

ザオルフ

び自然科学にも注意し是等を學科中に加へた。彼はメランヒトンの門人中最も多く其の師の教案の實科的方面に留意した人である。  
 (二) ヒエロニムス・ゾオルフ (Hieronymus Wolf, 1516—1580) ズオルフも亦メランヒトンの門人である。一五五七年アウグスブルヒのギムナシウムに聘せられ、二十三年間其の管理に盡瘁し、一時衰へた同校をして再び盛大ならしめた。彼も亦古語に重を置いたが、之をそれ自身に於て又宗教上の目的の爲めに價值あるものとしなく、古代の世界に入込む門戸として貴び、眞に古代の世界を理會したものを眞に學識あるものとし、學識の効果は、心を迷想及び謬見より自由にし、意志を悪い欲望から清淨にし、正しい理會に基いて言語を使用することを得しめ、正實な精神及び道德心を有せしめるに在るとした。

ブーゲンハーゲンと國民教育

(三) ヨハンネス・ブーゲンハーゲン (1485—1558) メランヒトンをドイツの中學教育發展の新时期を開いた人とするならば、ブーゲンハーゲンは國民教育の基礎を固めた人である。彼はルーラルの文を読んで大に感ずる所あり、ウキッテンベルヒ大學に赴き、ルーラル及びメランヒトンに就て學び、後

ブーゲンハーゲンの功績十箇條

同大學の教授に擧げられ牧師の職を兼ねるやうになつた。彼は學識高く思考力鋭敏であつたのみならず、國民生活上の必要を考察し、特殊の關係及び事情に應じ又能く聖書の主旨に基いて新らしい生活規定を立て、教育を人の高い發展の確實な根據たらしめる技能を有して居た。此のことは彼が諸邦から招かれ其の委託によつて編成した寺院規定によつて明かに知ることが出来る。ドイツ人は彼の教育上の功績として左の十箇條を擧げて居る。

第一、基督教的兒童教育を両親及び上官に對して神が命令したものの、一とし、小兒が洗禮を受けた後必ず之を行ふことを彼等の義務と感せしめたこと。第二、僧俗の制度を支持する上に學校の必要なことを主張し、従つて諸地方に學校の設立を促したること。第三、僧侶及び上官の嚴密な監視の下に一般人民の教授の道を開き村落をも除外しなかつたこと。第四、成人の補習教育の爲めに有能な教師の招聘を督勵したこと。第五、之に適當な俸給を與へ、之に反して不良の教師及び學校の淘汰を命令したこと。第六、學校に於て適度の授業料を徵集することを許すと同時に貧民には之を免除

せしめたこと。第七、ラテン學校に於てはラテン語を主要學科として嚴に之を修めしめ、其の代りにギリシヤ語及びヘブライ語を輕減すべきものとしたこと。第八、神の言葉についての教授を土曜日に行ひ、寺院に於ける教授と密接に關係せしめたこと。第九、寺院唱歌を作り合唱を實習せしめたこと。第十、大學生たる價值のあるものを選拔し、學費を給して其の學業を補助したこと。

### 第三節 教育に於ける宗教改革の影響

宗教改革が如何に學術及び教育の上に影響したかは以上述べた所で畧知ることが出来ると思ふが、尙參考として左にカール・シュミットが其の教育史に於て述べて居る所を擧げることにする。

新教の創唱者は其の思考及び行動の中心を宗教の改革に置いた。而して彼等は聖書を信仰の唯一の根據とし、従つて良心上の束縛を脱し、神と直接の關係を保つに至つた個々の人をして神の語を熟知せしめようとしたから、自然に讀方、書方及び宗教の教授を普及する必要を感じた。彼

教育に於ける  
宗教改革の影響

カール・シュ  
ミットの意見

等は即ち既存の學校を改良し且國民學校を設立する動機を作らざるを得なかつたのである。女學校の設立及び既存の市民學校の教案中に宗教科を加へる如きは彼等の改革的精神の第一の行動であつて、此の行動は新發展の萌芽を包含し、中古の學校の思想を脱離する準備をなした。彼等により新教的高等學校の第一の基石が置かれ、國民學校の豫備が爲され、學校は神の領土に於ける主要機關と認められるやうになつた。教育界に於ける新傾向は改革家に由り誘起せられた、而も彼等は之を十分に生育せしめることが出来なかつた、彼等の行動は時勢の制限を脱し得なかつたのみならず、屢其の目的と一致しない方向に傾いた。

改革家は學校を寺院の必要な機關とした、故に其の熱心な努力は、嘗て人文派の指導の下に寺院の束縛を脱しようとし、一部は能く此の目的を達した學校を再び寺院の下に立たしめることに向けられた。ルーテル自身も學校を唯布教傳道に従事するもの、準備をなす所と見做した。要するに改革家は學校教化を唯寺院に關係する限りに於て價值あるものと見たのである。而して彼等の斯かる思想は能く其の時代の世界觀

と一致したから廣く認められ、寺院は再び心的陶冶の監督者となり、改革せられた寺院は十六世紀に於ける教化及び科學の中心となり、一切の進歩は茲に其の源を發し且之によつて保持せられた。基督教の始めて其の勢力を現はした時、其の宗教は人の總ての活動の基點であつたが、宗教改革の時期に於ても宗教は心的生活の個々の範圍を判斷する最高中心となり、有爲の人は寺院の從僕であつた、彼等の手に於て學校は反動的改革に對して最も確實に保護せられた。而も一時代に於て進歩として見るべきものが他の時代に於て必ずしも進歩でなく、有益なものも永く其の形に於て止まるときは却つて弊害となることが少くない、故に改革家の手に於ては進歩と見られたことも其の後繼者の手に於ては退歩を示すに至つた。學校は久しからずして寺院に從屬することの不利益を感じた、神學的爭論、黨派的嫉惡は斯かる關係から自然に學校にも入込むやうになつた。學校が寺院に從屬したことは最近に至るまで新教の學校の自由な發展を妨害した、而して此の關係の全然斷たれた時、學校は始めて其の十分な效果を示すことが出来るに至つたのである。

宗教改革の本質及び改革家の精神は、各個人をして自身に其の神と接近するやうにならしめ、從つて彼をして其の宗教的關係を意識し會得せしめるに在つたから、其の教化及び學校に關する注意は當然社會の總ての階級に對して加へられた、即ち改革家は全國民をして學校教授の恩恵に浴せしめようとした。而も彼等は自身直接に國民學校を組成し得なかつた、彼等は唯其の組成についての要件例へば國語、聖書、寺院唱歌の如きもの、發達に力を用ひ之を獎勵したに過ぎない。彼等は高等の學校を其の直接に關係すべき所のものとし、之に市民陶冶についての一般的目的の外、特に新教義を保護し確定する目的を有せしめようとした、即ち彼等はラテン學校を經營し、其の學科中に新教義に基く宗教教授を加へたゞけであつた、尤も他の學科例へばドイツ語、ドイツ文學及び自然科の如きは當時まだ學校の學科として用ひられる程度に達して居なかつたのである。斯くの如く改革家は人文的基督教的學校を支配することによつて其の時代の支配者となり、寺院及び學校の爲めに適當の教師を養成し、又有爲の政治家をも出した、而して之は直接實際に必要と感せられ